

平城京左京二条二坊十二坪

奈良市水道局庁舎建設地

発掘調査概要報告

奈良市教育委員会

平城京左京二条二坊十二坪

奈良市水道局庁舎建設地

発掘調査概要報告

奈良市教育委員会



発掘区と平城宮跡



出土施釉瓦

序

古都奈良におしよせる開発の波は近年とみにその激しさを増し、奈良地域の地下に眠る平城京跡をも翻弄するかの勢いで押し寄せております。とりわけ大宮通りを中心とする市街化区域の変貌は目を見張るばかりであり、早急に保存対策を講ずる必要に迫られております。こうした中で、市庁舎北側での新水道局庁舎の建設が提示されたのですが、この地は平城京の中核部である平城宮にほど近く、これまでの周辺の発掘調査例からみても貴重な遺跡が存在することは十分に予測されました。そのため、市水道局の協力のもとに発掘調査会を組織し、遺跡保護の立場から建設前に発掘調査を実施する運びとなったのであります。

発掘調査の結果、これまでに例のない貴重な成果を得ることができ、建設にあたっては建物位置の変更を要望し、遺跡の保護を図った次第です。今後、この地域におしよせる開発の波がその速度を増すことは明らかであり、さらなる保存対策が必要であると考えております。

最後になりましたが、発掘調査にあたり御尽力を賜りました発掘調査会委員の方々、市水道局、奈良国立文化財研究所をはじめ関係諸機関の皆様に対しまして厚く御礼申し上げます。

昭和59年 3月

奈良市教育委員会

教育長 藤井 宗治

序

奈良市が文化財行政のために専門職員を配置して、本格的に調査を始め
てから日もまだ浅い状況である。しかし平城京域を中心に着々と調査成果
をあげて、未解明であった京域の実態も逐次明らかになりつつある。

奈良市水道局の庁舎建設用地が決定し、その位置が京域の中でも宮域に
隣接するところから「平城京左京二条二坊十二坪水道局庁舎建設予定地発
掘調査会」が組織されて、事前調査が実施された。調査中に暴風雨の襲来
などの厄にあったが、関係各位の努力により無事終了し、本報告刊行の運
びとなった。

二条大路に面して回廊状建物で囲まれた正殿や苑池をもつ遺構が検出さ
れて、その重要性が確認された。そのため主要遺構の上に庁舎を建築する
ことを避け、前庭部とするなどの保存処置を関係機関のご協力により実現
することができた。

今回のこの調査は左京二条二坊十二坪の一部の地域にすぎなかったが、
十二坪の地が築地塀で区画され、その中央に正殿を置きそれを囲んで回廊
状建物がめぐらされるなど、私的施設とは考えられない様相をもつ遺構で
あることが明らかとなり、今後、この地域の開発に対応を迫られる調査結
果であった。

宮隣接地域の状況は未解明に等しいところから、その性格解明や行政対
策に本報告書が活用されれば幸とするところである。

昭和59年 3月

平城京左京二条二坊十二坪

水道局庁舎建設予定地発掘調査会

会長 伊達宗泰

例 言

1. 本書は、奈良市法華寺町266番地の1他において行なった奈良市水道局庁舎建設にさきだつ発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、中央発掘区の調査を昭和57年5月11日から同年12月18日まで、南発掘区の調査を昭和58年11月28・29日に行なった。
3. 発掘調査は、奈良市水道局の委託を受けた平城京左京二条二坊十二坪水道局庁舎建設予定地発掘調査会（会長 伊達宗泰）が行ない、現地を奈良市教育委員会文化財課 西崎卓哉、中井 公、篠原豊一が担当した。調査会の構成は本文第1章に記した。
4. 本書の作成には調査担当者全員と奈良美穂があたり、全体の討議をもとに分担して執筆した。各々の担当は目次に記した。
5. 発掘調査及び本書の作成にあたっては奈良国立文化財研究所の御教示を得た。とりわけ、木簡の釈読には同平城宮跡発掘調査部史料調査室、遺物の保存処理には同埋蔵文化財センター遺物処理研究室の御指導を得た。記して感謝する。
6. 本書の図版のうち、木簡は奈良国立文化財研究所 佃 幹雄氏、航空写真はアジア航測株式会社の撮影になるものである。
7. 発掘調査及び出土遺物の整理作業には下記の学生諸氏らの参加、協力があつた。
大野佳子（大阪樟蔭女子大学卒業生） 行天優貴子（四天王寺女子大学卒業生）
吉田洋恵（帝塚山大学卒業生） 日高しのぶ（奈良女子大学卒業生） 谷沢 仁
西田辰博（以上奈良大学卒業生） 奈良美穂（奈良大学卒業生、現奈良市教委）
和田素子（奈良女子大学） 亀山 隆、草原孝典、杉森節子、鈴木景二、鈴木雅也
鄭 喜斗、徳竹雅之、奈良俊哉、橋本雅裕、長谷川一英（以上奈良大学）
大橋勝彦、奥村暁美、柴田 悟、福本仁志、三好孝一、山元敏裕（以上花園大学）
天井九秋、伴 昌彦（以上立命館大学）
8. 本書の編集には西崎卓哉があつた。

本文目次

I 序 章	(西崎卓哉)	1
1. 調査の契機と経過		1
2. 調査の概要		2
II 検出遺構	(西崎卓哉)	4
土 層		4
1. 条坊遺構		4
2. 十二坪内の遺構		6
III 出土遺物		13
1. 木 簡	(西崎卓哉)	13
2. 瓦 類	(中井 公)	22
3. 土器類	(奈良美穂)	30
4. 木製品	(篠原豊一)	39
5. 金属製品・石製品	(篠原豊一)	44
IV 結 び	(西崎卓哉)	45
1. 占 地		45
2. 時期区分		47
3. 結 語		50

挿 図 目 次

第1図	平城京の条坊と調査地	2
第2図	発掘区の位置と周辺の環境	3
第3図	中央発掘区西壁土層図	4
第4図	南発掘区平面・西壁土層図	5
第5図	中央発掘区検出遺構配置図	7
第6図	S X 29平面・立面図	10
第7図	S E 35平面・立面図	11
第8図	S D 03-A期出土木簡	15
第9図	S D 03-B期出土木簡 1	17
第10図	S D 03-B期出土木簡 2	19
第11図	S D 02出土木簡	20
第12図	S E 34・S E 32出土木簡	21
第13図	軒丸瓦 1	23
第14図	軒丸瓦 2	24
第15図	軒平瓦 1	25
第16図	軒平瓦 2	26
第17図	鬼 瓦	27
第18図	S D 02出土土器 1	31
第19図	S D 02出土土器 2	32
第20図	S D 03-A・B出土土器	34
第21図	S K 38、S E 31・32・35、S B 10・19出土土器	35
第22図	墨書土器	37
第23図	陶 硯	38
第24図	土製品	38
第25図	S D 02・03出土木製品	40
第26図	S D 03、S E 31・32・35出土木製品	42
第27図	S D 03出土木製品	43
第28図	金属製品、石製品	44
第29図	十二坪の占地概念図	45
第30図	遺構変遷模式図(1)	48

第31図	遺構変遷模式図(2).....	49
第32図	遺構平面実測図.....	折込み

挿 表 目 次

第1表	検出建物一覧.....	12
第2表	出土軒瓦計数表.....	26
第3表	出土軒瓦の編年.....	29
第4表	墨書土器一覧.....	36
第5表	土錘計測表.....	38
第6表	計測座標表.....	46

図 版 目 次

巻首図版1 発掘区と平城宮跡

巻首図版2 出土施釉瓦

図版1	中央発掘区全景(1)	図版18	木簡(3)
図版2	中央発掘区全景(2)	図版19	木簡(4)
図版3	遺構(1)	図版20	木簡(5)
図版4	遺構(2)	図版21	軒瓦
図版5	遺構(3)	図版22	土器
図版6	遺構(4)	図版23	墨書土器
図版7	遺構(5)	図版24	木製品(1)
図版8	遺構(6)	図版25	木製品(2)
図版9	遺構(7)	図版26	金属製品・石製品
図版10	遺構(8)		
図版11	遺構(9)		
図版12	遺構(10)		
図版13	遺構(11)		
図版14	遺構(12)		
図版15	南発掘区全景		
図版16	木簡(1)		
図版17	木簡(2)		

I 序 章

1. 調査の契機と経過

奈良市では、現在の水道局庁舎（奈良市東寺林町38番地）が老朽化し、業務の拡大に伴って手狭になってきていることから、昭和56年5月1日に水道局庁舎建設準備室を設置し、新水道局庁舎の建設を計画した。計画は市庁舎が二条大路南一丁目に位置することから、近畿日本鉄道奈良線を隔ててその北側にあたる法華寺町266番地の1他に新庁舎を建設し、これと市庁舎敷地とを近鉄軌道下の地下通路で結ぶというものである。敷地面積は約5,000㎡、建物面積は1階部分で約900㎡ある。この予定地は平城京の条坊では二条大路と左京二条二坊十二坪に相当しており、これまでの周辺の調査例からみて、遺跡が良好な状態で存在していることは充分予測された。そのため昭和57年5月1日に「平城京左京二条二坊十二坪水道局庁舎建設予定地発掘調査会」を組織し、工事着手前に発掘調査を実施することとなった。調査会の構成はつぎのとおりである。

会 長 伊達宗泰（奈良市文化財保護審議会委員・花園大学教授）

委 員 工楽善通（奈良国立文化財研究所）、寺沢 薫（奈良県教育委員会）

冷水良彦（奈良市水道事業管理者）、中井利夫（奈良市教育委員会教育次長）

松島寿一（奈良市教育委員会社会教育部長）

事務局長 田辺征夫（奈良市教育委員会文化財課長）

事 務 局 児林啄真（水道局庁舎建設準備室長）、清水統裕（文化財課長補佐）

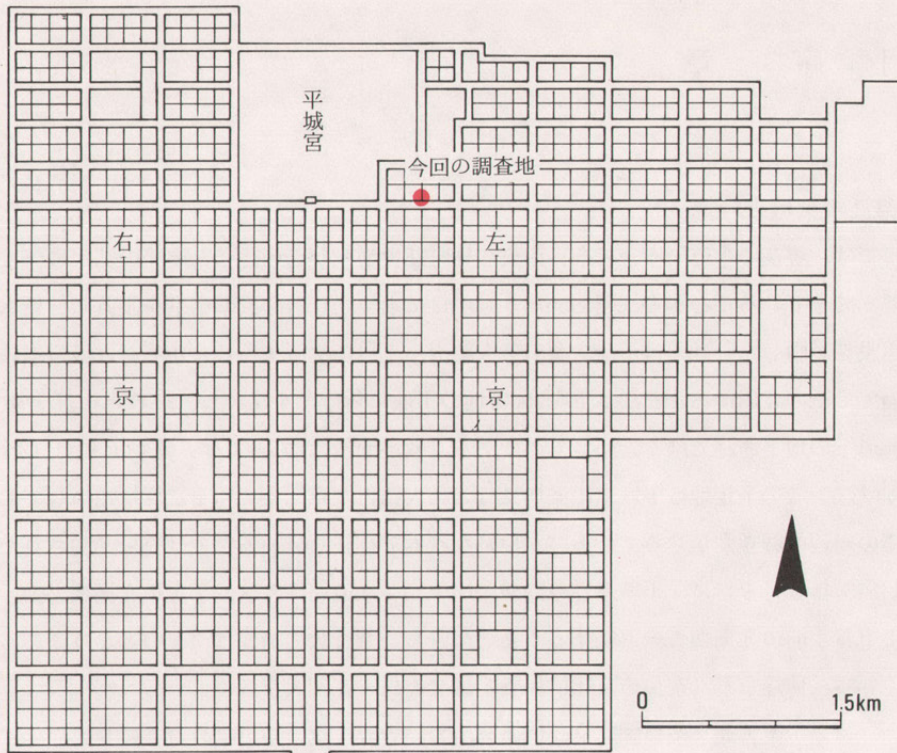
前川宏充（文化財課庶務係長）

※ いずれも役職名は調査会発足時のもの

発掘調査は昭和57年5月11日に中央発掘区を設定、重機による表土除去作業を開始した。調査中に台風の影響で発掘区が水没するなどしたが、10月16日に現地説明会を開催、11月18日にはセスナ機による空中写真測量を実施し、同年12月18日に埋め戻しを完了した。発掘面積は1,900㎡である。調査の結果、大規模な回廊状遺構、礎石建物、掘立柱建物、井戸、築地塀、二条大路北側溝などを検出した。これにより、十二坪内の様相の一端を明らかにしたが、とりわけ回廊状遺構はこれまでに平城京内では検出例がなく貴重な成果となった。

調査終了後、調査会では遺跡の重要性に鑑み回廊状遺構の保存を要望した。これを受けた水道局は、新庁舎の建設位置を当初計画より南へ変更し、駐車場下にその保存をはかることとした。

その後、昭和58年11月26日に市庁舎敷地との連絡地下通路掘削の立会調査を実施したところ、近鉄軌道下にも遺跡が遺存していることが判明した。そのため急抛南発掘区を設定、同28・29の両日発掘調査を実施した。これにより二条大路の南側溝を検出することができた。



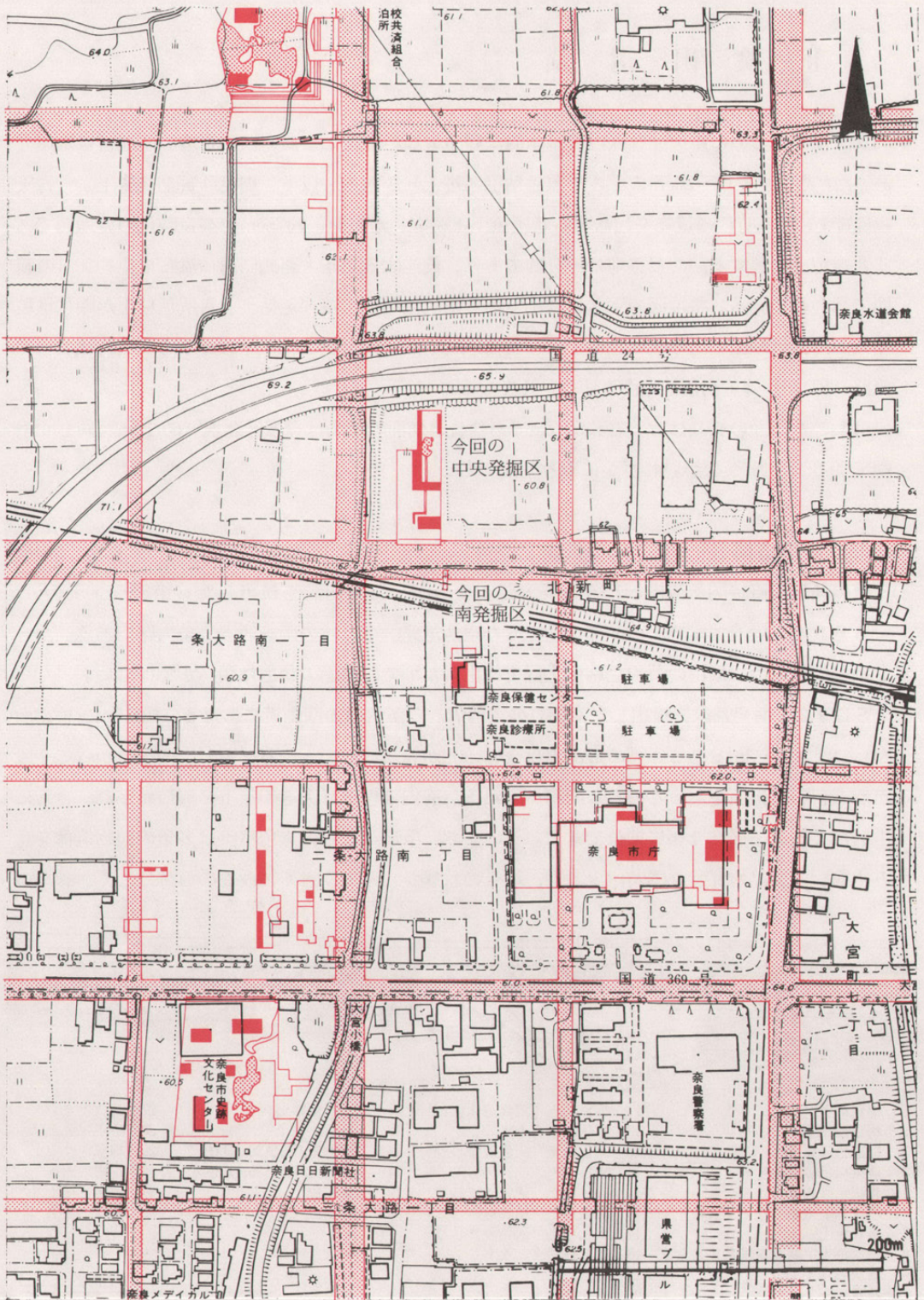
第1図 平城京の条坊と調査地

2. 調査の概要

調査地は奈良盆地の北辺に位置する沖積地であり、調査時には水田の状態であった。周辺の字名は「五双田^{ごそんで}」である。平城京の条坊では二条大路と左京二条二坊十二坪に相当し、調査地の南辺の水田畦畔は二条大路の痕跡をよく残している。また、調査地のすぐ西を南流する菰川は、当初、運河として掘削された可能性が指摘されている^(注)。

調査は、敷地のほぼ中央に発掘区（中央発掘区）を設定して行った。これは十二坪の中央からやや西よりの部分にあたる。調査の結果、築地塀に画された十二坪は一坪を分割することなく利用され、坪内には礎石建物やこれを取り囲む回廊状遺構などの建物群があったことが判明した。これらの建物群には奈良時代から平安時代初頭にかけて、大きく4期の変遷があったことがわかる。また、発掘区南端で二条大路の北側溝を検出し、その後に近鉄軌道下（南発掘区）で南側溝を検出したことから二条大路の幅員を知ることができ、これにより十二坪内の建物配置を復元することが可能となった。さらに、発掘区中央を蛇行する古墳時代の自然流路を検出したことにより、6世紀前後の奈良盆地北辺の状況を知る手がかりを得たことになる。以上の遺構からは、木簡、瓦、土器など奈良時代から平安時代初頭にかけての大量の遺物が出土した。

注) 岸 俊男「遺存地割・地名による平城京の復原調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市 1974



第2図 発掘区の位置と周辺の環境 (1/4000)

II 検出遺構

土層 はじめに中央発掘区内の基本的な層序について記しておく。調査地の旧地目は水田であったため、まず10~20cmの厚さで黒色粘土（耕土）がある。以下、褐色砂質土（床土）、青灰色砂質土、奈良時代の遺物を包含する暗灰色土と続き、地表面下約75cmで奈良時代の整地層である黄褐色土に達する。ただ整地は部分的であり、後述する二条大路北側溝に添って幅約10mの範囲で行われている。整地層の下には地山である暗灰色粘土、黄褐色粘土、青灰色粘土が順に堆積する。遺構は地山である暗灰色粘土及び黄褐色粘土面で検出した。また、後述する古墳時代の自然流路（SD46）は黄褐色粘土面を切り込んでいる。

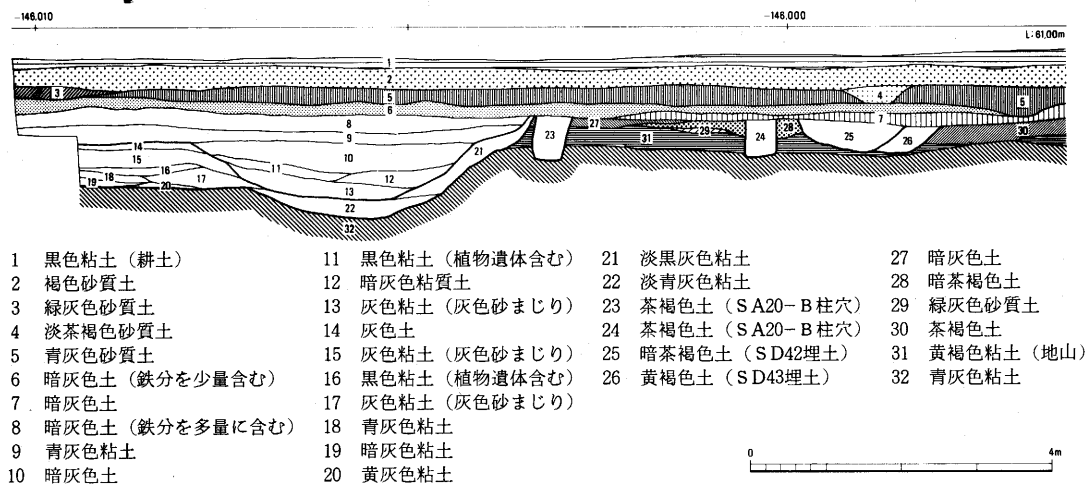
なお、水田面の標高はおおむね60.7mであり、遺構面の標高は発掘区北端で60.10m、同じく南端で59.85mと南へむかいわずかに下り勾配である。

1. 条坊遺構

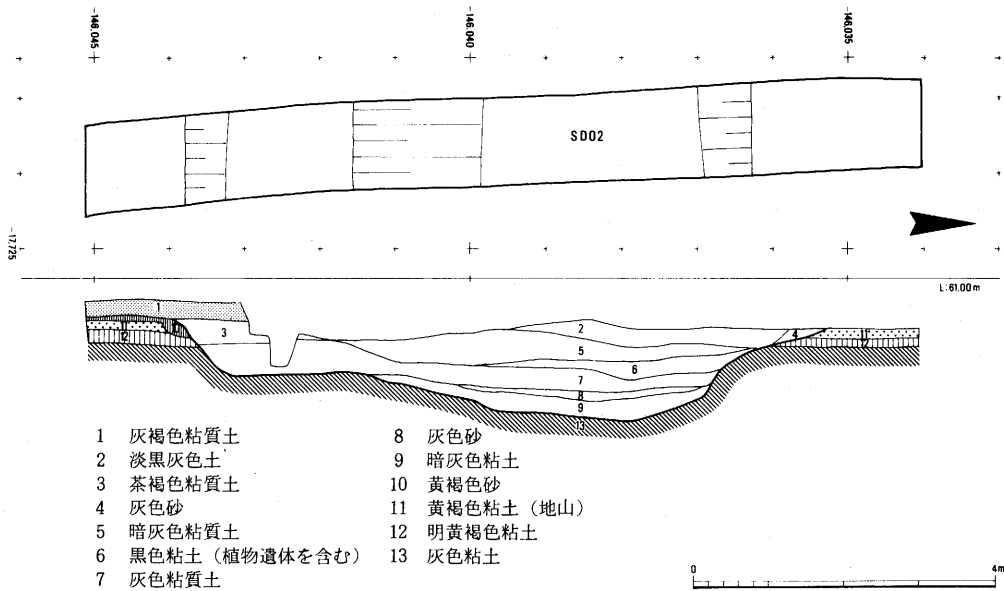
京の条坊に直接関る遺構として二条大路とその南・北両側溝を検出した（第3・4・5図）。

S F 0 1 南発掘区でその一部を検出した東西道路。十二坪の南を通る二条大路である。南・北両側溝をもつ。地山の黄褐色粘土上面で検出したので、路面の状態は明らかではない。

S D 0 2 南発掘区で検出した素掘りの東西溝。二条大路の南側溝にあたる。幅8.7m、検出面からの深さは1.3mである。溝の最深部は全幅の北から1/4ほどのところにあり、南へむかって一段テラス状の平坦面をもったのちに南肩へいたる。溝内の埋土は大きく上下2層にわかれ、さらに上層は2層、下層は4層に細分できる。このうち、下層第1層の黒色粘土は多量の植物遺体を含み木簡、木製品と瓦、土器が出土した。埋土の状態からみて、とくに改修の痕跡はなく、護岸の



第3図 中央発掘区西壁土層図 (1/100)



第4図 南発掘区平面・西壁土層図 (1/100)

施設もない。ところで、これまでの調査で知られている二条大路南側溝の幅員は約1~6m^{注)}であり、これと比較すると今回の溝幅8.7mはかなり広い。そこで、溝最深部と北肩との距離を折り返すと溝幅は約5.0mとなる。ここではこれを南側溝本来の幅員と考えておきたい。

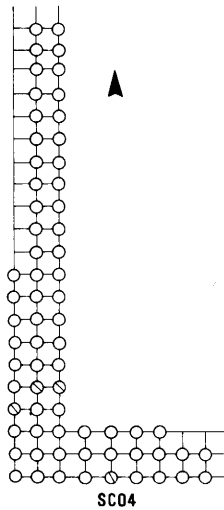
SD03 中央発掘区南端で検出した素掘りの東西溝で、東西25m分を検出した。二条大路の北側溝である。溝には掘り直しによる新旧二時期があるが、いずれにもとくに護岸のための施設はない。旧溝は幅6.0m以上、深さ1.35m前後。南肩は発掘区外にあり確認できなかった。溝底は氾濫のためにか大路側に幅2.3m以上のテラス状の平坦面がある。この平坦面上には7層に細分できる堆積土があり、このうち黒色粘土層は多量の植物遺体を包含し、木簡、木製品が出土した。溝底のレベルは西端で標高58.60m、東端で同58.75mと西へむかいわずかに下り勾配である。新溝は幅4.5m前後、十二坪側の北肩からの深さ1.15m前後である。大路路面は十二坪内の整地層上面と比べ0.3mほど低くなる。この新溝にも、木簡などを含む黒色粘土層がある。なお、木簡など遺物の記述にあたっては旧溝出土のものをA期、新溝出土のものをB期として報告する。

ところで、従来の調査により平城京の造営方位は国土方眼位に対して北で西に偏っていることが知られており、二条大路も同様に振れているものと考えられる。そこで、第四章(P45)に詳述するように二条大路がW3'53"N振れていると考え、SD01(復元幅員)、SD02(新溝)両者心々間の距離を求めると32.61mとなり路面幅は29.33mとなる。この幅員は、これまでの宮南面の二条大路幅員35m^{注)}強に比べやや短い。

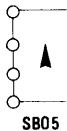
注) 奈良国立文化財研究所 「昭和40年度平城宮発掘調査概報」『奈良国立文化財研究所年報1966』1966
 奈良国立文化財研究所 「平城宮跡と平城京跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報1980』1980
 奈良国立文化財研究所 「平城宮跡と平城京跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報1981』1981
 奈良国立文化財研究所 「南面西門(若犬養門)の調査(第133次)」『昭和56年度平城宮跡発掘調査概報』1982

2. 十二坪内の遺構

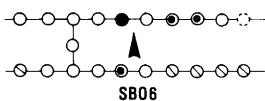
十二坪内で検出した主な遺構には建物、築地塀、塀、池、溝、井戸、土壇などがある。以下、その種別ごとに概要を記す。なお、これらの遺構は、古墳時代の流路を除きいずれも奈良時代から平安時代初頭のものである。



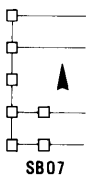
SC04 発掘区中央から北半部にかけて検出した回廊状建物。後述するSB05あるいはSB07の四方を取り囲むように建てられたと考えられ、今回はその西南隅にあたる部分を検出した。西面桁行20間(47.9m)以上、梁行2間(4.8m)。南面桁行8間(20.0m)以上、梁行2間(4.8m)。柱間は南面桁行の西から3・4・5間目のみ2.7m(9尺)、他は2.4m(8尺)等間である。柱穴は一辺1.3m程度の方角のものとは不整形なものがあり、柱抜き取り痕跡があるものもある。重複関係からSK38よりは新しく、SB09・10、SG30、SD44よりも古いことがわかる。柱穴の1つから軒丸瓦(平城宮6308-I型式)が出土した。



SB05 発掘区北東隅で検出した掘立柱東西棟建物。西妻柱列3間(9m)分のみを確認した。柱間は3m(10尺)等間。

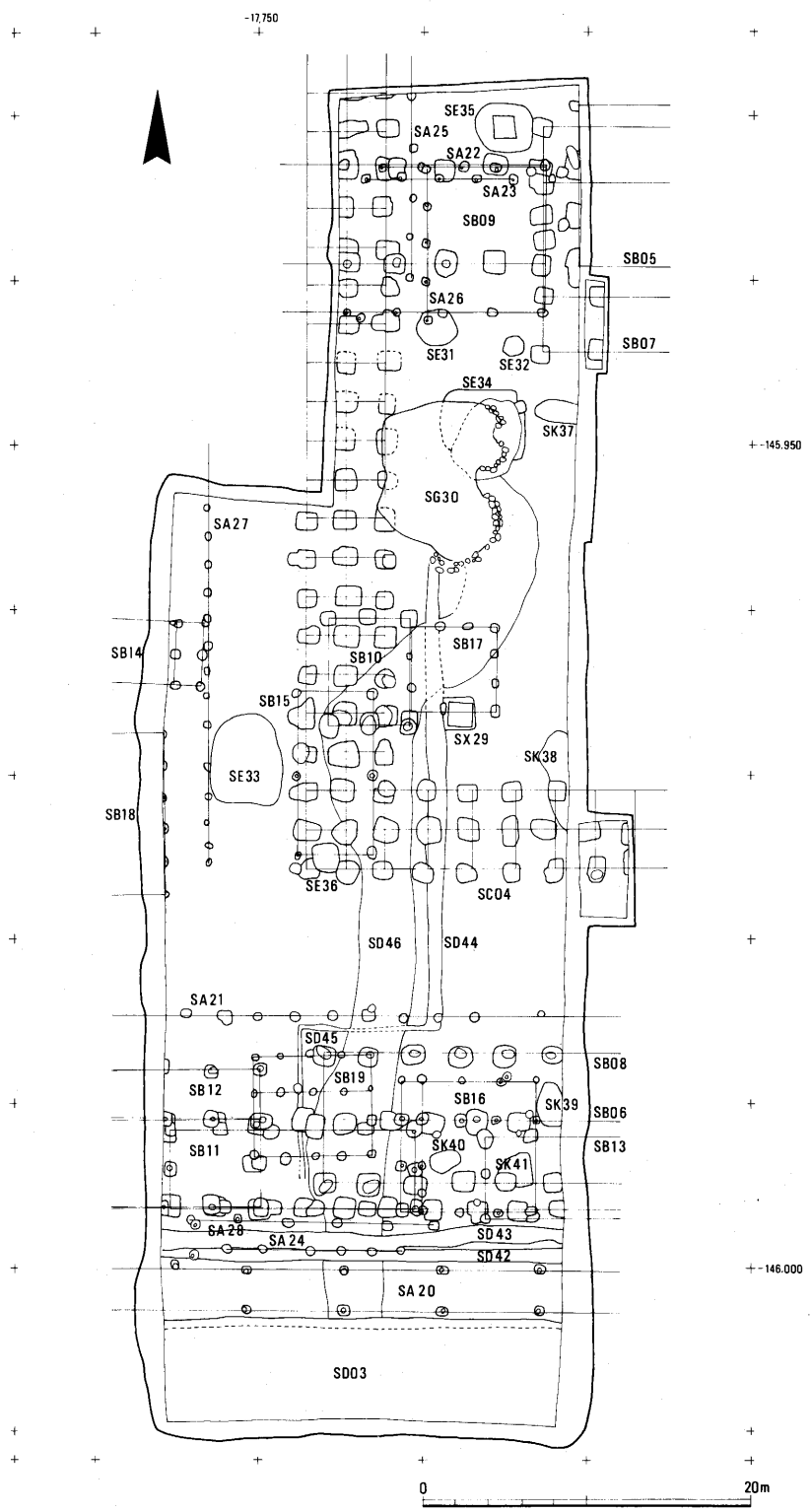


SB06 発掘区南半部で検出した掘立柱東西棟建物。桁行9間(23.9m)以上、梁行2間(5.4m)。東、西ともに発掘区外へのびるため、桁行全長は不明。西から2番目の柱筋に間仕切の柱穴がある。柱間は桁行、梁行ともに2.7m(9尺)等間である。北側柱筋の柱穴の1つに径20cm程度の柱根がのこる。3箇所柱穴から軒平瓦(平城宮6682-B型式)、軒丸瓦(同6282-G、6308-I型式)が出土した。柱穴の重複関係からSB11・12・13・16・19よりも古いことがわかる。

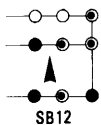
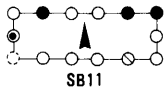
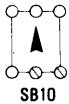
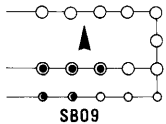
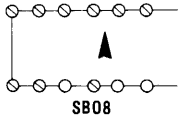


SB07 発掘区北東隅で検出した礎石建の東西棟建物。桁行1間(3.6m)以上、梁行4間(13.8m)。柱間は桁行が3.6m(12尺)、身舎梁行3.3m(11尺)等間、廂の出は南、北ともに3.6m(12尺)である。礎石据え付け掘形は方1m、深さ0.2mと浅い。礎石は全て撤去されており、わずかに人頭大の根石のみが残る。建物が坪内で占める位置からみて桁行は7間と推定されるが、四面廂付建物となる可能性もある。

※建物模式図凡例 ●柱根 ●柱痕跡 ○柱抜き取り痕跡 ○柱穴のみ ○推定



第5図 中央発掘区検出遺構配置図 (1/450)



SB08付SD45 発掘区南半部で検出した掘立柱東西棟建物。桁行5間(13.5m)以上、梁行1間(7.8m)。柱間は桁行が2.7m(9尺)等間。梁行は広く8.1m(27尺)である。ほとんどの柱穴に柱抜き取り痕跡がある。一部の柱穴から軒平瓦(平城宮6682-B、6664-N型式)、軒丸瓦(同6320-Aa型式)が出土。北、西面の一部に雨落ち溝かと考えられる素掘りの溝(SD45)が残る。北側柱筋心、西妻柱筋心と溝心との距離はいずれも1.5m(5尺)である。

SB09 発掘区北半部で検出した掘立柱東西棟建物。桁行4間(12.0m)以上、梁行3間(8.7m)、南廂をもつ。柱間は桁行3.0m(10尺)等間、身舎梁行3.0m(10尺)等間、廂の出は2.7m(9尺)である。柱穴の中には柱の根固め石を残すものもある。身舎の柱穴は方1.3m程度、これに比べ廂の柱穴はやや不整形で方0.5m程度と小さい。柱穴の重複関係からみてSC04、SB07よりは新しい。

SB10 発掘区中央で検出した東西2間(4.8m)、南北1間(6.6m)の掘立柱建物。東西方向の柱間は2.4m(8尺)等間。南側柱筋の2柱穴には柱抜き取り痕跡がある。柱穴の重複関係からSC04よりは新しいことがわかる。

SB11 発掘区南半部で検出した掘立柱東西棟建物。桁行5間(15.0m)、梁行2間(4.8m)。柱間は桁行が3.0m(10尺)等間、梁行が2.4m(8尺)等間である。柱穴の中には柱根の残存するものがあり、のこりのよい柱根は径25cm程度である。東南隅柱穴掘形から軒平瓦(平城宮6721-I型式)が出土した。柱穴の重複関係からSB06よりは新しく、SB12・16・19よりも古いことがわかる。

SB12 発掘区南半部で検出した掘立柱東西棟建物。桁行2間(6.0m)以上、梁行3間(8.4m)、北廂をもつ。柱間は桁行が3.0m(10尺)等間、身舎梁行が2.7m(9尺)等間、廂の出は3.0m(10尺)である。身舎の3箇所柱穴に柱根がのこる。柱は、柱掘形の底に礎板に用いた平瓦を据えその上に立てられるものと、礫を敷いた後に立てられるものがある。身舎の柱穴が方1m程度であるのに比して、廂の柱穴は方0.7m程度とやや小さい。柱穴の重複関係からSB06・11よりは新しく、SB19よりも古いことがわかる。

SB13 発掘区南半部で検出した掘立柱東西棟建物。桁行1間(3.0m)以上、梁行2間(4.8m)。柱間は桁行が3.0m(10尺)、梁

行は北から2.1m（7尺）—2.7m（9尺）と不揃いである。柱穴の重複関係からSB06よりは新しく、SB16よりも古いことがわかる。

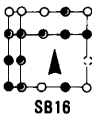
SB14 発掘区中央部西端で検出した掘立柱東西棟建物。梁行2間（3.6m）、桁行は廂の1間（1.5m）のみを確認した。柱間は梁行が1.8m（6尺）等間、廂の出は1.5m（5尺）である。棟方向が方眼方位に対し西でやや北にふれる。



SB15 発掘区中央で検出した掘立柱南北棟建物。桁行2間（9.6m）、梁行1間（4.5m）。柱間は桁行が4.8m（16尺）等間、梁行が4.5m（15尺）と広い。柱穴は小さく、不整形である。



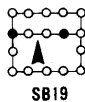
SB16 発掘区南半部で検出した掘立柱東西棟建物。桁行4間（8.1m）、梁行3間（7.8m）、北廂がつく。柱間は桁行が西から1.2m（4尺）—2.4m（8尺）—2.1m（7尺）、身舎梁行2.7m（9尺）等間、廂の出は2.4m（8尺）である。西から1間目の柱間が狭いことと、西妻柱筋の柱穴が身舎の他の柱穴とほぼ同じ大きさであることから、西妻の1間分は建て増したものと考えられよう。5箇所の柱穴に径15cm程度の柱根がのこる。棟方向が方眼方位に対し、西でわずかに南へふれる。



SB17 発掘区中央で検出した東西3間（5.1m）、南北3間（5.1m）の掘立柱建物。柱間は東西、南北ともに5.1m（17尺）の3つ割り、建物方向が方眼方位に対し、西で北へふれる。



SB18 発掘区中央部西端で検出した掘立柱南北棟建物。東側柱列5間（9.75m）のみを検出した。柱間は1.95m（6.5尺）等間。南から2・3番目の柱穴に柱根がのこる。棟方向が方眼方位に対し、北で西へふれる。



SB19 発掘区南半部で検出した掘立柱東西棟建物。桁行4間（7.2m）、梁行3間（6.0m）、北廂がつく、柱間は桁行が1.8m（6尺）等間、身舎梁行が北から1.8m（6尺）—2.1m（7尺）、廂の出は2.1m（7尺）である。2箇所の柱穴に柱根がのこる。棟方向が方眼方位に対し西で南へふれる。

SA20-A・B付SD42・43 十二坪の南辺を画す築地塀。築地本体はすでに存在しない。二条大路の北側溝であるSD03の北側でこれに添って東西に連なる2条の柱列を検出した。これが幅2.4m（8尺）で、6.0m（20尺）の間隔をもって整然と並ぶことから、築地塀構築時の堰板留めの添え柱痕跡であると考え、この間に築地塀（SA20-B）を想定する。築地塀の北側で

2条の溝（S D42・43）を検出した。築地塀の雨落ち溝である。重複関係からS D43が古く、S D42が新しいことがわかる。溝が2条あることから築地塀の改作が考えられ、S D43はその痕跡をも留めないS A20-Aに、S D42はS A20-Bに伴う溝となろう。S A20-BとS D42との心々間距離は2.1m（7尺）である。S D42からは軒丸瓦（平城宮6308-I型式）、S D43からは軒丸瓦（同6135-E、6308-C型式）が出土した。

SA21 発掘区南半部で検出した掘立柱東西塀。10間（21.7m）分を検出し、さらに発掘区外へつづく。柱間は1.9~2.4mと不揃いである。

SA22 発掘区北端で検出した掘立柱東西塀。4間（9.9m）分を検出し、東側はさらに発掘区外へつづく。柱間は2.1~3.0mと不揃い。重複関係からS B07、09より新しいことがわかる。

SA23 発掘区北端で検出した掘立柱東西塀。5間（11.4m）分を検出し、東側はさらに発掘区外へつづく。柱間は2.1~2.4mと不揃いである。S A22とほぼ平行する。

SA24 発掘区南半部で検出した掘立柱東西塀。全長5間（10.6m）。柱間は1.8~2.9mと不揃いである。東から3番目の柱穴から軒平瓦（平城宮6681-B型式）が出土した。

SA25 発掘区北端で検出した掘立柱南北塀。4間（11.1m）分を検出し、南側はさらに発掘区外へつづく。柱間は2.3~3.3mと不揃いである。

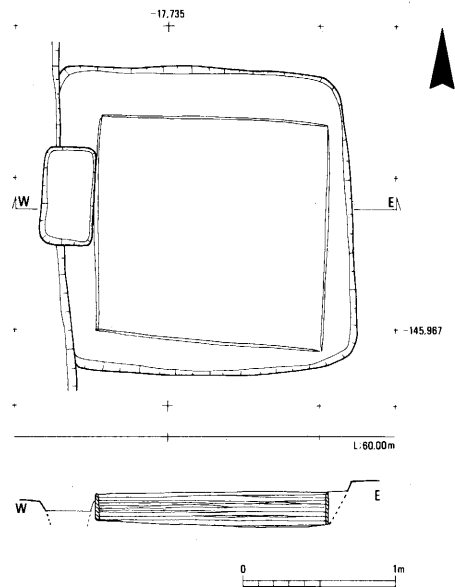
SA26 発掘区北端で検出した掘立柱南北塀。全長5間（11.5m）。柱間は2.2~2.4mと不揃いである。S A25とほぼ平行する。柱穴の重複関係からS A22よりは新しいことがわかる。

SA27 発掘区西端で検出した掘立柱南北塀。13間（21.5m）分を検出し、北側はさらに発掘区外へつづく。柱間はほぼ1.65mであるが、南から1間目が1.1m、5間目が2.4mと不揃いな部分もある。柱筋が方眼方位に対し北で西へふれる。

SA28 発掘区南半部で検出した掘立柱東西塀。全長5間（14.9m）。柱間は2.8~3.1mと不揃い。柱筋が方眼方位に対し西で南へふれる。西から1番目と4番目の柱穴に径15cm程度の柱根がのこる。

SX29 発掘区中央、S D44に接して検出した木組の施設。東西約1.9m、南北約2.05m、深さ0.3mの方形掘形内に方形の木枠を組む。木枠は長さ150cm、幅22cm、厚さ2cm程度の側板を4枚組み合せたもの。一段のみで、底板はない。各側板ともに組手部の腐蝕が著しく、組手の仕口は明らかではない。観賞用の植物を植え込むための施設かと思われる。

SG30付SD44 発掘区北半部で検出した園池。古墳時代の自然流路（S D46）上に造園されて



第6図 SX29平面・立面図（1/50）

いる。平面の形状は、東岸が入り込み不規則で、東西約7.7m、南北約10.5mである。検出面からの深さは約23cmである。東岸から南岸にかけて人頭大の石を配する。石は一連の掘形の中に据えられている。池からまっすぐに南へのびる素掘りの溝（S D44）がある。幅1.0m前後、検出面からの深さ0.1m前後。池の排水路であろう。このS D44はS B08の雨落ち溝S D45に接続する。池の導水路と、排水路の取り付きは削平のため不明。

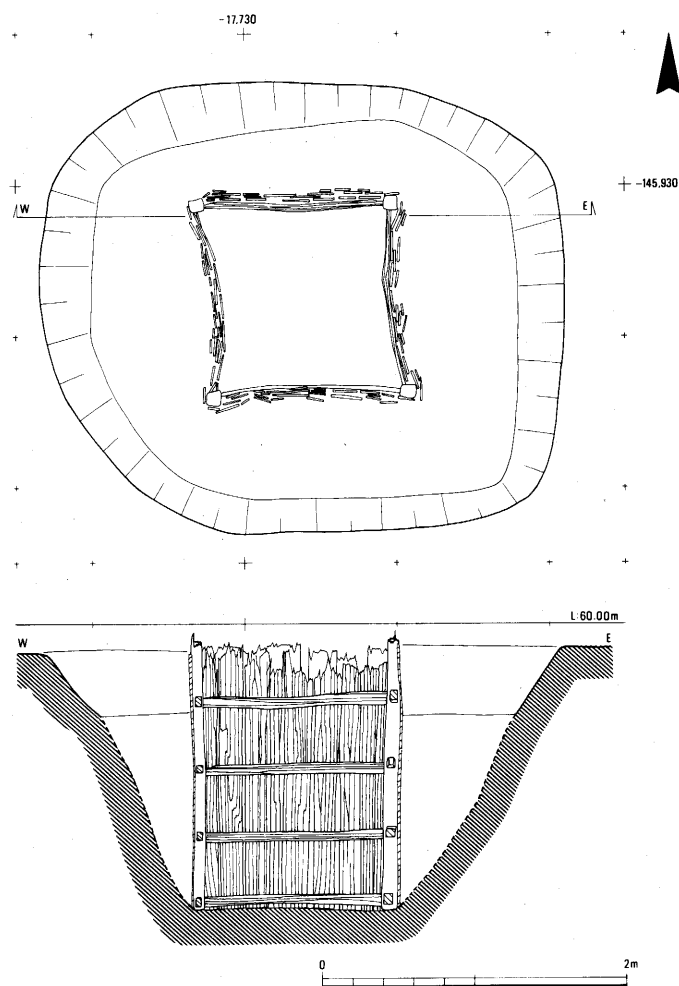
S E 3 1 発掘区北半部で検出した井戸。掘形は平面長円形を呈し、東西2.2m、南北2.5m、深さ約1.6mである。井戸枠は残存しない。埋土から奈良時代前半の土器と軒平瓦（平城宮6719-A型式）が出土した。なお、この軒平瓦は後述するS E 33出土軒平瓦と同一個体である。

S E 3 2 発掘区北半部で検出した井戸。掘形は平面ほぼ円形を呈し、径1.2m、深さ1.6mを測る。井戸枠は残存しない。埋土から、奈良時代前半の土器と木簡が出土した。

S E 3 3 発掘区中央部で検出した井戸。井戸枠は抜き取られ残存しない。掘形は不整形で東西4.4m、南北5.5m、深さ1.76mである。埋土から軒平瓦（平城宮6719-A型式）が出土した。

S E 3 4 発掘区北半部で検出した井戸。掘形は一辺約4.5mの方形を呈す。井戸枠は抜き取られ残存しない。埋土から木簡軒平瓦（平城宮6663、6664-F型式）、軒丸瓦（平城宮6308-C型式）が出土。重複関係からS G30よりも古いことがわかる。

S E 3 5 発掘区北端で検出した井戸。掘形は平面隅丸方形を呈し、東西3.45m、南北3.0m、深さ1.75mである。掘形中央に縦板組方形井戸枠を据える。井戸枠は、4本の隅柱の2辺にそれぞれ4箇所の柄穴を穿ち、4段の横棧を柄留したのち、各辺の外側に縦板をあてるもの。隅



第7図 S E 3 5 平面・立面図（1/50）

柱はいずれも10cm角、長さ180cm程度が残存する。横棧は7cm角、長さ125cm前後の材の両端を削り隅柱と結合する。側板は、まず幅15～20cm程度、厚さ約2cmの縦板を各辺に7、8枚あてがひ、その隙間をうめるようにさらに外側に縦板をあてる。こうして、各辺に21～31枚の縦板が使用されている。井戸は廃絶時に、人頭大の石を投入し一気に埋められている。枳内から軒丸瓦（平城宮6236-A型式）、奈良時代末から平安時代初頭の土器が出土した。

SE36 発掘区中央部で検出した井戸。掘形は上面では一辺約1.7mの方形を呈すが、底部では径約1.0mの円形となる。深さ0.9m。井戸枳は残存しない。

SK37 発掘区北半部で検出した土壌。東西2.5m以上、南北1.4m、深さ0.4m、東側は発掘区外へつづく。埋土から軒丸瓦（平城宮6311-C型式）が出土した。

SK38 発掘区中央部で検出した不整形な土壌。東西1.6m以上。南北6.0m以上、深さ0.2m。東側は発掘区外へつづく。埋土から奈良時代前半の土器が出土した。

SK39 発掘区南半部で検出した土壌。東西1.65m以上、南北2.7m、深さ0.15m。東側は発掘区外へつづく。埋土から軒丸瓦（平城宮6311-A型式）が出土した。

SK40 発掘区南半部で検出した土壌。東西1.8m、南北1.5m、深さ0.4m。埋土から軒丸瓦（平城宮6284-C、6314-C型式）が出土した。

SK41 発掘区南半部で検出した土壌。東西2.1m、南北2.2m、深さ0.1m。植物遺体の堆積層がある。埋土から軒平瓦（平城宮6664-N型式）が出土した。

SD46 発掘区中央を蛇行する自然流路。幅3.0～5.5m、約50m分を検出した。埋土から古墳時代の須恵器が出土した。

建物	棟方向	規模・廂	桁行m (尺)	梁行m (尺)	廂m (尺)	備考
SC04	南面	8以上×2	20 (67) 以上	4.8 (16)		
	西面	20以上×2	49.7 (160) 以上	4.8 (16)		
SB05	東西	不明×3		9.0 (30)		
SB06	東西	9以上×2	23.9 (81) 以上	5.4 (18)		
SB07	東西	1以上×4 / 南・北	3.6 (12) 以上	13.8 (46)	3.3 (12)	礎石建物
SB08	東西	5以上×1	13.5 (45) 以上	8.1 (27)		
SB09	東西	4以上×2 / 南	12.0 (40) 以上	6.0 (20)	2.7 (9)	
SB10		東西2×南北1	東西4.8 (16)	南北6.3 (21)		
SB11	東西	5×2	15.0 (50)	4.8 (16)		
SB12	東西	2以上×3 / 北	6.0 (20) 以上	8.4 (28)	3.0 (10)	
SB13	東西	1以上×2	3.0 (10) 以上	4.8 (16)		
SB14	東西	1以上×2 / 東	1.5 (5) 以上	3.6 (12)	1.5 (5)	方位ふれる
SB15	南北	2×1	10.0 (34)	4.5 (15)		
SB16	南北	4×3 / 北	8.1 (27)	7.8 (26)	2.4 (8)	建増し、方位ふれる
SB17		東西3×南北3	東西5.1 (17)	南北5.1 (17)		
SB18	南北	5×不明	9.75(32.5)			
SB19	東西	4×3 / 北	9.3 (31)	3.9 (13)	2.1 (7)	方位ふれる

第1表 検出建物一覧

Ⅲ 出土遺物

今回の調査では、遺構面を厚く覆う遺物包含層、各遺構中から多量の遺物が出土した。瓦、土器、木簡、木製品、金属製品がある。なかでも瓦の出土量が多く、土器は比較的少い。以下、種別ごとに出土した遺物の概要を記す。

1. 木簡

木簡は二条大路北側溝 S D 03、同南側溝 S D 02、井戸 S E 32、同 S E 34 の 4 箇所から計 57 点が出土した。以下、墨の痕跡はあるものの釈読できないものを含め全出土木簡の釈文を遺構ごとにかかげることにするが、S D 03 については第二章遺構の項で述べたように新旧 2 時期があるので、A 期（旧溝）、B 期（新溝）にわけて報告する。釈文、法量、型式番号などの表記方法は『木簡研究』^{注)}の凡例に準拠した。

S D 0 3—A 期出土木簡（第 8 図 1～15、図版 16・17） 15 点が出土した。

- 1 ・請 布七段 買銭□×
〔卅カ〕
 ・毛付苳^{〔桃カ〕}果直□ □^{〔文カ〕}
 □子二升直八□ (125) × (22) × 4 081
- 2 ・×□□百文 買物 』
 ・×潤九月□日□御君』 (124) × (16) × 3 019

物品の購入記録か。

- 3 ×□□曆□ □
 天□□十月十四日∨』 (160) × (32) × 6 039
- 4 「∨備中國英賀郡搗栗一斗』 (90) × (21) × 5 032

備中国から搗栗を貢進した荷札。

- 5 「∨石見國美農郡人□郷長□□□ □□□
〔額カ〕
 □月廿日』 (272) × (27) × 6 032
- 6 「赤穂郡大原× (74) × (21) × 5.5 019

『和名抄』に播摩國赤穂郡大原郷とある。

注) 木簡学会『木簡研究』創刊～5号（1979～1983） 釈文の右の数字は、木簡の長さ、幅、厚さを mm 単位で示したもの。括弧は欠損していることを示す。最後の数字は型式番号。019：一端が方頭、他端欠損 032：長方形の材の一端の左右に切り込み 033：長方形の材の一端に切り込み、他端を尖らせる 039：長方形の材の一端の左右に切り込み、他端欠損 051：長方形の材の一端を尖らせる 065：用途未詳木製品に墨書 081：原形不明 091：削屑

- 7
- ・×猪突一斗二升」
 - ・×十月」 (75) × (18) × 4 019

猪突につけた付札か。

- 8
- ・八二八十 □十 十□□□□」
 - ・^{〔農カ〕}□□ □□□□ □□□□十」 (219) × (9) × 4 081

部厚い材を横に用い墨書する。右端のみ原形、他の3方は削られている。

- 9
- ・□□□ □」
 - ・ □□□ 」 (145) × (19) × 4 081

- 10
- ・「^{〔徭〕}□ □
 - ・「 □ □
- (126) × (15) × 2 081

- 11 □□□□ □□ (102) × (10) × 8 081

- 12 □□□□ (101) × (6) × 8 081

- 13
- ・×□□三具」
 - ・×□□□ (92) × (23) × 2 019

上端のみ折れて欠損。三具は物品の数量を記したものか。

- 14 □□□ (45) × (7) × 6 081

- 15
- ・□□□
 - ・□ □ (69) × (10) × 2 081

S D 0 3 - B 期出土木簡 (第9図・第10図16~41、図版17~19) 26点が出土した。

- 16
- ・×□□御司
 - ・×^{〔書カ〕}継謹啓□麻呂 (114) × (30) × 3 081

上端は折れて欠損。文書木簡。

- 17 ×□^{〔海カ〕}西□□マ^{〔物銭カ〕}万呂養□□× (120) × (17) × 4 081

養物銭の貢進荷札か。

- 18
- ・×日解 今□×
 - ・×斗 七日× (123) × (13) × 5 081

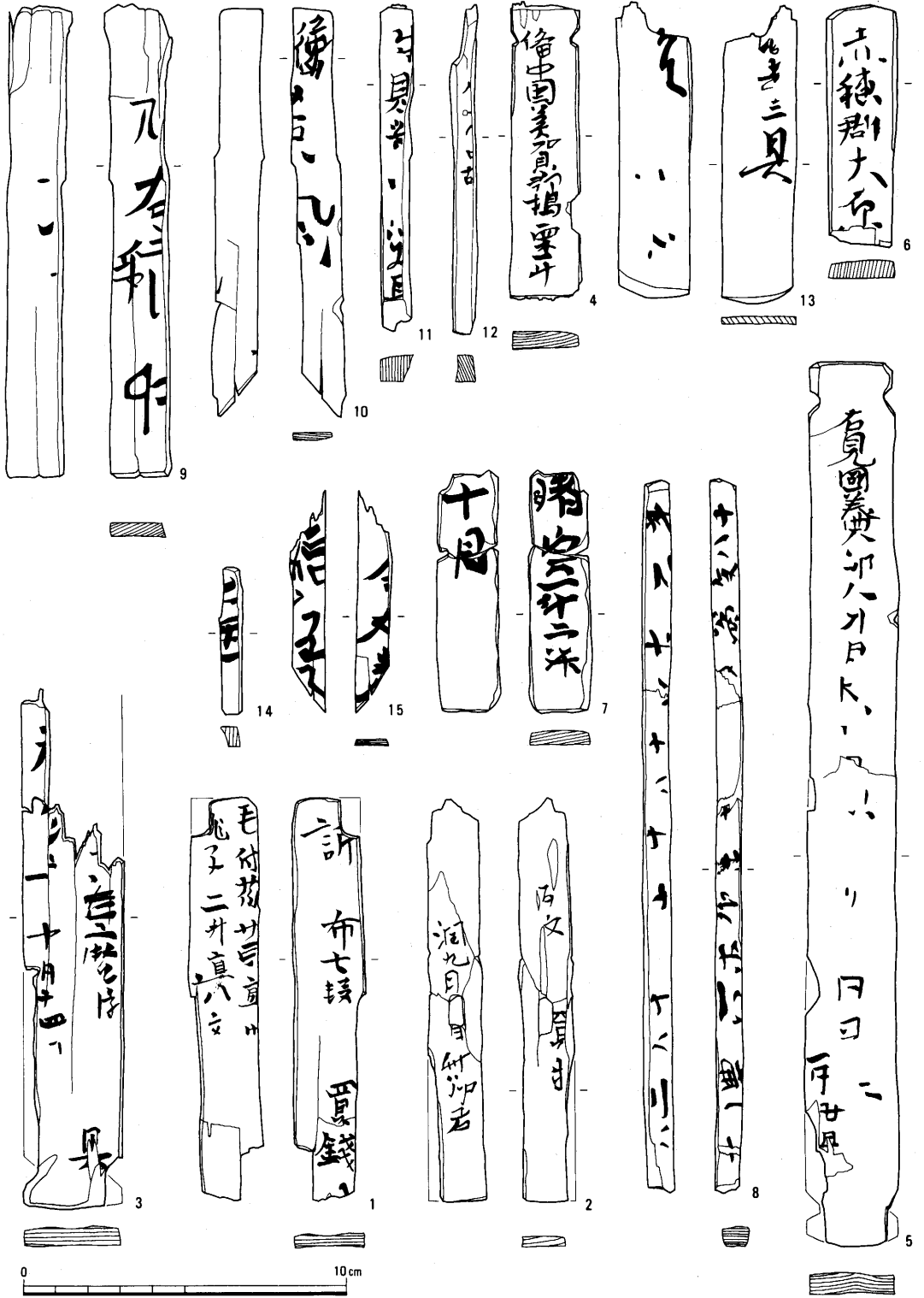
上端、左・右側辺は欠損。下端は切断

- 19 「左馬寮× (52) × (19) × 3 019

下端、右側辺は欠損。官司名を記したもの

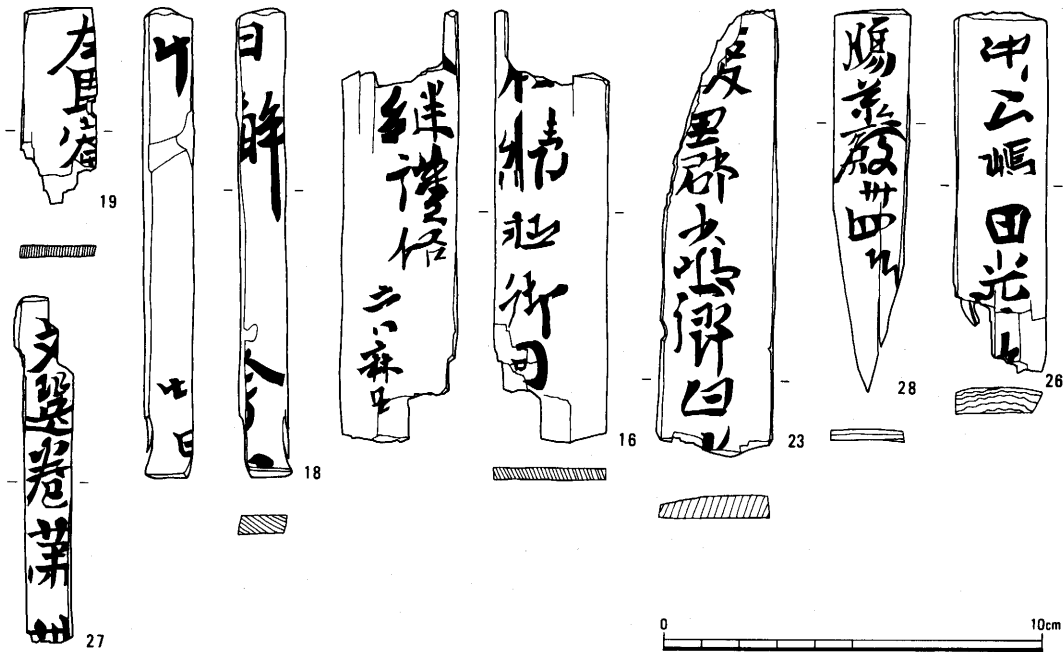
- 20
- ・「√美濃國武義郡^{〔朽カ〕}稲□×
 - ・「√□斗^{〔天平カ〕} □□七年× (155) × (26) × 5 039

美濃国からの貢進物荷札であろう。



第8圖 SD 03-A期出土木簡 (1/2)

- 21 ・「V遠江國長上郡煮塩年魚三斗八升 ^三」
 ・「天平廿年」 (156) × (20) × 4 032
 原形。煮塩年魚を貢進した荷札。
- 22 ・「V淡路國津名郡安乎郷人夫 戸主礮秦僧一斗五升同
 廣山三斗戸主私マ角五升」
 ・「V合一表 天平廿年九月」 (175) × (33) × 4 033
 原形。庸米の貢進荷札。一斗五升、三斗、五升と半端な量を合せ五斗で一表としている。
- 23 ×^[鐵板野カ]□□□郡少嶋郷白^[米カ]□× (118) × 30 × 7 081
 白米の荷札か。『和名抄』に阿波國板野郡小嶋郷とある。
- 24 ×□□郷物マ□万呂□× (70) × (14) × 2 081
 井手郷は『和名抄』では出羽國飽海郡、越前國足羽郡、加賀國石川郡の三国にある。
- 25 V備前國□× (71) × (21) × 5 039
 上・下端ともに折れて欠損。
- 26 □□□田□□× (96) × (24) × 6 019
 上・下端ともに折れて欠損。
- 27 「文選卷第卅× (90) × (13) × 3 081
 上端の一部を残し、欠損。『文選』の習書木簡か。
- 28 「腸兼鯪 ^{卅四}□」 (103) × (19) × 3 051
 原形。腸兼鯪の付札。
- 29 「V山マ五戸貢井腊V」 (170) × (28) × 5 031
 ほぼ原形。貢進物荷札か。
- 30 ・×□塩三斗×
 ・×□等□□× (40) × (17) × 4 081
 上・下端ともに折れて欠損。塩の荷札か。
- 31 ・能能 諸諸 欠欠」
 ・□□ 天天」 (173) × (25) × 4 019
 上端は折れて欠損。習書木簡。
- 32 「V□□ (160) × (28) × 5 039
 上端を山型に調整。表面が磨滅し、墨はきわめて薄い。
- 33 「□ □ □ (133) × (32) × 5 019
 一端は折れて欠損。墨は薄い。
- 34 □□」 (104) × (25) × 3 019
- 35 □ ^(足カ) □ (90) × (20) × 5 081



第9圖 SD03-B期出土木簡 1 (1/2)

- 36 三□□□□ (75) × (6) × 5 081
- 37 十八日曾□□□ (66) × (10) × 1 091
- 38 拾 (61) × (18) × 3.5 081
- 39 □ (23) × (8) × 2 081
- 40 • 「▽□□×
• 「▽□ × (62) × (22) × 6 039
- 41 □ □ (66) × (23) × 3 081

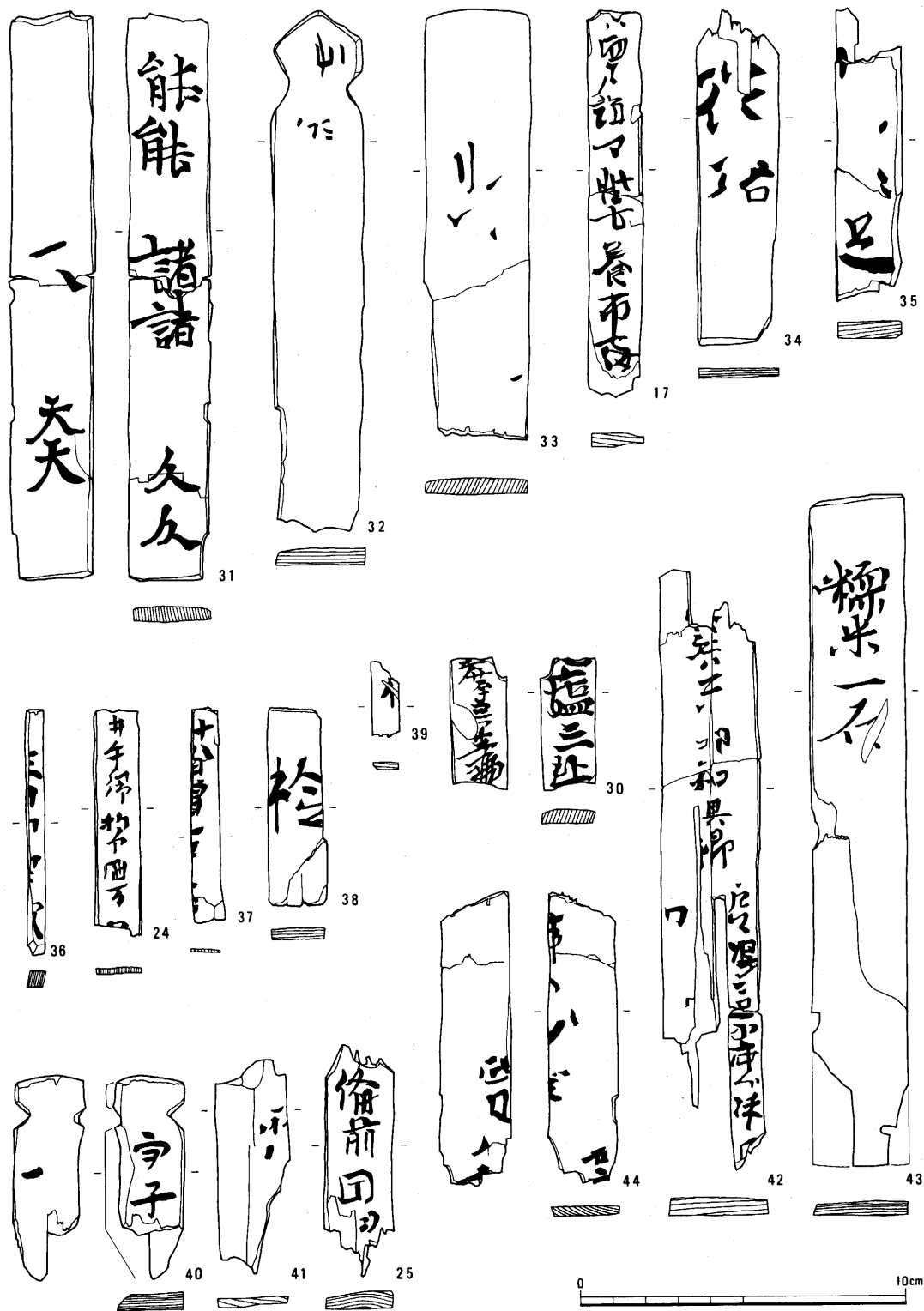
S D 0 2 出土木簡 (第10図42~44) 3点が出土した。

- 42 ^(國カ)
□□答志郡和具郷 戸主嶋□小□□御□ (186) × (31) × 6 081
- 『和名称』に志摩國答志郡和具郷とある。
- 43 「糯米一石 (211) × (27) × 3 019
- □□□□ □
- 44 (90) × (21) × 3 081
- □□□□

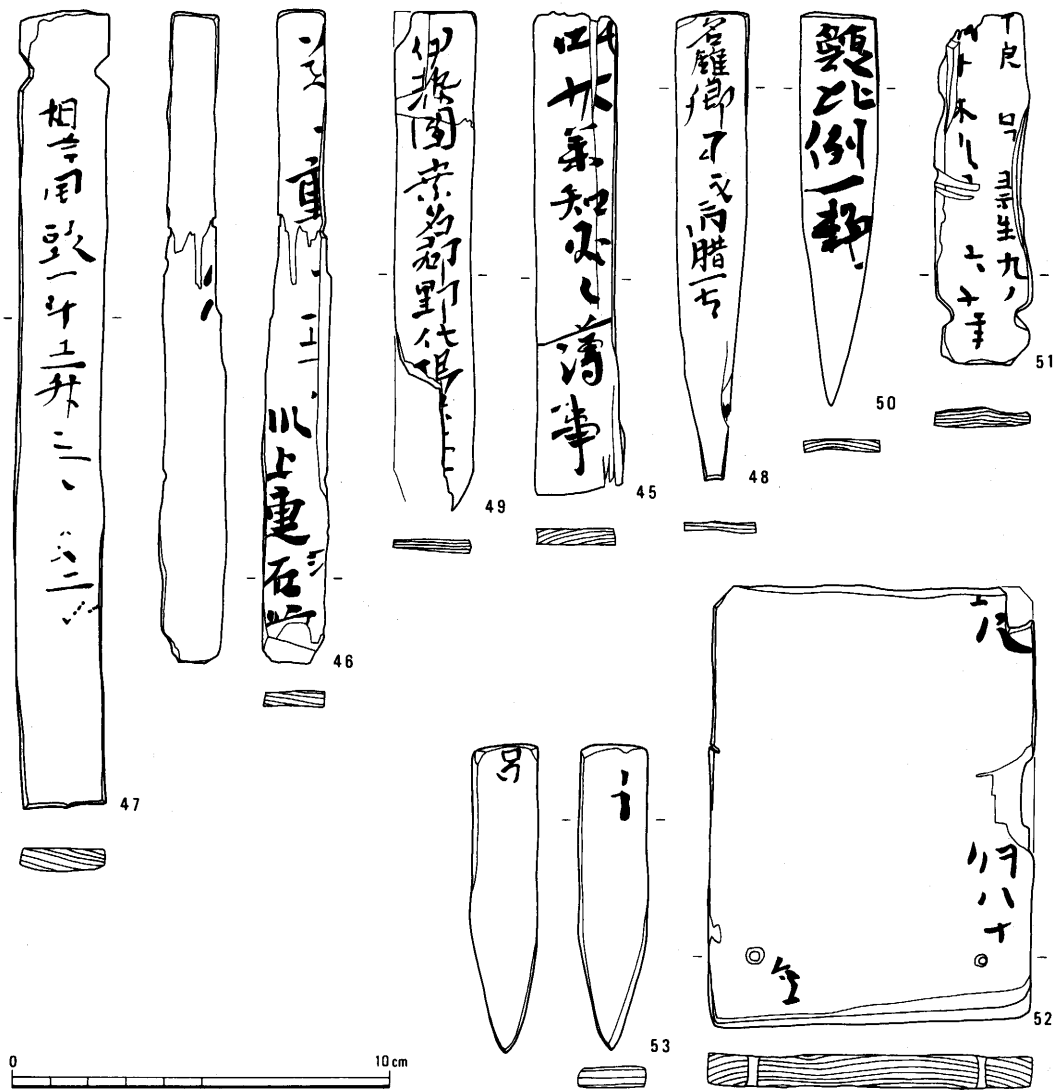
S D 0 1 出土木簡 (第11図45~53、図版19・20) 9点が出土した。

- 45 ×此状兼知火く薄事」 (127) × (22) × 4 019
- 上端、右側辺欠損。文書文簡。
- 「進□動□□□□ □
- 46 ^(前カ)
川上連石□ (172) × (16) × 3 019
- 「 □
- 47 「▽相模國駿一斗□升□□□」 (211) × (23) × 6 032
- ほぼ原形であるが、墨がきわめて薄い。
- 48 「名錐郷□□□腊一古」 (124) × (19) × 3 051
- 49 「伊勢國桑名郡野代郷□□□ (132) × (21) × 3 019
- 50 ^(鯨カ) ^(把カ)
「□比例一□ (105) × (20) × 3 051
- 鯨比例の付札か。
- 51 × □□□ □□九□ (92) × (25) × 5 039
- □□ 六□□^(年カ)▽」
- 上方欠損。下端の左右に切り込みがある。
- 52 「□八 □八十 (116) × (85) × 8 065
- 」

四辺ともに原形。厚手のほぼ正方形の材の下端に2箇所円孔を穿つ。



第10圖 SD03-B期出土木簡 2 (1/2)



第11図 SD 0 2出土木簡 (1/2)

- 53 • 「□ 」
- 53 • 「□ 」 (81) × (18) × 5 051

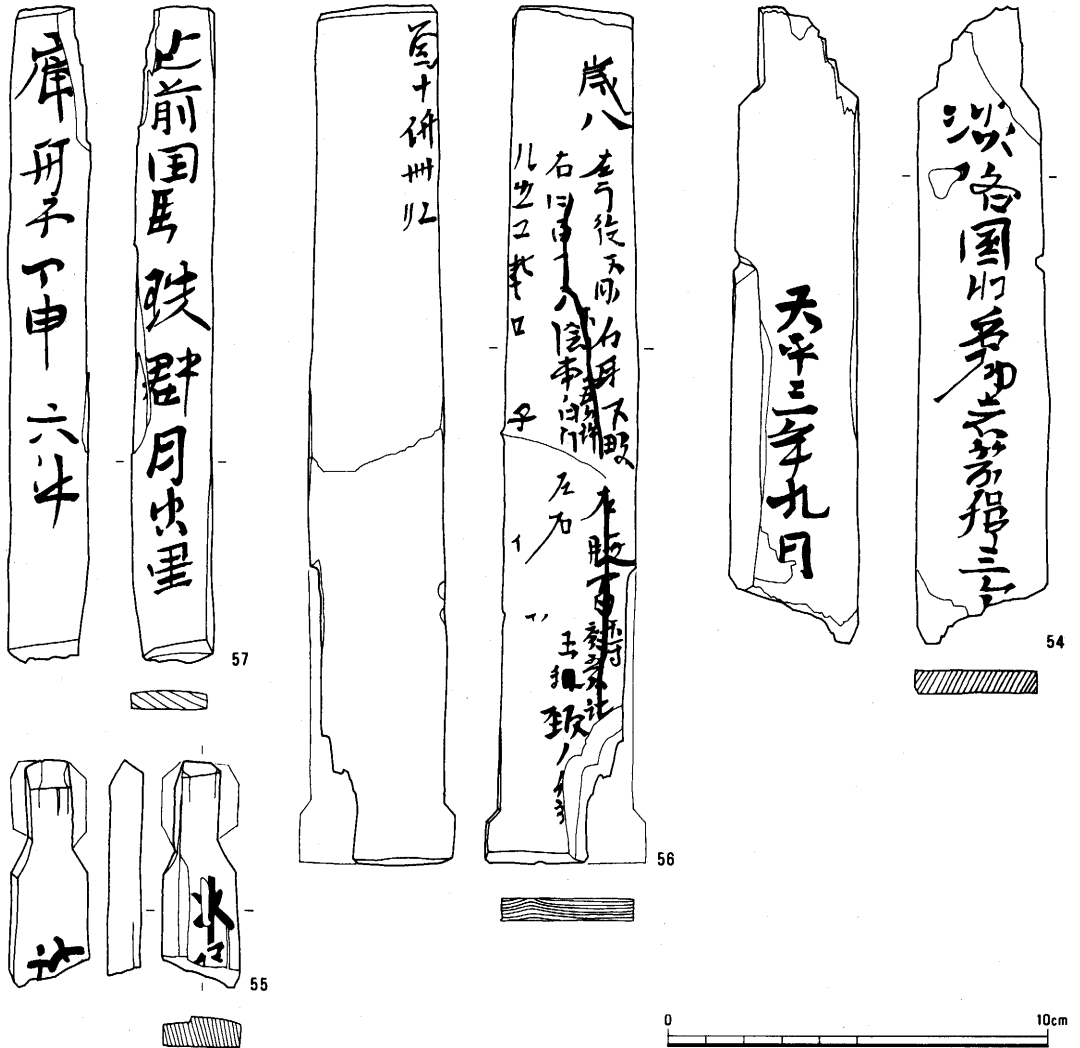
上・下端、両側面ともに原形。付札か。

SE 3 4 出土木簡 (第12図54~56、図版20) 3点が出土した。

- 54 • √淡路國津名郡志筑郷三□ × (176) × (34) × 6 032
- 54 • √ 天平三年九月

淡路国からの貢進物荷札

- 55 • 「√□□ ×
- 55 • 「√□ × (60) × (20) × 7 039



第12図 SE34・SE32出土木簡(1/2)

・「歳八左□從下彫右耳下彫 左腋下白 長一寸
廣五分許

56 右□□□ 下□□五分許 左右□ □ □正□欽□□□
陰本白□

□□□□□ □□ □ □ VJ

・「□+□冊□ VJ 226 × 34 × 6 032

動物の特徴を記したもののか。

SE32出土木簡(第12図57、図版20) 1点が出土した。

57 〔越前国□珠郡月□里〕
〔庸舟木マ申 六斗 〕

(173) × (21) × 4 011

2. 瓦 類

出土した瓦類の総量は整理箱740箱におよぶ。大部分は丸・平瓦であるが、いまだ未整理の状態にあるので、今回はひととおり整理し得た軒瓦を中心に報告したい。なお、軒瓦の大部分は従来平城宮ないし京域で出土したものと同範の関係にあるので、記述にあたっては奈良国立文化財研究所が設定した型式番号^{注1)}を使用し、既に報告のあるものについては説明を避けた。

軒丸瓦 17型式31種171点があり、6075A、6135A・E、6225A、6231B、6236A、6272A、6281Aa・B、6282Ba・Db・Fa・Fc・G・H、6284A・C、6301C、6304A、6307A、6308A・C・D・I、6311A・B・F、6313C、6314Ca・Cb、6320Aa、新形式の各型式が出土した。型式別の点数は表2のとおりである。このうち6282F、6314Cで新たに範の彫り直しを確認した。

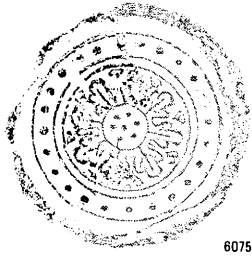
6282Fは間弁が界線状にめぐる複弁8弁蓮華文瓦で、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文を置く。中房蓮子の中央1点が大きいのと、外区内外縁の界線が太いのが特徴的である。従来Faとこれの彫り直しであるFbとが知られており、Faでは全ての子葉が分離独立しているが、Fbでは8弁中4弁で子葉の輪郭線がくっつくのが顕著な相違点である。今回の出土例は、Fbにさらに彫り直しを加えたFcとすべきもので、子葉の輪郭線は7弁までがくっつき、弁端の分岐も浅くなっている。

6314Cは小型の複弁4弁蓮華文瓦で、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文がめぐる。今回範の彫り直しの関係にある二者が出土したので、これらをCa・Cbとすると、従来知られるCはCaを彫り直したCbにあたる。Caは全体的に線が細く中房周囲に明瞭な突線がめぐるとのに対し、Cbでは肉厚で丸味を帯びた表現にかわり、中房の突線は痕跡を残す程度である。

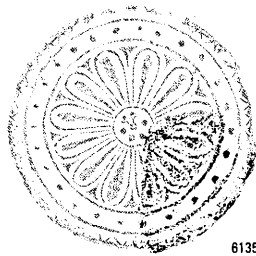
新形式は間弁が独立した複弁8弁蓮華文瓦に分類できるもので、左京三条二坊九坪^{注2)}に内区の一部を残す同範例が知られるが、今回の出土で外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文がめぐることが判明した。また、文様割付を間違えるか彫り違えるかしたのであろうか、8弁中1弁のみが単弁になっていることも新知見である。弁区が突出し、弁の反転も強く、弁端は高く反り上がる。中房は弁区とほぼ同じ高さにあるが、両者間に深い凹状の窪みがめぐるとの著しく突出した感じを与える。蓮子は1+8で、外側の8個が周縁間際に配される点も特徴的である。

軒平瓦 13型式23種101点があり、6644A、6663B・C、6664D・F・N、6666A、6681B・F、6682A・B・C、6685A・B、6689A、6691A、6711A、6719A、6721C・F・Ga・I、6760Bの各型式が出土した。型式別の点数は表2のとおりである。このうち従来全体の知られなかった6682B・Cで良好な資料を得ることができた。

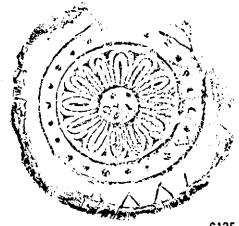
6682は逆「十」字形の中心飾りをもつ3回反転均整唐草文瓦で、外区・脇区に珠文がめぐるとの。Bは上下外区の珠文数が17でAと同じであるが、唐草との位置関係がわずかに異なり、中心葉の横幅が最も広い。Cは上下外区の珠文数が19であることが顕著な相違点である。また、Aは唐草基部と界線が接するのに対し、B・Cでは両者が離れる。B・Cともに段顎である。



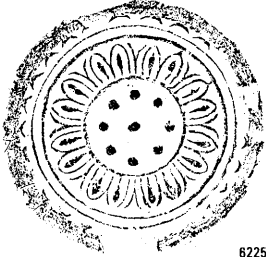
6075 A



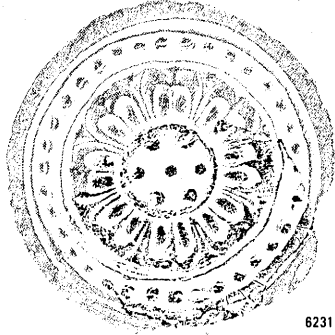
6135 A



6135 E



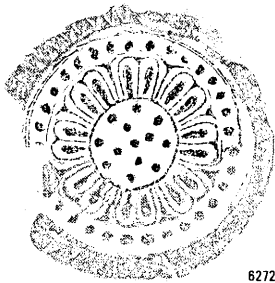
6225 A



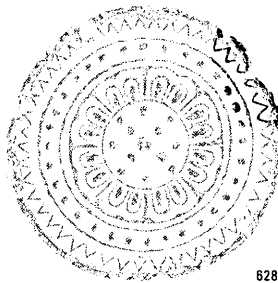
6231 B



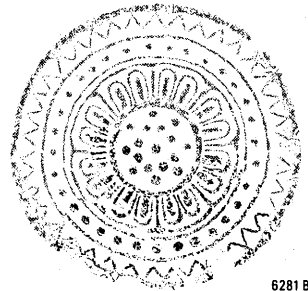
6236 A



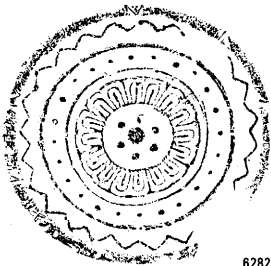
6272 A



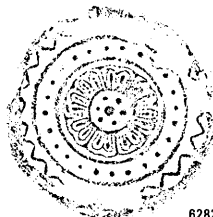
6281 Aa



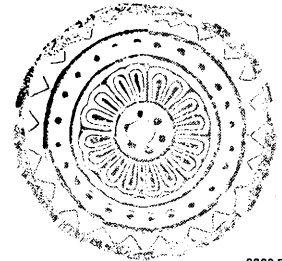
6281 B



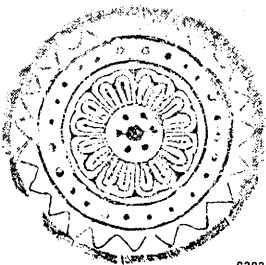
6282 Ba



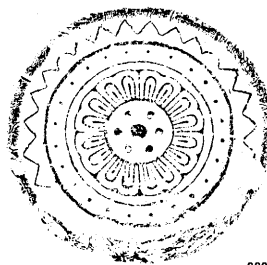
6282 Db



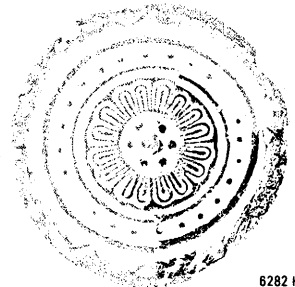
6282 Fa



6282 Fc

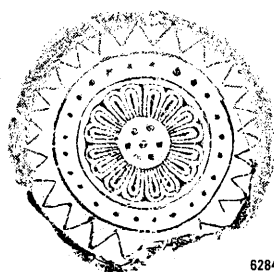


6282 G

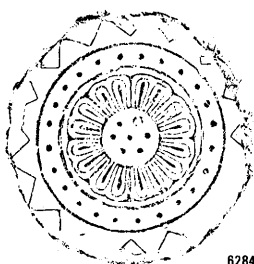


6282 Ha

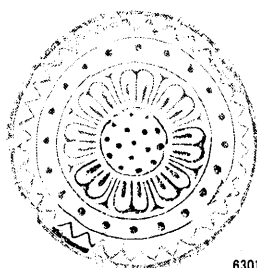
第13图 軒丸瓦 1 (1/5)



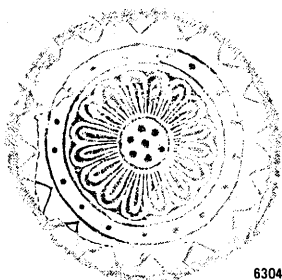
6284 A



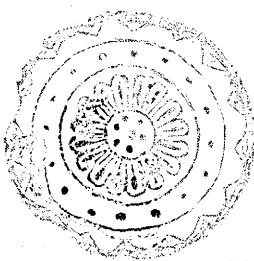
6284 C



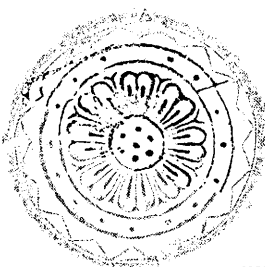
6301 C



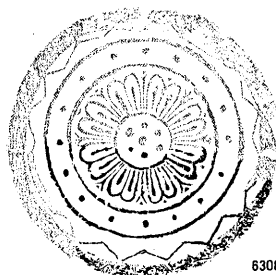
6304 A



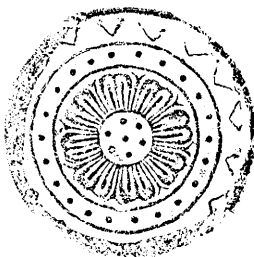
6307 A



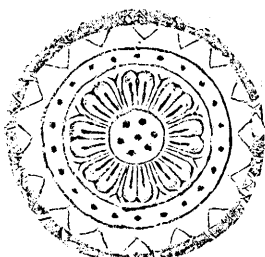
6308 A



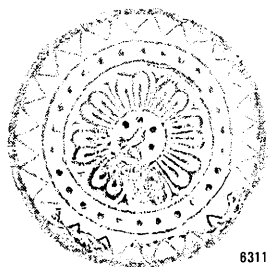
6308 C



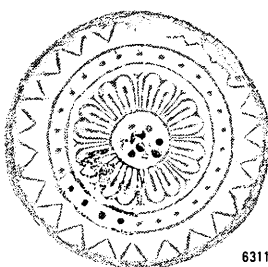
6308 D



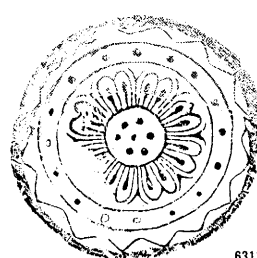
6308 I



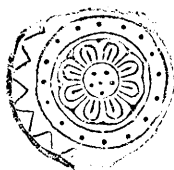
6311 A



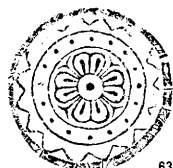
6311 B



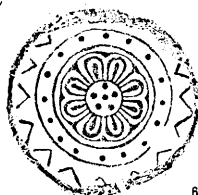
6311 F



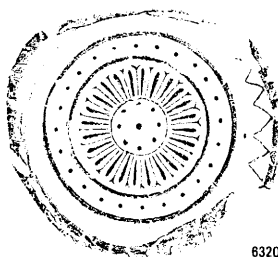
6314 Ca



6313 C



6314 Cb

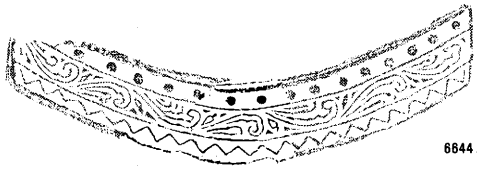


6320 Aa



新形式

第14圖 軒丸瓦 2 (1 / 5)



6644 A



6681 F



6663 B



6682 A



6663 C



6682 B



6664 D



6682 C



6664 F



6685 A



6664 N



6685 B



6666 A



6689 A



6681 B

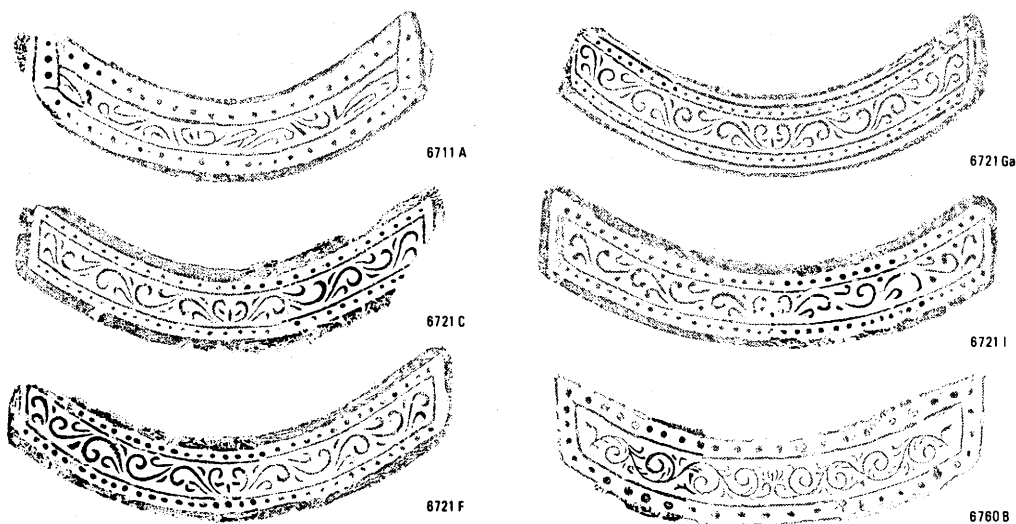


6691 A



6719 A

第15图 軒平瓦 1 (1/5)



第16図 軒平瓦 2 (1/5)

軒丸瓦	二条大路 北側溝	二条大路 南側溝	十二坪内部	全体
6075 A			1 (0.67)	1
6135 A E			4 (2.67) 3 (2.00)	7 (4.67) 3
6225 A		1	3 (2.00)	4
6231 B	1			1
6236 A			1 (0.67)	1
6272 A	2		1 (0.67)	3
6281 Aa B	1		2 (1.33) 1 (0.67)	3 (2.00) 2
6282 Ba Db Fa Fc G Ha 不明	1		5 (3.33) 2 (1.33) 1 (0.67) 1 (0.67) 18 (12.00) 1 (0.67) 6 (4.00)	34 (22.67) 18 1 1 6
6284 A C			3 (2.00) 3 (2.00)	6 (4.00) 3
6301 C			2 (1.33)	2
6304 A	3	1	2 (1.33)	6
6307 A			1 (0.67)	1
6308 A C D I		1	2 (1.33) 5 (3.33) 38 (25.33)	45 (29.99) 5 43
6311 A B F	1	1	4 (2.67) 2 (1.33) 2 (1.33)	8 (5.33) 4 2
6313 C			2 (1.33)	2
6314 Ca Cb 不明	1		1 (0.67) 1 (0.67) 2 (1.33)	4 (2.67) 2 2
6320 Aa			1 (0.67)	1
新形式			1 (0.67)	1
型式不明	2		28 (18.67)	30
(合計)	17	4	150 (100.01)	171

軒平瓦	二条大路 北側溝	二条大路 南側溝	十二坪内部	全体
6644 A	1		1 (1.08)	2
6663 B C 不明			2 (2.15) 3 (3.22) 4 (4.30)	9 (9.67) 3 4
6664 D F N			2 (2.15) 2 (2.15) 4 (4.30)	8 (8.60) 2 5
6666 A			1 (1.08)	1
6681 B F	1		6 (6.45)	6 1
6682 A B C		1	2 (2.15) 17 (18.30) 5 (5.38)	24 (25.83) 18 5
6685 A B		1	2 (2.15)	1 2
6689 A			1 (1.08)	1
6691 A		1	1 (1.08)	2
6711 A			1 (1.08)	1
6719 A			6 (6.45)	6
6721 C F Ga I 不明	1		4 (4.30) 5 (5.38) 1 (1.08) 2 (2.15) 3 (3.22)	15 (16.13) 4 5 2 2 3
6760 B		1		1
型式不明			18 (19.40)	18
(合計)	4	4	93 (100.08)	101

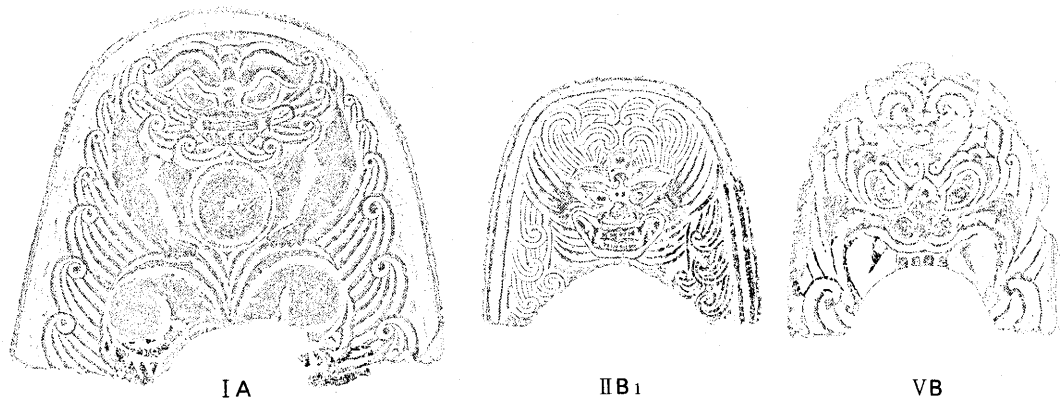
※()内の数値は十二坪内部での出土比率(%)である。

第2表 出土軒瓦計数表

鬼瓦 十二坪内から3型式4点の平城宮式鬼瓦が出土した。平城宮式の鬼瓦はI～VIの6型式に区分され、各型式にはA（大型）、B（小型）の2種がある。^{注3)}今回出土したのはIA式2点、II B₁式1点、VB式1点である。IA式は蹲踞した姿の全身像をあらわし、II B₁・VB式は顔面のみをあらわすが、II B₁式が顔面全部を表現しているのに対し、VB式では下顎の表現を欠く。^{注4)}平城宮軒瓦編年との対比では、IA式はI期（和銅元年～養老5年）に、II B₁式はII期（養老5年～天平17年）に、VB式はIII期（天平17年～天平勝宝年間）にそれぞれ位置づけられている。

施釉瓦 二条大路北側溝から12点、十二坪内から90点の施釉瓦が出土した。いずれも小片で、緑釉単彩のものと二彩あるいは三彩に多彩な釉薬をかけ分けたものがある。種別内訳は軒平瓦2点（緑釉1、多彩釉1）、丸瓦3点（多彩釉2、不明1）、平瓦95点（緑釉9、多彩釉79、不明7）、熨斗瓦2点（緑釉）である。軒平瓦はともに瓦当近くを残す破片であるが、瓦当面を欠く。曲線顎で、顎部と平瓦部凹面に施釉がある。平瓦は凹面と狭端面に施釉するが、他の瓦と重なる部分は施釉せず、側縁近くでは縁から2～4 cm幅の範囲が無釉である。これとは逆に熨斗瓦は凸面と側面に施釉し、凸面では側縁から5 cm幅の範囲のみ釉薬がかかる。平瓦・熨斗瓦は凸面に縦位の縄叩き目、凹面に布目を残すが、施釉範囲では原則的にこれらの痕跡を丁寧すり消す。

ところで、従来寺院を除く京内宅地では、右京北辺二坊二・三坪～北京極大路、左京二条二坊十三坪、^{注6)}同十四坪、^{注7)}左京三条一坊二坪～朱雀大路、^{注8)}同十四坪、^{注9)}左京三条二坊十坪、^{注10)}左京五条二坊十四坪、^{注11)}左京六条二坊九・十坪間小路で施釉瓦の出土があるが、^{注12)}左京二条二坊十四坪に約70点、左京三条二坊十坪に10点ほどがあるほかは1、2点が出土したにすぎない。こうした中で左京二条二坊十四坪と今回調査した同十二坪での出土量は特異で、これらはいずれも東院推定地を中心に過去に平城宮で出土した施釉瓦の総量に匹敵する数量である。また、施釉瓦の使用方法については、従来平瓦の出土量が少ないこともあってか、軒先や大棟、降り棟などの屋根の輪郭となる部分にのみ使用されたとする考え方がある。^{注13)}しかし、左京二条二坊十二坪・十四坪では平瓦が圧倒的に多く、そうした解釈にはそぐわない様相を呈している。



第17図 鬼瓦 (1/8)

左京二条二坊十二坪出土の軒瓦について

出土した軒瓦は、発掘面積1aあたりでの出土量に勘算すると14点になる。これまでに寺院を除く京内遺跡で比較的広範囲に調査されたところをみても、1aあたりの軒瓦出土点数は多くても3点ほどで、ところによっては1点にすらも満たない場合があるので、十二坪での出土量が京内でもいかにずば抜けて多いかがわかる。^{注14)}こうした状況は唯一調査地東隣の十三坪西半部でも同様で、ここでは1aあたり11点^{注6)}が出土している。ちなみに平城宮内では、内裏北外郭地域で1aあたり18点、第1次大極殿院地域で12点の軒瓦の出土があり、十二坪および東隣十三坪の出土量は宮内の主要地域の状況に匹敵することが指摘できる。

さて、十二坪出土の軒瓦の製作時期を平城宮軒瓦編年をもとに整理すると表3のようにになる。新形式については、文様の特徴からⅡ期の可能性が考えられるが、保留した方がよいであろう。これらのうち出土点数の割合から組合わせが確実視できるのは、Ⅱ期の6308I—6682Bと、Ⅲ期の6282—6721である。6282—6721は平城宮内（大膳式）での組合わせと同じだが、6308I—6682Bはともに宮内での出土は知られておらず、京内でもはじめて確認された組合わせである。6682Cについても、Bほどの点数はないが同じく宮内未出のもので、6308Iと組合う可能性がある。そのほかの型式については、出土点数が少なく、十二坪でいかなる組合わせで使用されたかはにわかに決し難いが、平城宮内の主要地域での組合わせを数多く抽出できる点が指摘できる。すなわち、Ⅱ期では6304A—6664D・F（内裏東外郭）、6311A・B—6664D・F（第2次内裏）、6313C・6314C—6685A・B・6666A（第2次内裏）、6314C—6666A（内裏北方官衙）、Ⅲ期では6225A—6663B・C（第2次大極殿院、朝堂院）の組合わせで、東隣十三坪の調査でも同様な組合わせのいくつか抽出できる。

ところで、京内でまとまった量の瓦が出土する場合、軒瓦の様相には2つのあり方のあることが従来から指摘されてきた。^{注10)}ひとつは平城宮所用瓦の同範品が主体を占める場合で、いまひとつは京独自の軒瓦が主体となる場合である。前者については、官が造営に深く関与した公的施設、すなわち宮外官衙や離宮などの存在を反映するものと理解されている。かかる見地からすれば、十二坪出土の軒瓦の様相は、Ⅲ期においてまさしく前者のあり方の典型といえるが、Ⅱ期で過半数を占める6308I—6682Bの組合わせは先述のように宮内未出であり、6682Cもまた同様である。^{注9)}とはいっても、これらの軒瓦は、従来京独自の瓦の代表例に挙げられる左京三条一坊十四坪での6091A—6691B、羅城門地域^{注15)}での6316—6710、左京三条二坊十五坪^{注10)}での6732などとはおおそ異質で、一連の「平城宮式」軒瓦の範疇で理解されべき瓦当文様を備えている。恐らくは他の平城宮同範瓦と同様に官の製品であろうが、宮内未出であることは、あるいは官による京の造営用に製作された瓦の可能性を示唆するものかも知れない。また、いまひとつ十二坪の軒瓦の様相で留意せられるのは、Ⅳ期以降のもの^{注9)}の出土がほとんどない点で、東隣の十三坪で法華寺阿弥陀浄土院と同範の6138、6767、6768が多数出土している状況とはまったく対照的である。

時期	遺跡		左京二条二坊十二坪 (今回の調査)		左京二条二坊十三坪			
	軒	丸瓦	軒	平瓦	軒	丸瓦	軒	平瓦
和銅元年 (708)								
I 期	6231	B	6644	A	6272	A・B	6640	A
	6272	A	6664	N	6274	Ac	6643	C
	6281	Aa・B			6275	K	6664	K
	6284	A・C						
養老5年 (721)								
II 期	6135	A・E	6664	D・F	6291	A	6664	F
	6301	C	6666	A	6308	A・I	6682	B
	6304	A	6681	B・F	6311	A・B・F	6685	B
	6308	A・D・I	6682	A・B・C	6313	A・C・G	6691	A
	6311	A・B・F	6685	A・B				
	6313	C	6691	A				
	6314	Ca・Cb						
	6320	Aa						
天平17年 (745)								
III 期	6225	A	6663	B・C	6225	A・C	6663	B・C
	6282	Ba・Db・Fa Fc・G・Ha	6689	A	6133	Aa・Db	6721	Ga・Gb・Hb
			6719	A	6282	Bb・Db		
			6721	C・F・Ga・I	6316	A		
天平宝字元年 (757)								
IV 期	6075	A	6760	B	6138	A・B・I・J	6767	A・B
	6236	A			6236	A	6768	A・B・C
宝龜元年 (770)								
不明	6307	A	6711	A	6131	A	6704	A
		新形式			6132	A	6713	A

第3表 出土軒瓦の編年

(左京二条二坊十三坪は奈文研『左京二条二坊十三坪の発掘調査』(1984)を参照した。)

- 奈文研『平城宮出土軒瓦型式一覧』(1978) 型式番号は4桁の数字で表示され、第1位の数字6は奈良時代を表わし、第2位以下の数字は瓦の種類を表わす。A以下のアルファベットは上記の型式を細分するもので、a以下のアルファベットは范を彫り直したり、文様を彫り加えた場合、当初のものと区別するために使用される。
- 奈良市教委「平城京左京三条二坊九坪発掘調査概要報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和54年度』(1980)
- 毛利光俊彦「日本の古代鬼面文瓦一8世紀を中心として」奈文研『研究論集VI』(1980)
- 奈文研『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ瓦編2解説』(1975)、同『平城宮発掘調査報告XI』(1982)
- 奈文研『昭和52年度平城宮跡発掘調査部調査概報』(1978)
- 奈文研『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』(1984)
- 奈文研『昭和49年度平城宮跡発掘調査部調査概報』(1975)
- 奈文研編・奈良市教委刊『平城京朱雀大路発掘調査概報』(1982)
- 奈文研『奈良国立文化財研究所年報1968』(1968)
- 奈文研『平城京左京三条二坊』(1975)
- 奈良市教委「平城京左京五条二坊十四坪発掘調査概要報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和54年度』(1980)
- 奈良市教委「平城京左京六条二坊九・十坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和58年度』(1984)
- 八賀 晋「彩釉瓦磚について」五島美術館『日本の三彩と緑釉』(1974)
- 1町(あるいはそれ以上)利用の京内遺跡の主な例を挙げると、左京一条三坊十五・十六坪で1aあたり3点、左京三条二坊六坪で2点、同十・十五坪で1点、左京三条四坊七坪で0.8点、左京五条一坊一・八坪で0.4点、左京五条二坊十四坪で1点である。
- 奈文研編・大和郡山市教委刊『平城京羅城門跡発掘調査報告』(1972)

なお、出土軒瓦の型式の同定作業にあたっては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第3調査室の協力を受け、山本忠尚、岩永省三、深沢芳樹の各氏から御教示を得た。

3. 土器類

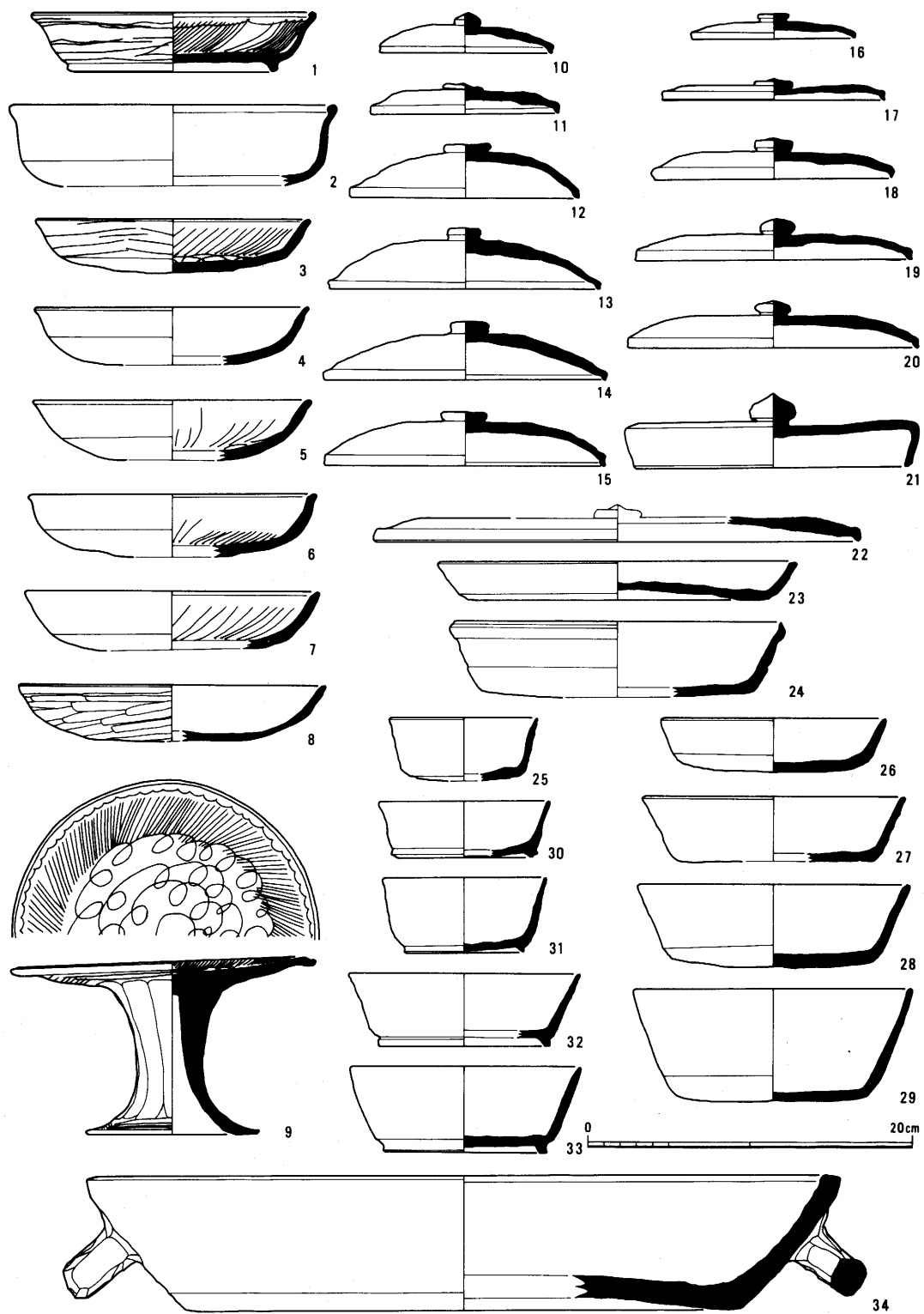
A. 土器

土器は、遺物包含層、及び二条大路両側溝、井戸、土壙などから出土した。大部分は、大路両側溝から出土したもので、十二坪内での出土は極めて少ない。時期的には、奈良時代前半～中頃にかけてのものが大多数を占めるが、古墳時代のものも若干ある。以下、遺構に伴うものを中心に記述する。

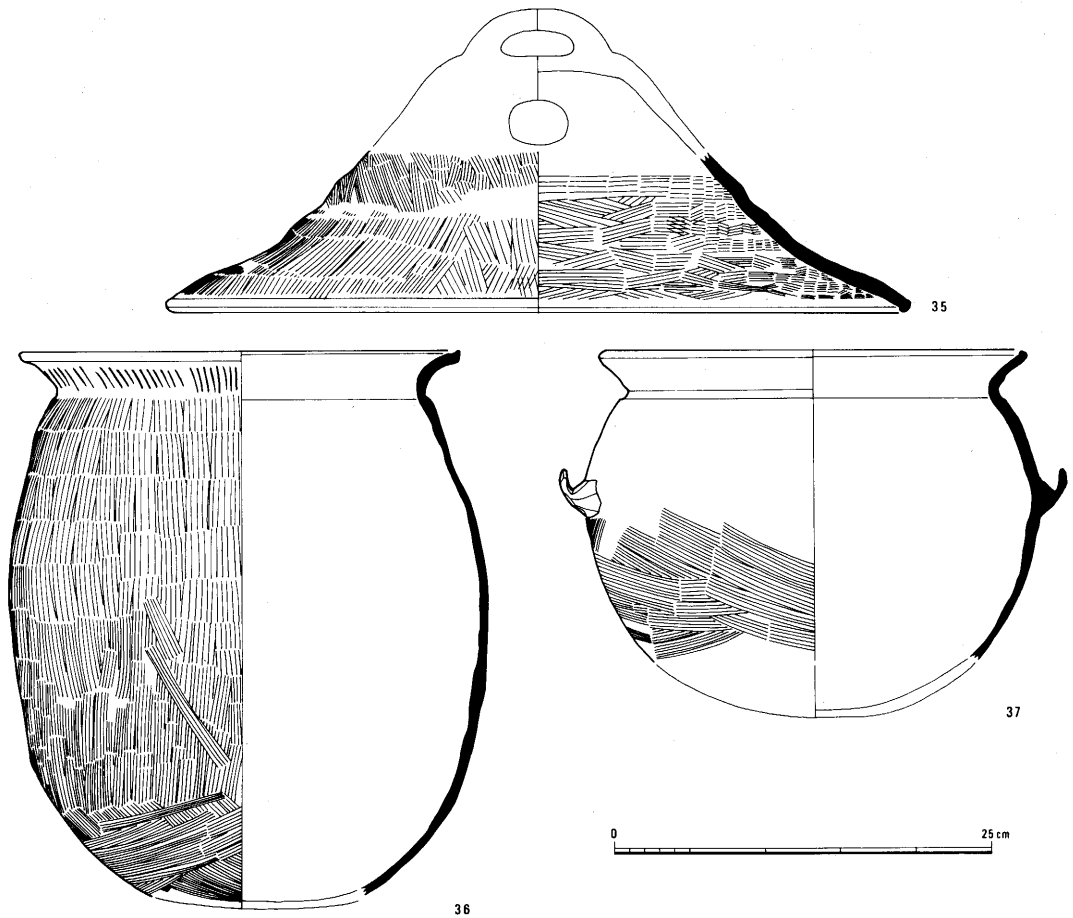
SD02 出土土器 (第18・19図、図版22) 土師器、須恵器がある。大部分は下層の黒色粘土から出土したもので、上層からの出土は極めて少ない。ここでは、特に断りのない限り下層からの出土品である。時期的には奈良時代前半のものが多数を占める。

土師器 杯A、杯B、杯B蓋、杯C、皿A、皿B、蓋、高杯、甕A、甕Bがある。杯A(2)は、底部外面をへら削りし、口縁部内外面をよこなでする b_0 手法で調整する。胎土は精選され、焼成も良好である。杯B(1)は、底部外面と口縁部外面をへら磨きで調整する。口縁部内面には、一段の斜放射状暗文と連弧状暗文を施す。上層出土。杯C(3~7)は、丸底に近い底部と外傾する口縁部からなる。口縁部先端は内傾する。底部外面は未調整のままに放置し、口縁部にはへら磨きを施さない a_0 手法のもの(4~7)とへら磨きをする a_0 手法のもの(3)がある。3は内面に螺旋状暗文と斜放射状暗文を、5~7は一段の斜放射状暗文を施す。皿A(8)は、外面全体をへら削りする c_0 手法で調整する。高杯(9)は、扁平な杯部と面取りによる断面9角形の短い脚部からなる。杯部外面と裾部外面にはへら磨きを施す。杯部内面には、螺旋状暗文と一段の斜放射状暗文及び連弧状暗文を加える。胎土は精選されており、焼成も良好である。甕A(36)は、最大径が胴部下半にある長胴の甕。底部には不定方向の、胴部には縦方向のはげ目を施す。甕B(37)は、球形の胴部を呈し、一對の把手をもつ甕。胴部下半を斜め方向のはげ目で調整する。蓋(35)は、笠形を呈する双孔把手付大蓋である。頂部を欠いてはいるが、半環状の把手が付き口縁部上半には丸い穿孔をもつものとなろう。縁部外面には縦方向の粗いはげ目を、縁部内面には横方向のはげ目を施す。

須恵器 杯A、杯B、杯B蓋、杯C、皿A、皿B、皿B蓋、皿C、碗A、盤A、壺A蓋、甕がある。杯A(25~28)は、大きさにより杯AⅢ(26~28;口径約15.5cm、器高約4.1cm)、杯AⅤ(25;口径9.0cm、器高4.0cm)に分けることができる。底部の調整には、ロクロ削り(26、28)、へら切りののちナデ(27)、へら切りのままで放置するもの(25)がある。口縁部はいずれもロクロナデ調整で仕上げる。杯B(30~33)は、大きさにより杯BⅢ(32、33;口径14.3cm、器高約4.9cm)、杯BⅤ(30、31;口径約10.1cm、器高約4.6cm)に分けられる。3は、底部外面をへら切りのままで放置する。31、32は、ロクロナデ調整。33は、口縁部をロクロナデ、底部外面はロクロ削りで調整する。杯B蓋(10~20)は、形態から、頂部が丸味をおび笠形を呈する



第18图 SD02出土土器 1 (1/4)



第19図 SD02出土土器 2 (1/5)

もの(10~15)と頂部が平たいもの(16~20)に分類できる。調整には、頂部をロクロナデするもの(10、12、14、17)とロクロ削りするもの(11、15、16)とがある。杯C(24)は、土師器杯Aの模倣形態で口縁部先端を内側に巻き込むのを特徴としている。ロクロ削りが底部外面から口縁部下半まで及ぶ。皿B蓋(22)は、平たい頂部と屈曲度の小さい縁部からなる。頂部をロクロ削り、縁部はロクロナデで仕上げる。内面には墨書がある。皿C(23)は、あげ底の底部と外方に開く口縁部からなる。口縁部先端は内傾する。底部外面はロクロ削りを施すが、底部中央には右廻りのナデを加えている。椀A(29)は、杯Aをさらに深い形にしたものである。底部外面をロクロ削りしたのちにロクロナデ調整をする。盤A(34)は、あげ底の底部と外方に開く口縁部からなる。口縁部には半環状の把手が一对つく。底部外面から口縁部下半までをロクロ削りで調整する。口縁部上半はロクロナデ調整。壺A蓋(21)は、平たい頂部と直角に折れ曲がる縁部からなり、宝珠形のつまみを付す。いわゆる葉壺の蓋である。頂部をロクロ削りし、縁部をロクロナデ調整をする。外面全体に自然釉が付着している。

SD03-A 出土土器 (第20図、図版22) 奈良時代前半～中頃の特徴をもつ土師器、須恵器が出土した。

土師器 杯A、杯B、杯B蓋、杯C、皿A、皿B、皿C、壺B、甕A、甕B、甕がある。杯C (57、58) は、丸底ぎみの底部と屈曲しながら立ちあがる口縁部からなる。口縁部先端は内傾する。いずれも a₀ 手法。皿A (55、56、59～61) は、口縁部を丸くおさめるもの (55、56) と内側に巻き込むもの (59～61) とがある。55、60は a₀ 手法。56、59、60は b₀ 手法。皿C (62、63) は、手づくねで厚手につくられており、いずれも a₀ 手法で調整する。壺B (64～66) は、外反する短かい口縁部をもつ広口の壺である。いずれも、口縁部を強くよこなで、胴部は未調整のまままで放置している。


須恵器 杯A、杯B、杯B蓋、皿A、皿B、椀A、壺、壺A蓋、甕がある。杯A (70) は、全面ロクロナデ調整。杯B (71) は、底部外面と口縁部下半をロクロ削りする。杯B蓋 (67、68) は、いずれもロクロナデ調整。皿D (69) は、ロクロナデ調整。口縁部先端にはうるしが付着。

SD03-B 出土土器 (第20図、図版22) 溝内の堆積は、上下二層に分けることができる。下層からは、奈良時代後半の特徴をもつ土師器、須恵器が出土した。

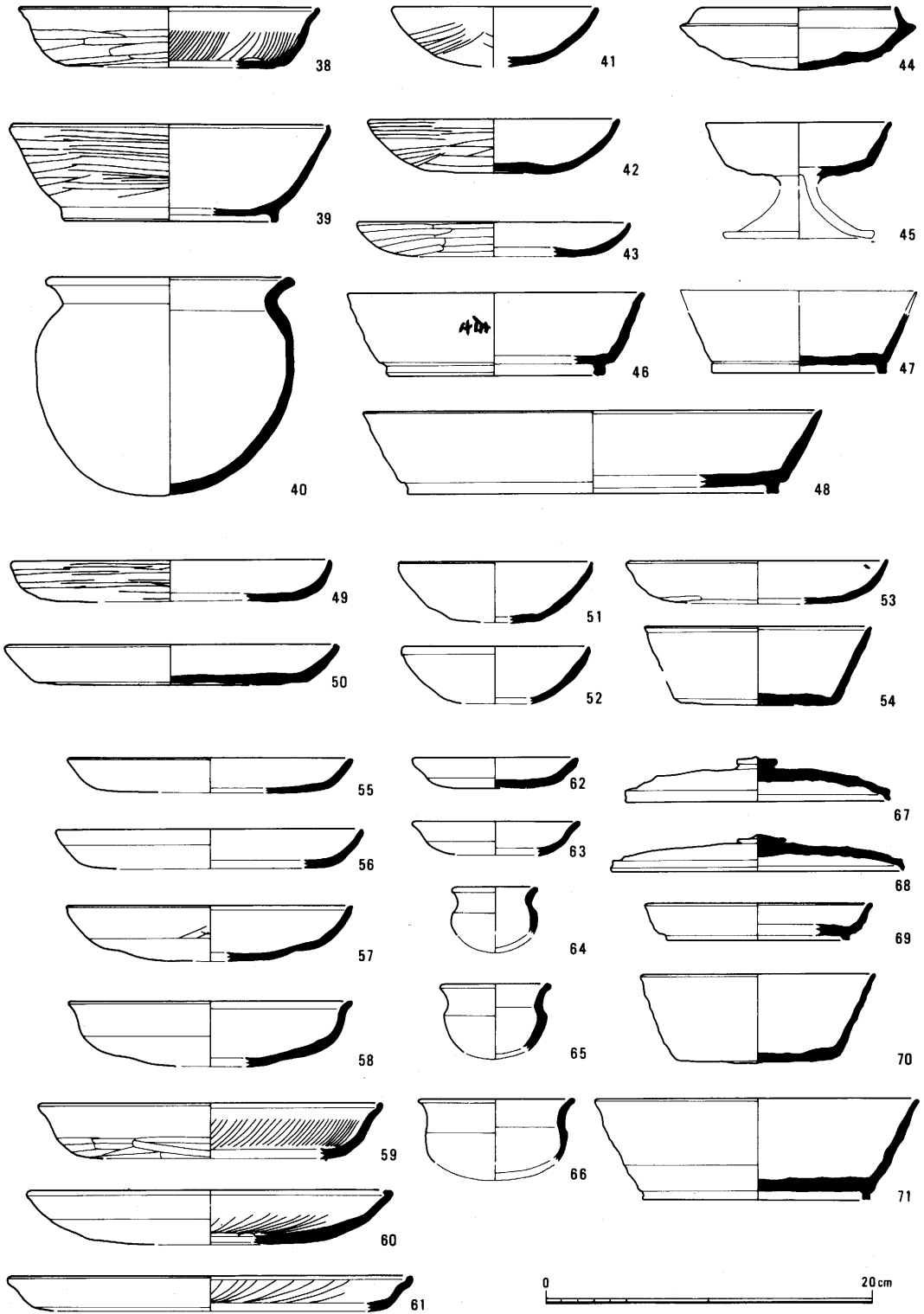
土師器 杯A、杯B、皿A、椀A、椀C、甕がある。皿A (49、50、53) は、平たい底部と内彎ぎみに立ちあがる口縁部からなる。調整は、49が c₃ 手法、50は a₀ 手法、53は b₀ 手法。椀C (51、52) は、小さな底部と内彎ぎみに立ちあがる口縁部からなる。a₀ 手法。

須恵器 杯A、杯B、皿A、甕がある。杯A (54) は、口縁部をロクロナデで仕上げ、底部外面はへら切りのままで放置している。

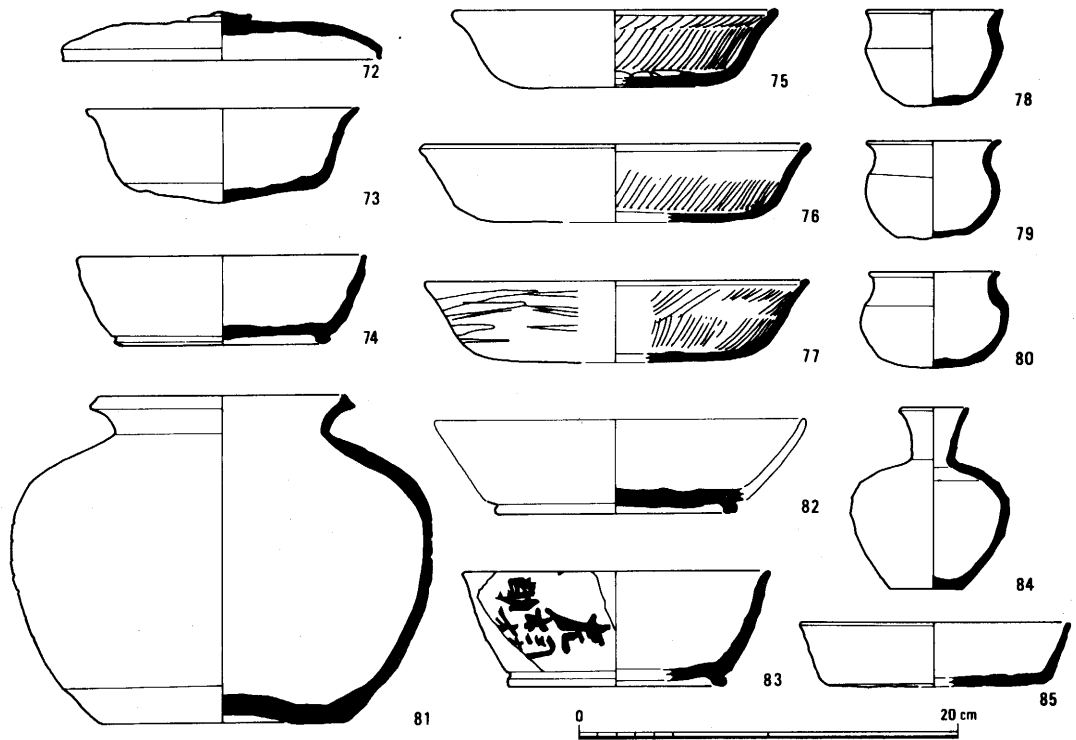
上層からは、古墳時代及び奈良時代前半の特徴をもつ土師器、須恵器が出土した。

土師器 杯A、杯B、皿A、椀A、椀D、甕A、甕がある。杯A (38) は、c₀ 手法で仕上げている。口縁部内面には、一段の斜放射状暗文を施す。杯B (39) は、a₀ 手法。へら磨きの間隔がやや粗い。 (43) は、c₀ 手法で調整する。胎土は精選され、焼成も良好である。椀A (41) は、丸底に近い小さな底部と内彎ぎみに立ちあがる口縁部からなる。a₀ 手法。椀D (42) は、椀Aをやや浅くした形態である。口縁部先端は内傾する。底部外面をへら削りしたのち、底部外面から口縁部外面にかけてへら磨きする b₃ 手法で仕上げる。甕A (40) は、球形の胴部と外彎する口縁部からなる。口縁部先端は丸くおさめている。磨滅が著しく調整は不明である。

須恵器 杯A、杯B、杯B蓋、皿A、皿B、高杯、壺、甕がある。杯A (44) は、底部下半から口縁部下半までにロクロ削りが及ぶ。底部中央がやや尖り、口縁部の立ちあがり短い。杯B (46、47) は、いずれも口縁部内外面をロクロナデで調整する。46は口縁部外面に、47は底部外面に墨書がある。皿B (48) は、大型の皿で、底部外面から口縁部外面をロクロナデで調整する。高杯 (45) は、杯底部からやや斜め外方に開く口縁部をもつ。口縁部先端は丸くおさめている。脚部を欠く。杯部はロクロナデで調整している。



第20图 SD03-A·B出土土器(1/4)



第21図 SK38、SE31・32・35、SB10・19出土土器(1/4)

SK38 出土土器 (第21図) 奈良時代前半の特徴をもつ土師器、須恵器が出土した。

土師器 杯A (75) が1点ある。底部外面をへら削りで調整する。内面には、螺旋状暗文及び二段の斜放射状暗文を施す。

須恵器 杯A、杯B、杯B蓋がある。杯A (73) は、底部外面をロクロ削り調整。杯B (74) はロクロナデ調整。杯B蓋 (72) は、頂部をロクロ削り、縁部はロクロナデ調整をする。

SE31 出土土器 (第21図) 奈良時代前半の特徴をもつ土師器、須恵器が出土した。

土師器 杯A (77) が1点ある。口縁部は屈曲しながらちあがり、先端部は内側へ丸くおさめている。底部をへら削りし、口縁部外面をへら磨きする b_1 手法で調整する。内面には、螺旋状暗文及び二段の斜放射状暗文を施す。

須恵器 壺A (81) が1点ある。底部外面から胴部下半にロクロ削りが及ぶ。完形品である。

SE32 出土土器 (第21図) 奈良時代前半の特徴をもつ土師器が出土した。

土師器 杯A、皿A、碗A、壺Bがある。杯A (76) は、底部外面をへら削り調整する。内面には一段の斜放射状暗文を施す。壺B (78~80) は、平底に近い丸底と球形に近い胴部、外反する短い口縁部からなる。口縁部だけをよこなでし、それ以外は未調整のままである。

SE35 出土土器 (第21図) 奈良時代末~平安時代初頭の特徴をもつ土師器、須恵器が出土した。土師器は、杯あるいは皿の底部と考えられるものが数点出土しただけである。

須恵器 杯A、壺Mがある。杯A（85）は、底部外面をへら切りのままで放置している。底部外面に墨書がある。壺M（84）は、平底で球形の体部と外反する口縁部からなる小型の器である。底部外面に回転を利用した糸切り痕がある。

S B 1 0 柱掘形出土土器（第21図） 須恵器杯B（83）が1点ある。口縁部は内外面ともにロクロナデで調整する。口縁部外面には墨書がある。

S B 1 9 柱掘形出土土器（第21図） 須恵器杯B（82）が1点ある。底部外面をロクロナデ調整する。底部外面には、「≡」のへら記号及び墨書がみられる。

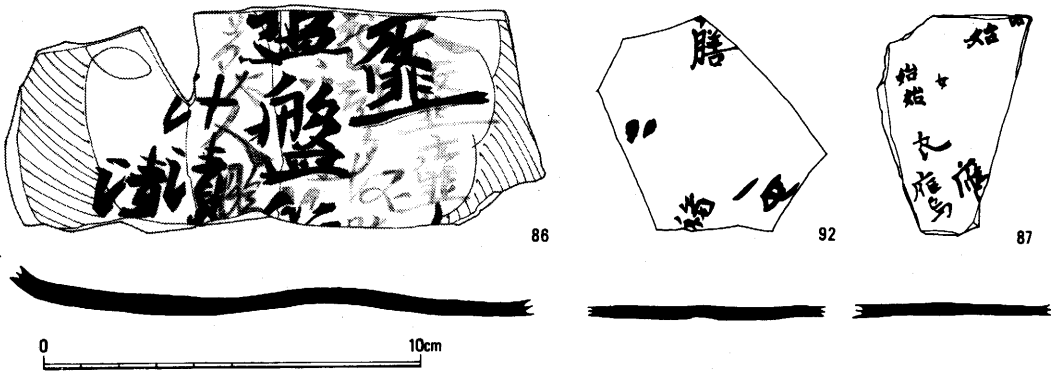
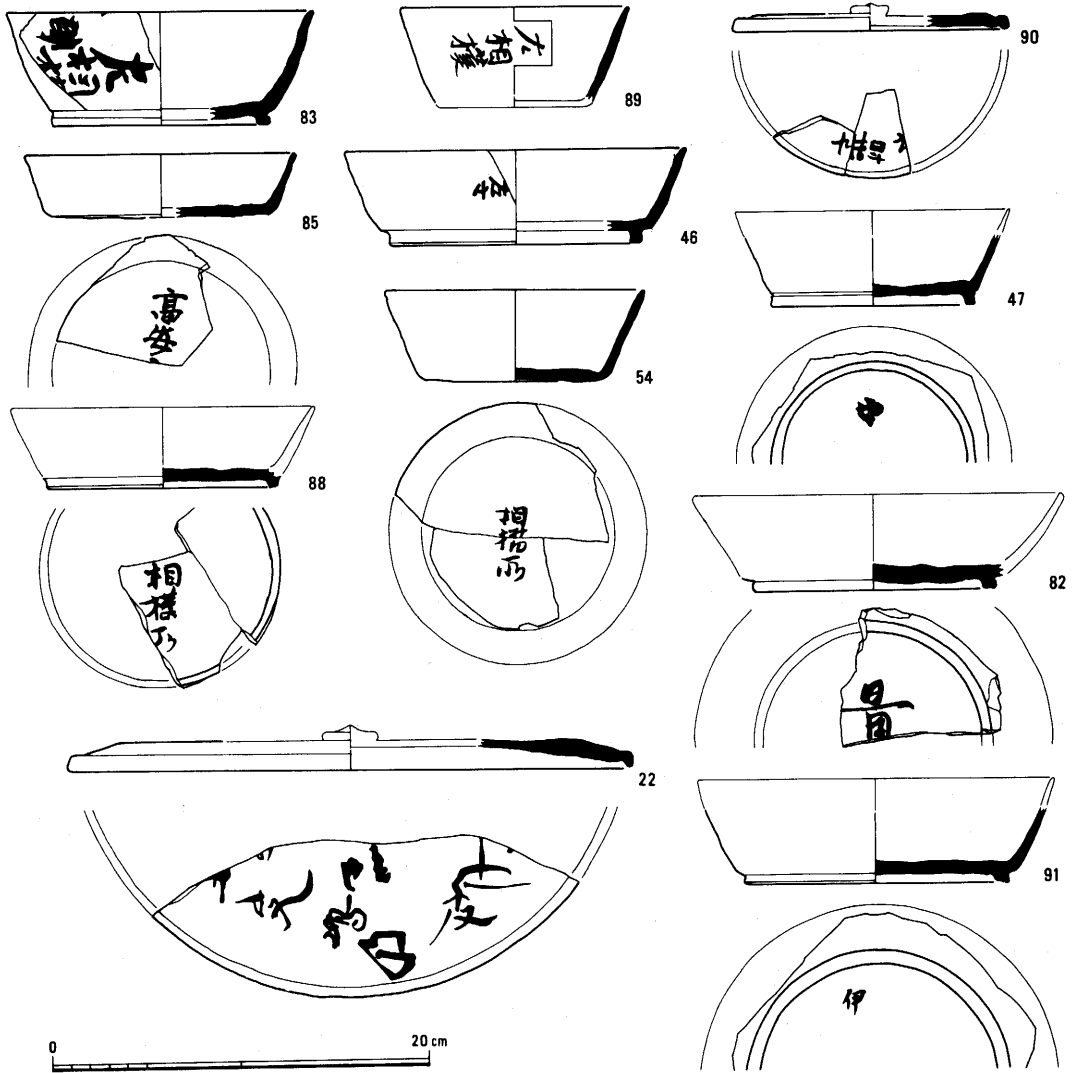
施釉陶器 緑釉椀、三彩壺がある。緑釉椀は、遺物包含層から、三彩壺はS G 30からそれぞれ1点ずつ出土したが、残存状態が悪く図示し得なかった。

B. 墨書土器（第22図、図版23、第4表）

墨書土器は、S D 03、S D 02-A・B、S E 35、S B 10及びS B 19の柱掘形、遺物包含層から合計20点が出土した。このうち、判読可能なものは14点である。以下、記載内容を表にまとめて記す。なお、表の土器番号は実測図及び図版の土器番号と一致する。

土器番号	記載内容	器種	記載位置	出土地点
22	乃カ／一文□乃／及／及	須恵器 皿B蓋	頂部内面	SD02下層
46	左 士	〃 杯 B	口縁部外面	SD03-B上層
47	中	〃 〃	底部外面	SD03-B下層
54	^[横カ] 相 □ 所	〃 杯 A	〃	〃
82	^[量カ] □	〃 杯 B	〃	SB19柱掘形
83	^[横カ] 左相 □ / 助	〃 〃	口縁部外面	SB10柱掘形
85	高安□	〃 杯 A	底部外面	SE35
86	^[盤カ] 僅カ / □ 盤 □ / 汁漬 / 漬(上) 人僅 / □ □ □ □ / □ □ 人(下)	土師器 杯又皿	底部外面	SD02下層
87	□ / 始 / 女 / 始始 / 衣 / ^[鷹カ] 鷹 □	〃 〃	底部外面	〃
88	相撲所	須恵器 杯 B	〃	遺物包含層
89	^[横カ] 左相 □	〃 杯 A	口縁部外面	〃
90	□ □	〃 杯B蓋	頂部内面	〃
91	伊	〃 杯 B	底部外面	〃
92	□膳 ^[中カ] □ □ 甘真 □ / □ 天	土師器 杯又皿	〃 底部内面	〃

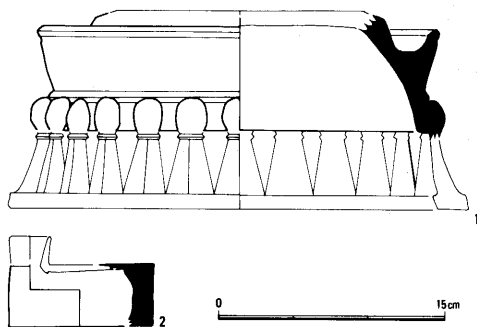
第4表 墨書土器一覽



第22図 墨書土器 (1/4、86のみ1/2)

C. 陶 硯 (第23図)

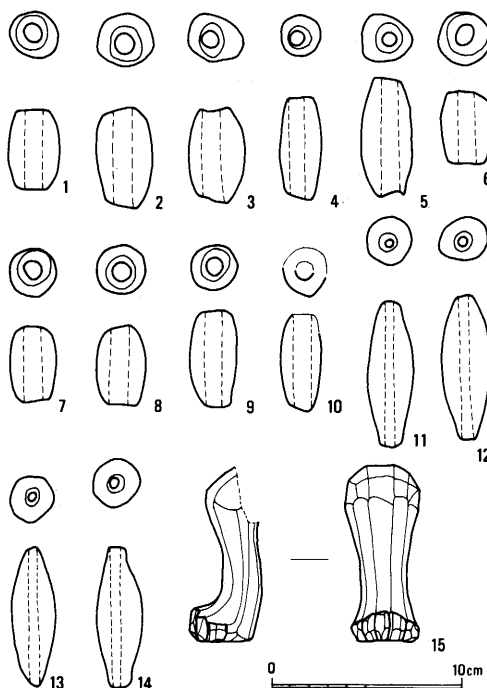
蹄脚円面硯(1)が1点ある。陸と海の区別を明瞭にし、陸の周囲には内提をめぐらさないタイプのものである。外提下端には、断面三角形の突帯が一条めぐり、半球状の脚頭の一部だけが残存する。遺物包含層から出土した。その他、硯に付随するものとして水滴(2)が出土した。体部は方形の箱型を呈し、口縁部は直立する。表面には自然釉が附着する。S B16及びS A24柱掘形から出土した破片が合し、一個体となる。



第23図 陶 硯 (1 / 5)

D. 土製品 (第24図、第5表)

土錘14点と獣脚形の土製品が1点ある。土錘(1~14)は形態・大きさなどから2つのタイプに分類することができる。1~10は、ほぼ円柱形を呈す。両端部径と胴部の最大径との差は約0.5cm、全長は約5cm、孔径は約0.8cmである。重さは21~38g。11~14は、柳葉形を呈す。両端部径と胴部最大径の差は1.6~1.9cm、全長は約7cm、孔径は約0.5cmである。重さは32~37g。1~4、6~10はS D03-Aから、5、11、13はS D03-B上層から出土した。獣脚形の土製品(15)は、壺あるいは盤の底部に付くものと考えられる。脚部にはていねいな面取りが施されている。胎土はきめこまかく、焼成も良好である。S D03-Aから出土。



第24図 土 製 品 (1 / 4)

番号	全長(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	番号	全長(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)
1	4.285	2.620	0.90	27.0	8	4.155	2.515	0.93	25.2
2	5.170	2.945	0.20	38.0	9	5.035	2.445	0.91	26.9
3	4.875	3.000	0.95	33.9	10	5.165	2.340	1.01	13.6
4	5.920	2.140	0.81	21.1	11	7.570	2.440	0.48	33.3
5	6.280	2.735	0.81	35.1	12	7.420	2.560	0.48	36.8
6	3.880	2.845	0.83	28.6	13	7.050	2.450	0.45	29.7
7	3.815	2.450	0.98	22.8	14	7.365	2.375	0.59	32.0

第5表 土 錘 計 測 表

4. 木製品

今回の調査では、二条大路側溝 S D 02・03から加工を施した木製品が数多く出土しており、他に多量の手斧屑、削り屑などがある。S E 31・32・35からも若干の木製品が出土している。以下、遺構ごとにその概要を記そう。

S D 0 2 出土木製品（第25図、図版24） 下層第1層の黒色粘土層から食膳具、容器蓋など60点あまりが出土したが、そのほとんどは用途不明木製品である。

食膳具 箸、杓子状木製品がある。箸（1）は径0.5cm前後の細長い棒で、断面六角形を呈し、下半を欠損する。残存長10.8cm、幅0.5cm。杓子状木製品（2~4）は細長い柄と身からなるもので、頸部は撥状を呈する。2は柾目材で頸部のみが残存する。柄幅1.5cm、厚さ0.3~0.5cm。3は板目材で身を欠損する。柄は断面長方形を呈し、下方に向かって細身になる。側面はていねいに削る。残存長24.8cm、柄幅2.8cm、厚さ1.3cm。4は板目材で柄の上半と身の一部を欠損する。身は細長く、受皿状にはならないもので先端を半円形にかたどる。柄は断面長円形を呈し側面を丸く削る。身の下半は素面をこまかく削り細身になる。身の長さ15.5cm、柄幅2.8cm、厚さ0.2~0.8cm。

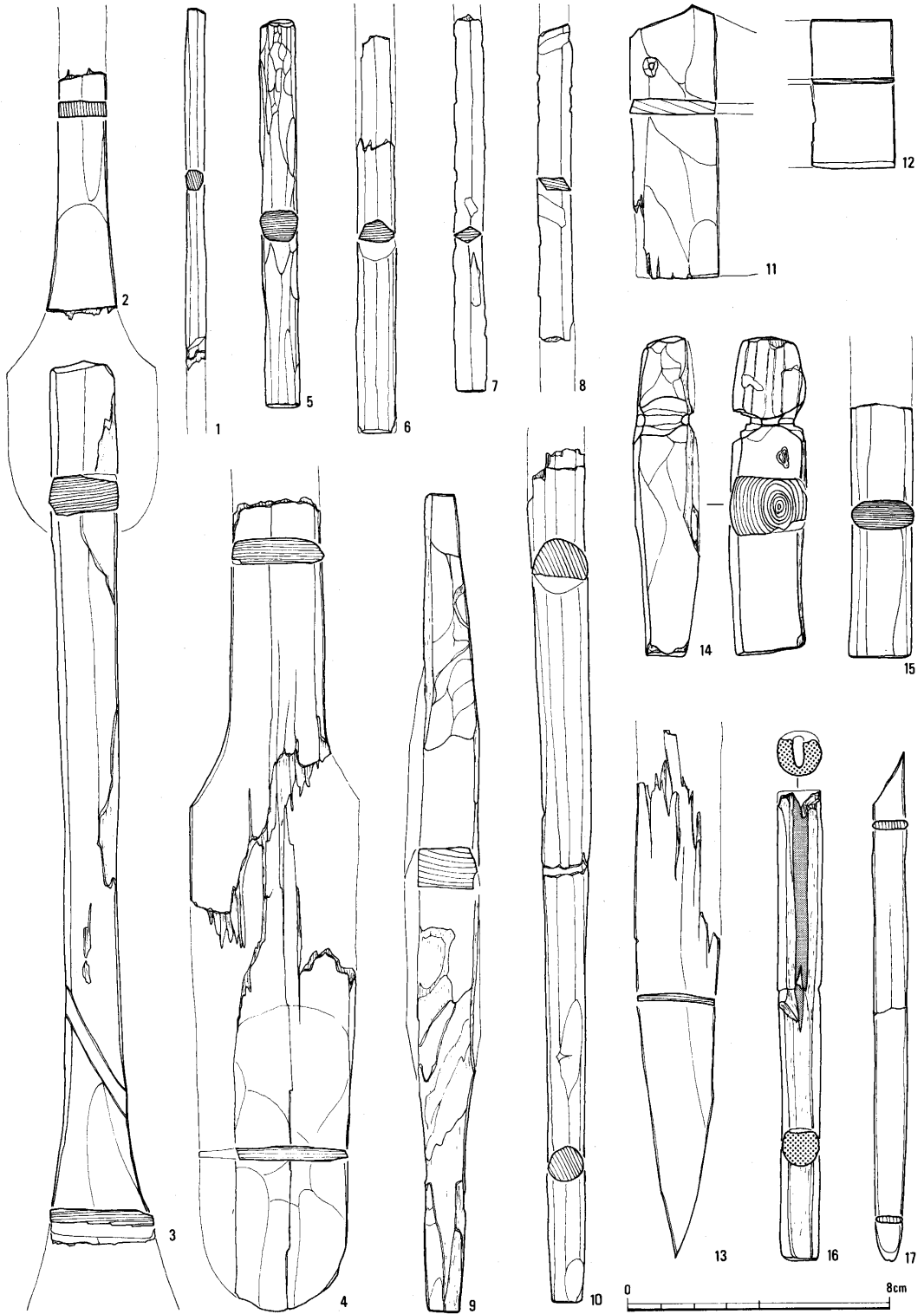
容器 容器蓋（49）は、平面形は正円にはならず不整形である。表裏は粗く削り周縁は薄くなる。径17.2cm、厚さ0.3~1.0cm。

用途不明木製品 棒状木製品、板状木製品がある。棒状木製品（5~10）は細長い丸棒か角棒で一端を尖らすもの、両端を直裁するものなどがある。5・6は両端を直裁した丸棒で表面をていねいに削る。5は端部がやや細身となるもので端部周縁を面取りする。6は一端を欠損する。7・8は断面が菱形を呈する角材で、7は上半、8は両端を欠損する。9は板目角材で両端を粗く削り細身となる。10は一方が細身となる丸棒で一方を欠損する。表面はていねいに削る。11は平面長方形の板目材で一側面を欠損する。一端を三角形にかたどり、その一側に小孔を穿つ。12は薄い長方形の板目材で一側を欠損し、他の一端を斜めに切断する。

S D 0 3 出土木製品（第25・26・27図、図版24・25） 黒色粘土層から出土した木製品及び手斧屑、削り屑は遺物整理箱130箱におよぶ。祭祀具、工具、食膳具、紡織具、服飾具、容器、用途不明木製品がある。繊維製品も出土したのでここで報告する。

祭祀具 削り掛け、陽物形木製品がある。削り掛け（13）は板目薄板の下半をV字状に尖らせたもので上半を欠損する。側面はていねいに削る。残存長16.3cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm。陽物形木製品（14）は丸太の両端を直裁し、側面二方を割り裂いて、断面をほぼ長方形につくる。一端からほぼ1/4のところから断面V字状の溝をめぐらせ、上下両端はやや細身となる。表面は粗く削り割り面をとどめる。長さ9.8cm、幅1.8~2.4cm、厚さ1.2~1.9cm。S D 03-B出土。

工具 刀子柄、へら状木製品、火鑽臼がある。15は断面長円形を呈する板目材で、上半を欠損するが、形状からみて刀子柄であろう。下端は直裁され周縁を面取りする。表面はていねいに



第25图 S D02・03出土木製品(1/2)

削る。残存長7.8cm、幅1.9cm、厚さ0.9cm、S D03-A出土。刀子柄(16)は刀身を欠くもので、刀身を抜きとったためか側面の一边を欠損する。細長い丸棒で背は直線をなし、一端は、直裁され周縁を面取りする。表面はていねいに削る。茎孔断面はほぼ長方形を呈する。刀茎を焼込みして柄に装着したのか茎孔内面は炭化する。S D03-B出土。へら状木製品(17)は細長い柁目材で一端を片下りに尖らせ、他端をU字状にかたどったもので、身は柄に比べて細身となる。身の周縁はていねいに面取りする。長さ15.5cm、幅0.8~1.0cm、厚さ0.2~0.3cm。S D03-B出土。火鑽臼(18)は平面長方形の板目材で表裏に割り面をとどめるが一端は斜めに切断される。上面2ヶ所に臼孔が残り内面は炭化する。残存長10.4cm、幅3.9cm、厚さ1.4cm、S D03-B出土。

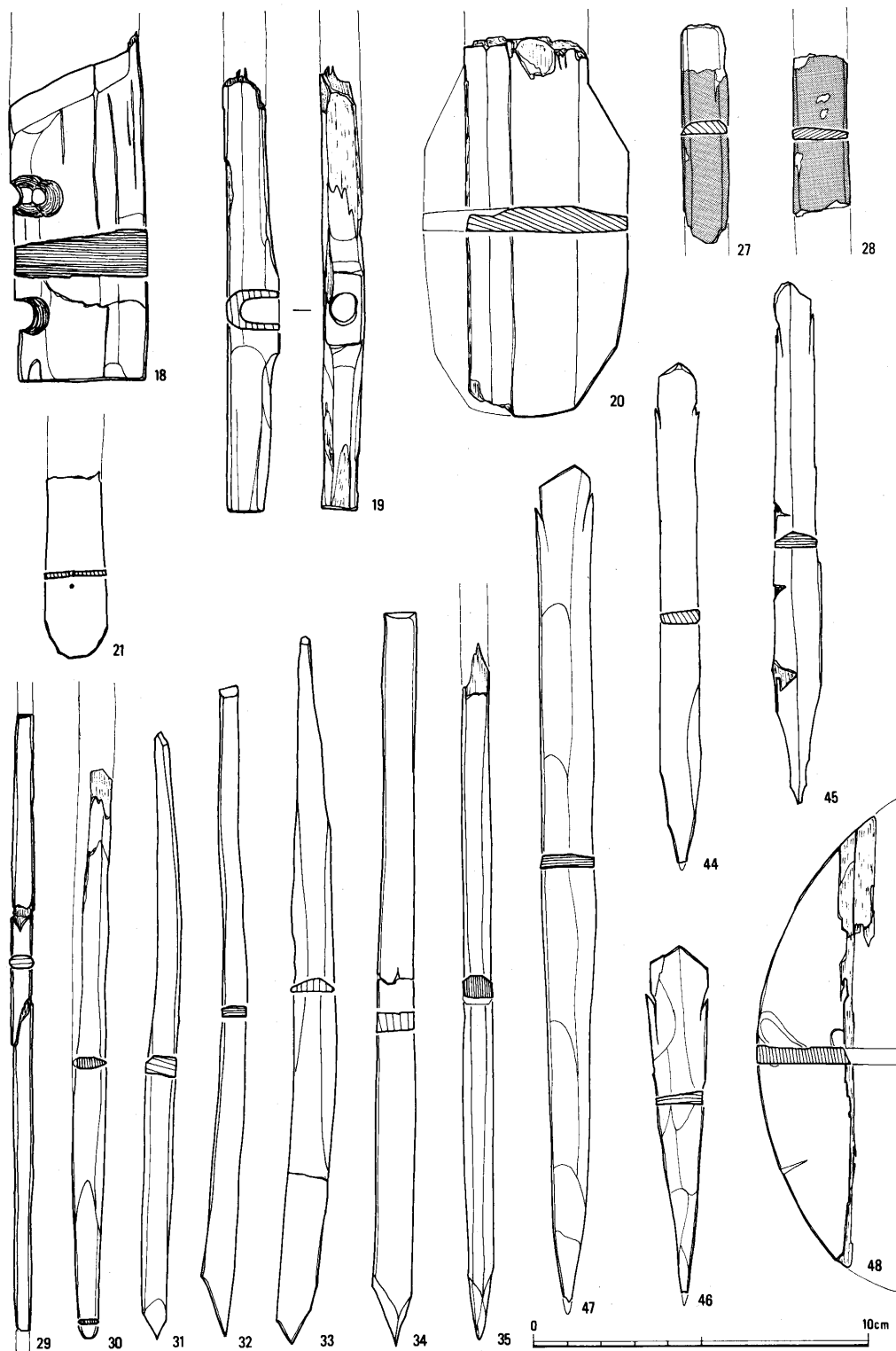
紡織具 糸巻き(19)は柁木の一部である。細長い棒状の板目材で、横木と組合せる柄穴部分を平坦面にとり、その両側を丸棒状に削る。端部は直裁され周縁を面取りする。残存長13.3cm、最大幅1.2cm、厚さ1.6cm、柄穴径0.8cm、柄穴の深さ1.0cm。S D03-B出土。

食膳具 杓子状木製品(20)は、板目材で柄と身の一側面を欠損する。身は平面小判形を呈し、受皿状にはならない。身の側面は粗く削る。残存長11.3cm、厚さ0.4~0.8cm。

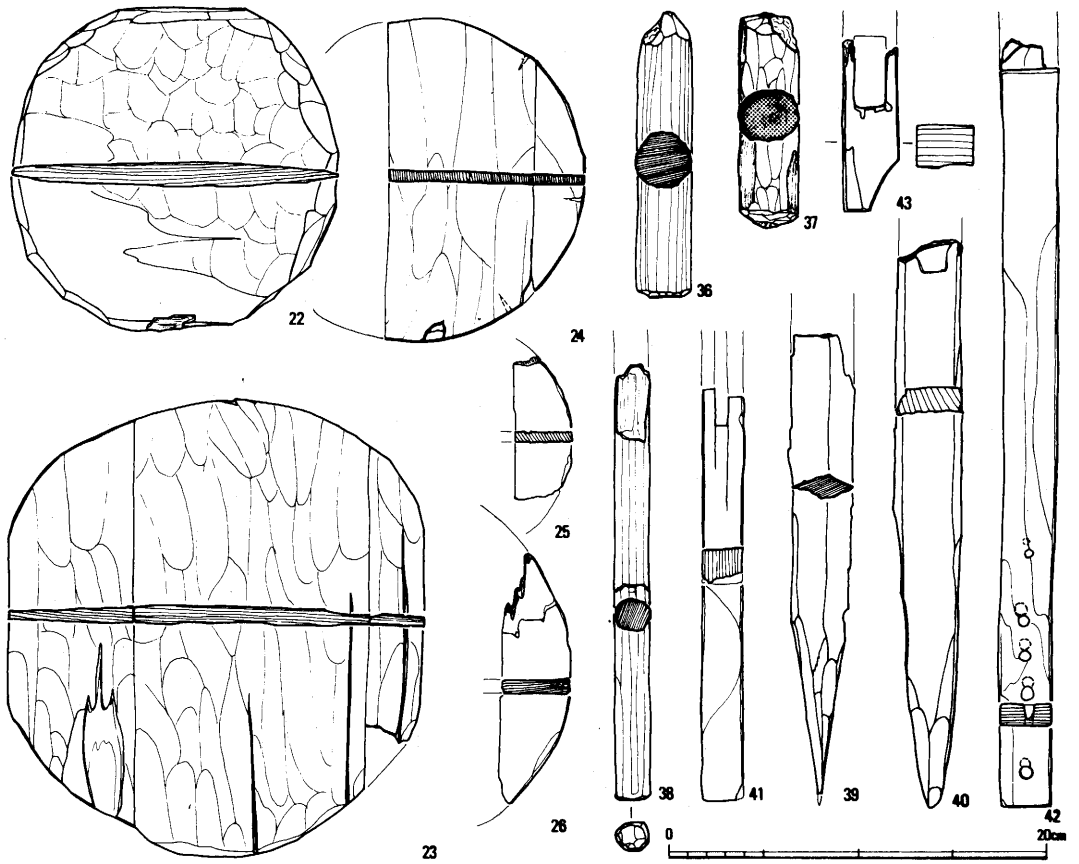
服飾具 檜扇、横櫛がある。檜扇(21)は骨の一部で上半を欠損する。柁目薄板で下部はやや幅広となり下端は半円形につくる。下端から2.1cmのところ綴合せの小孔を穿つ。残存長5.3cm、幅1.9cm、厚さ0.2cm。S D03-B出土。横櫛(50)はむねと歯の一部が残る。むねは断面長方形で肩部が丸くなる。歯数は3cmあたり22本。残存長3.2cm、むねの厚さ0.6~0.8cm。S B03-B出土。

容器 容器蓋、曲物底板がある。容器蓋(22・23)は板目材を不整形な円板状にかたどったもので表裏を粗く削る。22は周縁を細身に削り端部を尖らす。表裏の一部が炭化する。径約17.0cm、最大厚1.2cm、S D03-A出土。23は22に比べて大型のもので周縁は細身になり、端部は平坦面をもつ。径約24cm、最大厚1.0cm。S D03-B出土。曲物底板(24~26)は正円形にかたどった円板で側面に木釘穴が残る。24は柁目材で3ヶ所に木釘穴が残る。径16.8cm、厚さ0.6cm。S D03-B出土。25は板目材。径12.8cm、厚さ0.5cm。S D03-B出土。26は板目材。径18.0cm、厚さ0.7cm。S D03-B出土。

用途不明木製品 漆付木製品、棒状木製品などがある。漆付木製品(27・28)は板目薄板で、表面は丸みをおびた凸面となり黒漆を塗る。裏面は平坦面を呈する。このうち27は材の一端が残るもので先端部はやや丸みをおび黒漆が付着しないことからみて他の部材との接合面であった可能性が考えられよう。なお、27、28はS D03-Bから出土しており、同一個体の可能性が考えられる。棒状木製品(29~40)は細長い丸棒か角棒である。29は断面長円形の細長いヒゴ状のもので両端を欠損する。30は一端をU字状に尖らせたへら状のもので他端を欠損する。31~34は割り面が残る角棒の一端を尖らせ、他端を切断したもの。35は断面八角形の細長い棒で一端は円錐形に尖らせ、その先端は炭化する。他端は欠損する。36~38は大型の丸棒。36は一端を直裁し他端を尖らせたもので、周縁を面取りする。37は断面楕円形の丸材で一部に表皮が残る。両端に切り



第26図 S D03、S E31・32・35出土木製品 (1/2)



第27図 SD03出土木製品(1/4)

込みを入れ折り欠く。38は細長い丸棒で一端を欠損する。他端は直裁され周縁を面取りする。39・40は割り面を残す板材の一端を尖らせたもの。41は細長い角材で一端に凹形のくりをもつもの。42は細長い角材で一端を直裁し、他端は一側に段状の切り欠きをもつもの。下部中央に斜方向の小孔が縦一列に5箇所残る。43は凹状のくり込みをもつ角形で一部を欠く。29・32・34・36・37はSD03-A出土、27・28・30・31・33・35・39・40・42・43はSD03-B出土。

繊維製品 円座が2点出土し、原形をとどめているものが一点ある。円座(51)は縄をラセン状に13重巻いたものである。残存径48cm。SD03-A出土。

SE31・32・35出土木製品(第26図、図版25) 削り掛け(44~47)は板目薄板の下半をV字状に尖らせ上端を三角形にかたどり、その両端に斜め下りの切り込みを入れるもの。44・45は表裏に割り面が残るもので上端はやや丸くかたどる。44は長さ14.7cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm。45は長さ15.5cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm。44・45はSE31出土。46は小型で長さ10.3cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm。SE32出土。47は細長いもので長さ24.9cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm。曲物底板(48)は柁目材で正円形につくる。木釘穴が3孔残る。径18.2cm、厚さ0.5cm。47・48はSE35出土。

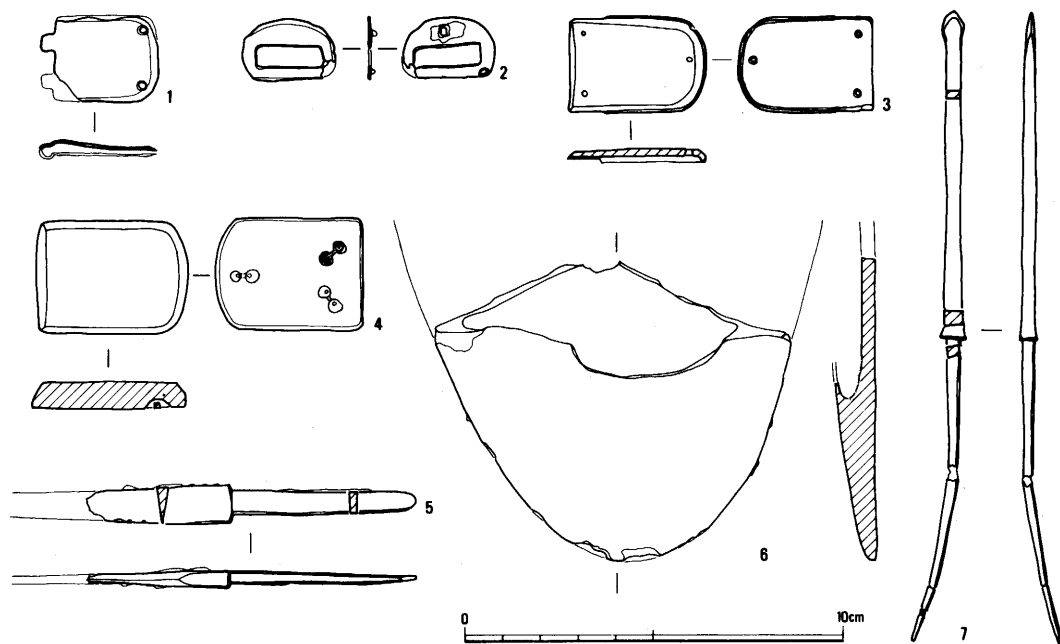
5. 金属製品・石製品

銭貨 (図版26) 銅銭が計18点ある。S D02からは和銅開珎4点、萬年通寶1点が、S D03—Aからは萬年通寶1点、S D03—Bからは和銅開珎2点、萬年通寶2点、神功開寶5点が、包含層からは和銅開珎1点、不明銭2点が出土した。和銅開珎はいずれも鑄文が角張った文字で「開」を「開」につくる。萬年通寶はいずれも「年」の第四画が横位置につく「横点萬年」である。神功開寶は「功」を「功」につくるもの2点、「切」につくるもの3点がある。

銅製品 (第28図、図版26) 帯金具(1~3)がある。1は鉸具で外枠と刺金を欠損する二鉸留の板金具片。包含層出土。2は丸柄の表金具で裏面の三方に鉸足がつく。S D43出土。3は鉈尾の裏金具で三鉸留である。外枠末端は約1cmにわたってヤスリがけする。表面はていねいに研磨するが、裏面は鑄放しのままである。長さ3.6cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm、S D03—A出土。

鉄製品 (第28図、図版26) 刀子、鋤先、鏃など5点ある。刀子(5)は棟関、刃関とも平面に関をもつもの。S D03—B出土。鋤先(6)は鑄造りで刃部のみが残る。銹化が進み着装部の形状は不明である。包含層出土。鏃(7)は完形の両丸造りノミ矢式のもので、筒被と茎部の界に突起をもつ。S D02出土。他に2点の鉄製品があるが銹化が進んでおり、原形をとどめない。

石製品 (第28図、図版26) 石鏃の鉈尾(4)である。平面長方形の一辺を弧状につくり、裏面三方に潜り孔があるもので、一孔に銅線が残る。長さ4.0cm、幅3.0cm、厚さ0.8cm。包含層出土。



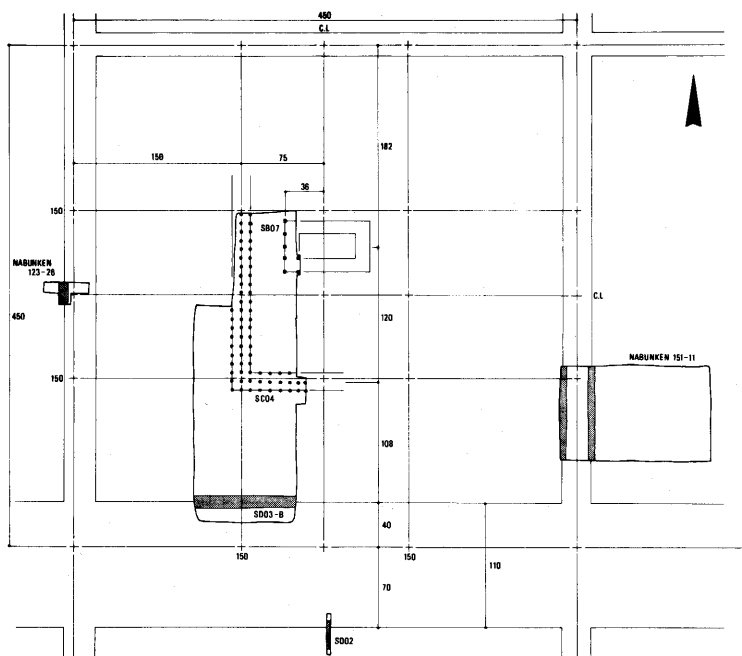
第28図 金属製品、石製品 (1/2)

IV 結 び

1. 占 地

平城京の条坊が緻密な計画のもとに、高度な技術をもって施行されていることは従来の調査成果から明らかである。だが、成果の蓄積が進むにつれ、条坊道路によって国土方眼方位に対する振れが微妙に異なること、とりわけ東西条坊道路と南北条坊道路が厳密に直交しないことが明らかになりつつある。また、大路、小路の計画幅が一律でないこともわかってきた。このような条件の中で条坊計画を復元することが、施工誤差や単位尺の長短の問題をとりあえずは保留するにしても、厄介な作業となることは否めない。さらに、今回の二条大路のように条坊計画線が道路心をとおらないことがわかっている場合、単に道路心を求め、条坊の振れを勘案するという方法ではあやまった成果を得ることになる。そこで、ここではこれまでの調査成果をもとに今回の発掘区周辺の条坊計画線を復元想定し、その中で検出した遺構が占める位置を検討してみよう。

まず、二条大路の計画線を知るために次の方法をとることにした。平城宮の南面では二条大路の計画線は朱雀門心から南へ80尺の地点をとおることがわかっている。そして平城宮の南面大垣は平均 $W3'53''N$ 振れて^{注1)}いることも確認されている。そこで、二条大路は南面大垣に平行するものと考え、朱雀門心から南へ80尺の地点を通り、かつ国土方眼方位に対し $W3'53''N$ 振れた



第29図 十二坪の占地概念図

東西線を二条大路の計画線だと考えた。この場合、朱雀大路の振れN15'41" ^{注2)}Wを勘案し、1尺は0.296mとした。こうして求めた計画線は今回のSD03—B心の南11.88m、SD02心の北20.84mの点をとる。このことから、SD02、SD03が二条大路の南、北両側溝であり、それぞれ計画線の南70尺、北40尺の位置にあることがわかる。つまり、今回の十二坪付近では二条大路は幅110尺で計画されたとみることができよう。

次に、十二・十三坪境小路はすでに確認されており、小路心が朱雀門心から国土方眼方位を介して931.020mの地点にあることがわかっている。そこで、条坊の計画線はこの小路の心を通り、現在、南北方向の条坊道路の振れの基準となっている朱雀大路と同様、N15'14"W振れていると仮定した。

このようにして、十二坪が面する4条の条坊道路のうち2条の条坊計画線を想定することができた。これをもとに、坪の計画幅450尺（1尺：0.296m）で他の2条の計画線を復元したものが第29図である。この図によって、発掘区内の主な遺構の配置をみることにしよう。

まず、発掘区は十二坪の東西の中軸からやや西よりの一画にあたることがわかる。そして、発掘区北端で検出した礎石建物SB07は、桁行7間、梁行4間に復元した場合、建物の東西心がほぼ坪の東西の中軸線上に、南北心が坪の南北の中軸線から北へ43尺の位置にあることになる。SB07とはほぼ同位置にあるSB05についても、同様のことが推察できよう。次に、回廊状遺構SC04は、西面部分の東西心が坪の東西の中軸線から西へ75尺の位置にあり、南面部分の南北心は坪の南北の中軸線から77尺の位置にある。そして、SB07の東西心とSC04の南面部分の南北心とは120尺ある。このことから、SC04は南面部分、西面部分ともに坪の計画幅（450尺）の三等分割線上に計画配置されていることがわかる。SC04が回廊状にSB05あるいはSB07を取り囲むとすれば、今回の発掘区外にある東面部分よ、西面部分と東西の中軸線との距離をおりかえした位置に配されている可能性が高く、その場合、坪の計画幅を三等分する企画があったことになる。ただ北面部分については今のところその位置を想定できる資料を得ていない。

(注1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅳ—平城京左京一条三坊の調査—』1975

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅸ—宮城門・大垣の調査—』1978

(注2) 奈良国立文化財研究所『平城京朱雀大路発掘調査報告書』奈良市 1974

(注3) 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部第151—11次発掘調査 山崎信二氏に御教示を得た。

地 点	X	Y	備 考
平城宮朱雀門心	— 145994、49	— 18586、31	『平城宮発掘調査報告Ⅳ』
十二・十三坪境小路心	— 145970、00	— 17655、29	奈文研第151—11次発掘調査 平面図から算出
SD02心	— 146005、35	— 17750、00	今回の調査
SD03—B心	— 146037、96	— 17726、00	今回の調査

第6表 計測座標表

2. 時期区分

十二坪は、前節で検討したように一坪全体が一括して利用されていたと考えられる。それでは坪の利用状況はどのような時期的変遷をとげたのであろうか。今回検出した遺構は大半を地山である暗灰色粘土面で検出したので、層位的に時期区分を行うことはできない。そこで、遺構の重複関係を基本に、位置関係、遺構内からの出土遺物などを勘案して時期区分を行った。その結果大きくⅠ～Ⅳの4期の時期変遷があり、さらにⅡ～Ⅳ期はそれぞれA、Bの2期に細区分できることがわかった。

Ⅰ期 この時期に属する遺構にはSD03—A、SE31、SE32、SE33、SK38がある。二条大路の北側溝であるSD03—Aをのぞいて、各遺構の配置に規則性はみられない。この期に属する建物や坪内を区画する施設も検出していない。一坪を利用した敷地の中での空地などに相当するのであろうか。

Ⅱ期—A この時期に属する遺構にはSD03—A、SC04、SB05、SB06、SA20—A、SD42、SE34がある。坪内の様相が前期とは大きく変わり、大規模な建物が整然と配置される。まず、SD03—Aにそって築地塀SA20—Aが設けられる。SA20—Aはすでにその痕跡を全く残しておらず、わずかに残された雨落ち溝SD43からその存在を想定した。築地にかこまれた坪の中央やや北よりに中心建物SB05が配され、これをとりかこんでSC04がある。SC04の配置計画は前節で検討した。坪の南端にはSA20—Aにそって長大な東西棟建物SB06がある。SC04南面部分の南北心とSB06南北心とは69尺、SC04南面部分の南側柱筋心とSB06北側柱筋心とは52尺あり、この間は建物が全くない空地となる。そして、SC04にとりかこまれた一画、SB05の南面には井戸SE34がある。この時期には、他の小さな雑舎などは発掘区内には建てられていない。きわめて整然とした建物配置である。

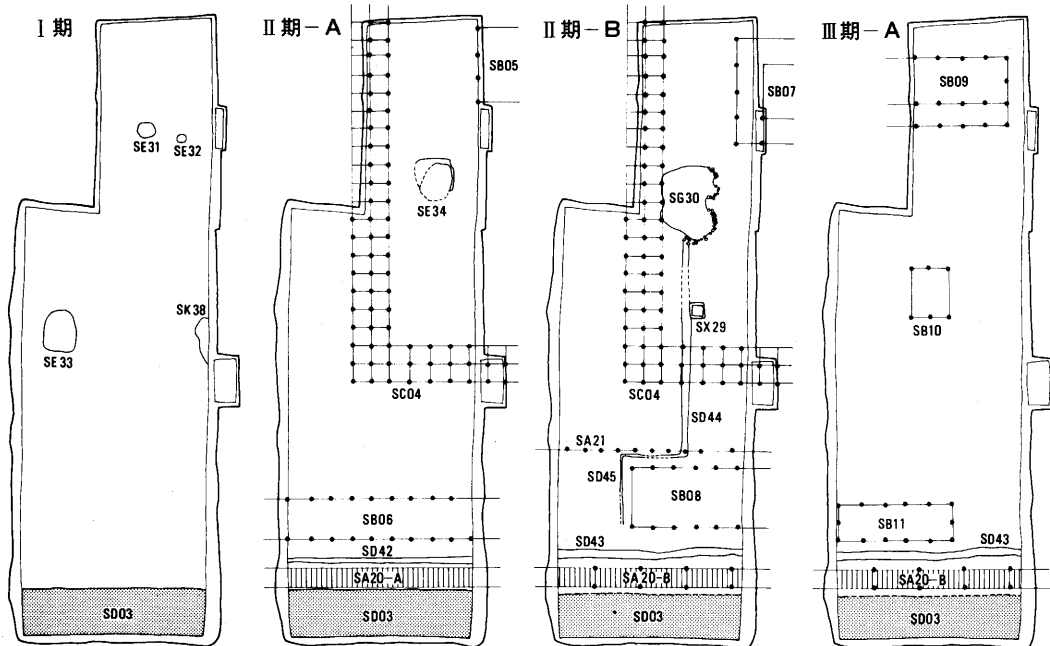
Ⅱ期—B この時期に属する遺構にはSD03—B、SD20—B、SD43、SC04、SB07、SB08、SD45、SA21、SX29、SG30、SD44がある。建物の基本的な配置は前期を踏襲するが、それぞれの建物が改築され、新たな遺構があらわれる。SD03—Aが大路側へ氾濫したのであろうか、改修されSD03—Bとなる。これにともないSA20—Aも改作されSA20—Bとなり、わずかに南へ移動する。SC04は前期にひきつづき使用されるが、中心建物SB05はたてかえられ礎石建物SB07となる。SC04にとりかこまれた一画にはSG30が配され、これから南へ排水用の溝SD44がのびる。SD44にそってSX29がある。SX29の心は、SC04南面部分南側柱筋心、西面部分東側柱筋心のいずれからも16尺の位置にある。坪の南端、SB06はたてかえられSB08となる。SB08の南北心は坪の南北の中軸から南へ137尺の位置にある。SB08の北7尺には東西塀SA21が配される。これはSB07を中心とする坪の中央部と、坪南端の一画とを画するものであろう。

Ⅲ期一A この時期に属する遺構にはSD03-B、SB09、SB10、SB11、SA20-B、SD43がある。Ⅱ期にくらべ坪内の様相は一変する。前期の建物はすべて廃され新たな建物がたてられるが、それぞれの規模は小さくなる。SC04、SB07は廃され、かわってSB09、SB10がたてられる。SB09は唯一廂をもつ建物であり、B期まで存続することからこの時期の中心建物であろう。SB10は柱穴の配置からみて特異な構造をもつものとなる。坪の南端ではSA20-Bは依然として存続するが、SB08はたてかえられSB11となる。SB11の東妻柱筋はSB09の東西心と一致する。

Ⅲ期一B この時期に属する遺構にはSD03-B、SB09、SB10、SB12、SB13、SB20-B、SD43がある。SB09、SB10はA期からひきつづいて使用されるが、坪の南端ではSB11がたてかえられSB12、SB13となる。SB12が北面に廂をもつのに対し、SB13は小規模な建物である。この時期にもSA20-Bは存在していると考えられる。

Ⅲ期一A・B両期をとおして坪内の建物配置にきわだった計画性はみられず、また建蔽率も低い。中心建物SB09がA・B両期を通じて使用されるのに対し、坪の南辺ではたてかえが行われることから、坪の中央と縁辺部では建物が別のまとまりをもつらしいことが伺える。だが、積極的な分割の施設もなく、また建物が東西棟ばかりであることを考えると一概に分割利用であったともいえない。

Ⅳ期一A この時期に属する遺構にはSD03-B、SB14、SB15、SB16、SA22、SA23-SA24、SE35がある。ごく小規模な建物が全体に散在する。坪の中央部には井戸SE35が掘ら



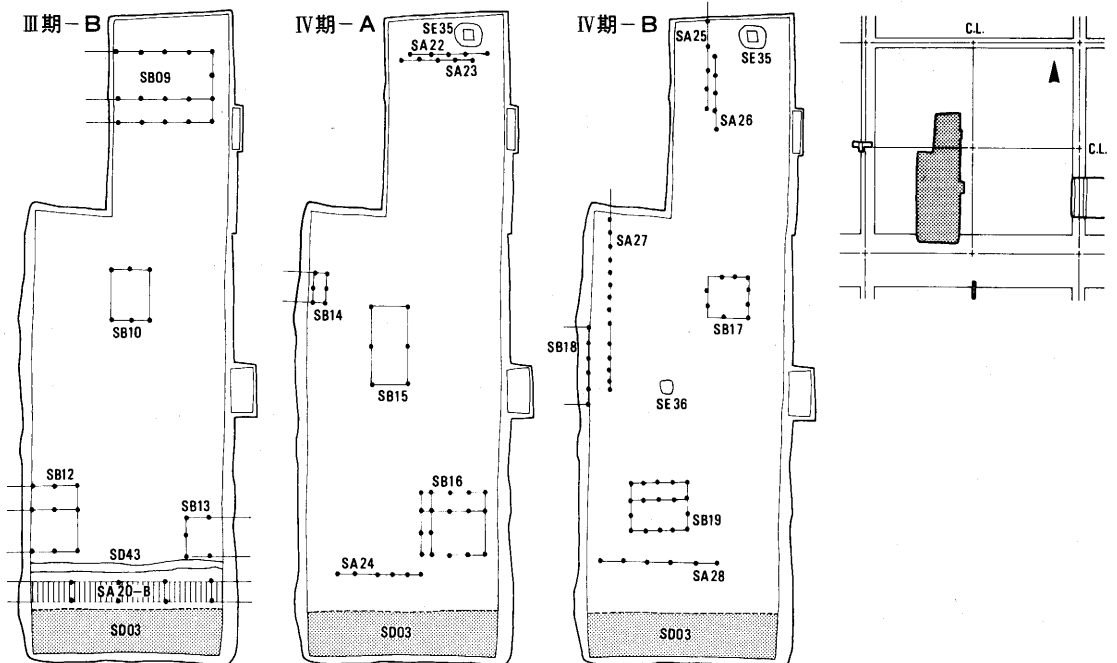
第30図 遺構変遷模式図(1)

れ、これにともなう塀SA22、SA23が配される。SA22とSA23の時期的な前後関係は明らかではない。SB14は柱筋が北で東にふれる。SB15は柱掘方にくらべ柱間が広く、仮設的な建物か。坪の南端にはSB16がたてられる。SB16にともなう塀SA24はSA20-Bの雨落ち溝SD43と重複して検出しているので、この時期には築地塀SA20-Bが廃絶していることがわかる。しかし、SA24がSD03-Bに面した位置に設けられていることからみれば、SD03-Bはこの時期にはなお機能していたと考えられる。

IV期-B この時期に属する遺構にはSD03-B、SB17、SB18、SB19、SA25、SA26、SA27、SA28、SE35、SE36がある。小規模な建物が散在することは前期とかわらない。SA22、SA23は改作されSA25、SA26となる。これも時期的な前後関係は明らかではない。SB14はたてかえられ、塀SA27が設けられる。その東方に新たにSB17、SE36があらわれる。坪の南端では、SB16がたてかえられSB19となり、それにともないSA24が改作されSA28となる。いずれの建物も柱筋が北でわずかに西へふれる。

IV期-A、Bともに建物の配置に規則性はみられないが、たてかえが隣接する位置で行われることからみれば、それぞれの建物が、おのおの別のまとまりを持つ建物群の中の一戸であるとも考えられる。

各期の実年代 検出した遺構は層位的に発掘したものでなく、遺構から出土した遺物も少ないことはすでに述べた。そのため各期の実年代を比定することは容易ではない。ここでは出土遺物の大多数を占める瓦の時期的な変遷をもとに、各期のおおまかな年代を想定するにとどめる。



第31図 遺構変遷模式図(2)

今回出土した軒瓦は平城宮軒瓦編年のⅡ期、Ⅲ期のものが量的に最も多く、このことからこの時期に最も大規模な建物群が営まれた遺構時期区分のⅡ期をあてることが妥当であろう。また、軒瓦の組合せが軒瓦編年のⅡ期とⅢ期ではあきらかに異ってくることから、それぞれに遺構時期区分のⅡ期-A、Ⅱ期-Bをあてることも可能である。このことは、遺構時期区分のⅡ期-Aに属する井戸S E 34から天平三年(731)の年紀をもつ木簡が出土していることを矛盾しない。このように考えると、おおまかに遺構時期区分のⅠ期を軒瓦編年のⅡ期以前、同じくⅢ期を軒瓦編年のⅢ期以降とすることが可能となる。さらに、遺構時期区分のⅣ期に属する井戸S E 35からは奈良時代末から平安時代初頭の土器が出土していることから、この間にⅣ期の存続期間の一点を求めることができよう。

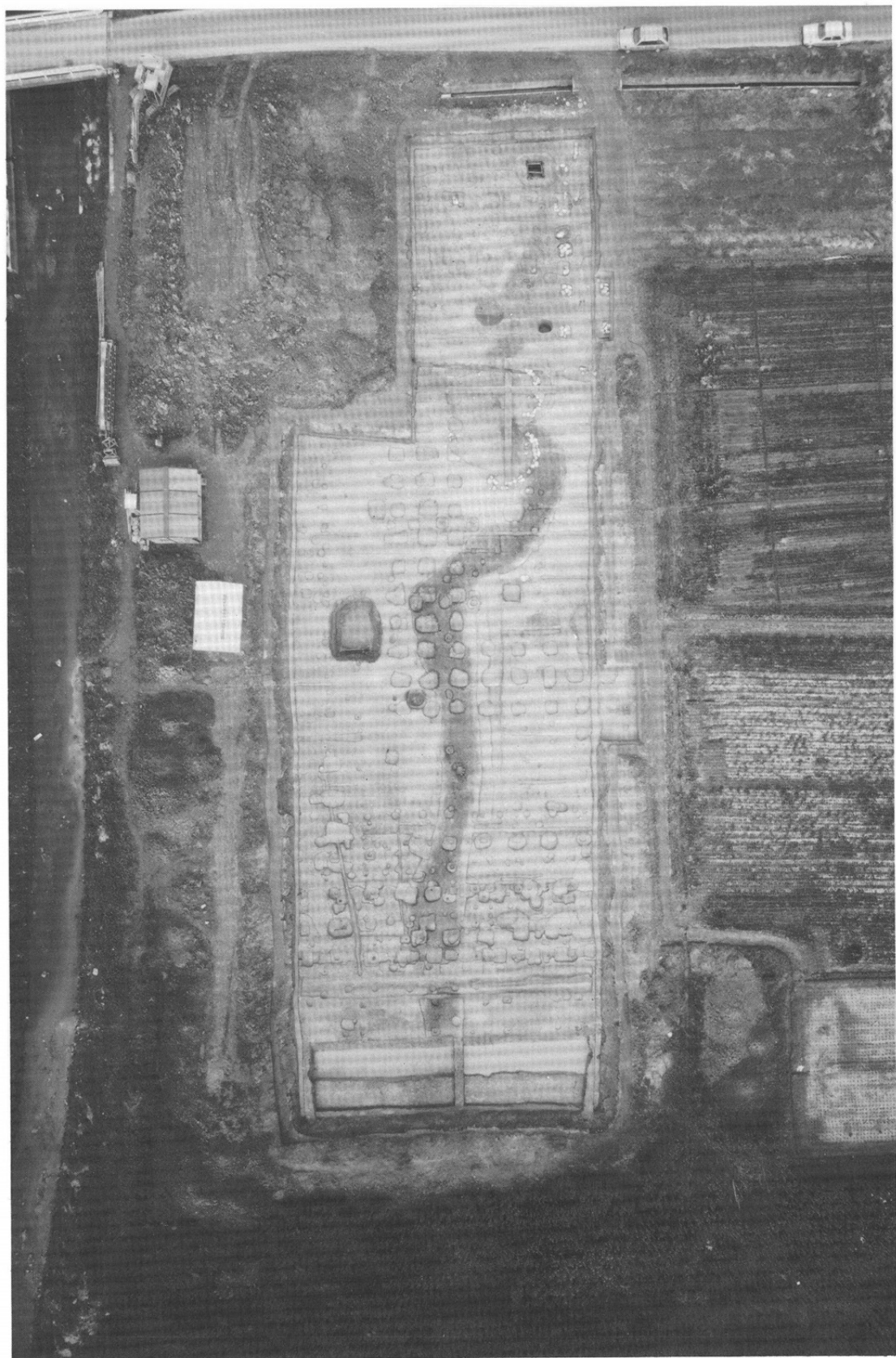
3. 結 語

今回の発掘範囲は十二坪全体のわずかに1割強を占めるのみであり、ここでえた成果が坪内の具体的な様子を知る上で貴重なものであることにはまちがいないとしても、これをもって十二坪全体の様相を論ずることはきわめて危険な行為となろう。そのため、今後の発掘調査をまたねばならない課題も多いが、以下に調査成果を簡単にとりまとめておこう。

まず、条坊遺構では二条大路とその南、北両側溝を検出した。平城宮南面大垣の振れをもとに二条大路の計画線を想定すると、北側溝は計画線の北40尺、南側溝は計画線の南70尺にある。宮南面では北側溝は計画線の北40尺、南側溝は計画線の南86尺にあるので、十二坪附近では南側溝が北へ16尺寄っていることになる。これまでの調査で東一坊大路との交差点では二条大路の南側溝が北へ寄らないことがわかっているので、東二坊々間路を境に、それ以東の二条大路の幅員を減じていると考えられよう。

つぎに、十二坪が築地塀によって画され、坪内部の遺構には奈良時代初頭から平安時代初頭まで大きく4期にわたる変遷があることがわかった。とりわけ注目されるのは、一坪全域を利用した大規模な敷地の中央やや北よりに正殿を置き、それを取り囲むように配されたと考えられる回廊状遺構を検出したことである。今のところ、その全体規模や配置計画を復元できるだけの資料はえていないが、今回の調査成果からみれば、これまでの平城京域の調査に比較すべき類例はない。だが、あくまでも概念的に中心建物とそれを取り囲む回廊という基本的建物配置の例を求めれば、それは平城宮大極殿地区、内裏地区あるいは京内大寺院の伽藍配置にみることができる。このことは、十二坪が少なくとも私的な居住空間ではないことを意味するものといえよう。とすれば、先に述べた軒瓦の組み合わせともあわせて、当遺跡がおそらくはその造営にあたっては宮がかかわった公的な空間であったとすることの蓋然性は高く、宮外官衙、離宮、寺院などであった可能性をも含めてその性格を究明することは今後に残されたきわめて重大な課題である。

版 圖

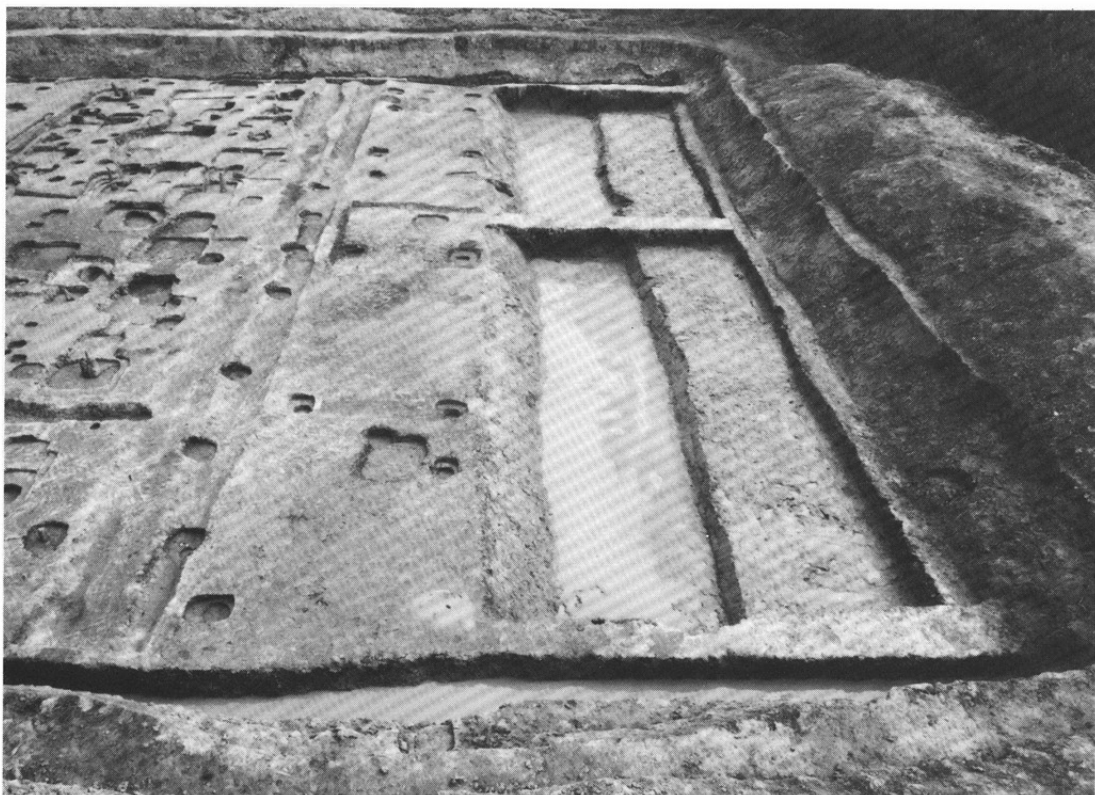




1. 中央発掘区全景 (南から)



2. 中央発掘区全景 (北から)



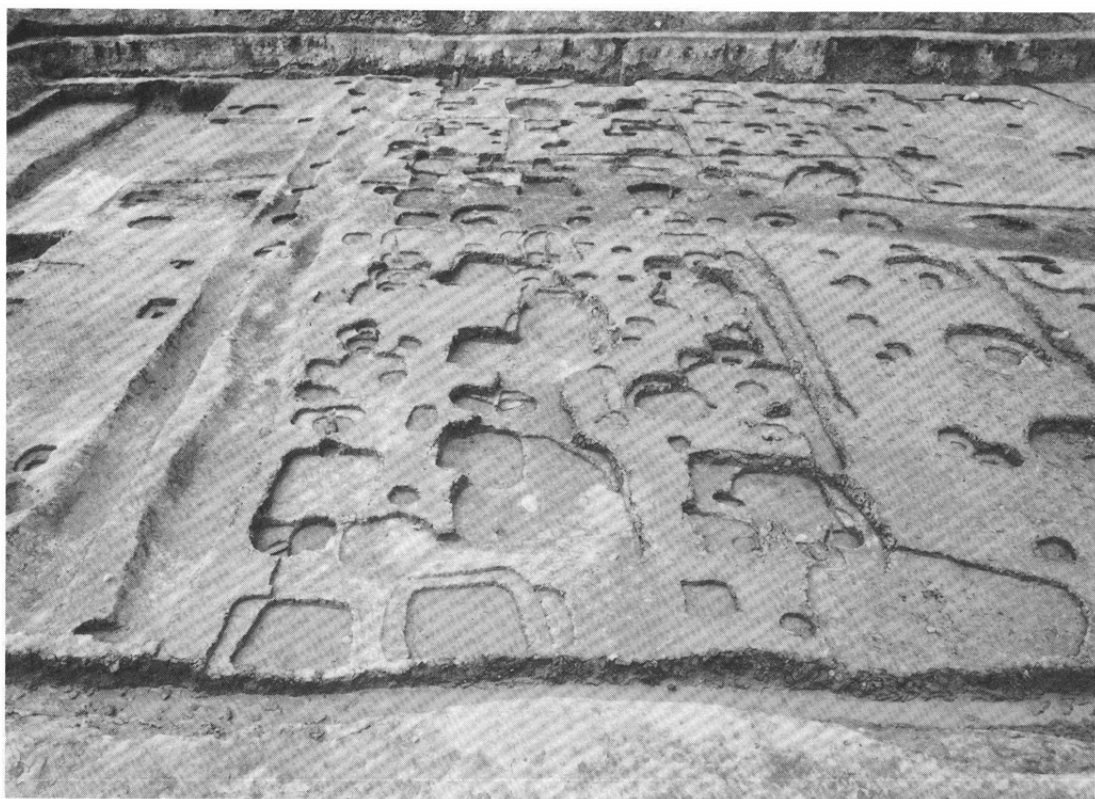
1. SD03, SA20-B (西から)



2. SD42, SD43 (東から)



1. 中央発掘区南辺部掘立柱建物（西から）



2. 中央発掘区南辺部掘立柱建物（東から）



1. SB13, SK41 (西から)



2. SB16 (西から)



1. SB11 (東から)



2. SB12 (東から)



1. SC04 西面部分(南から)



2. SC04 南面部分(東から)



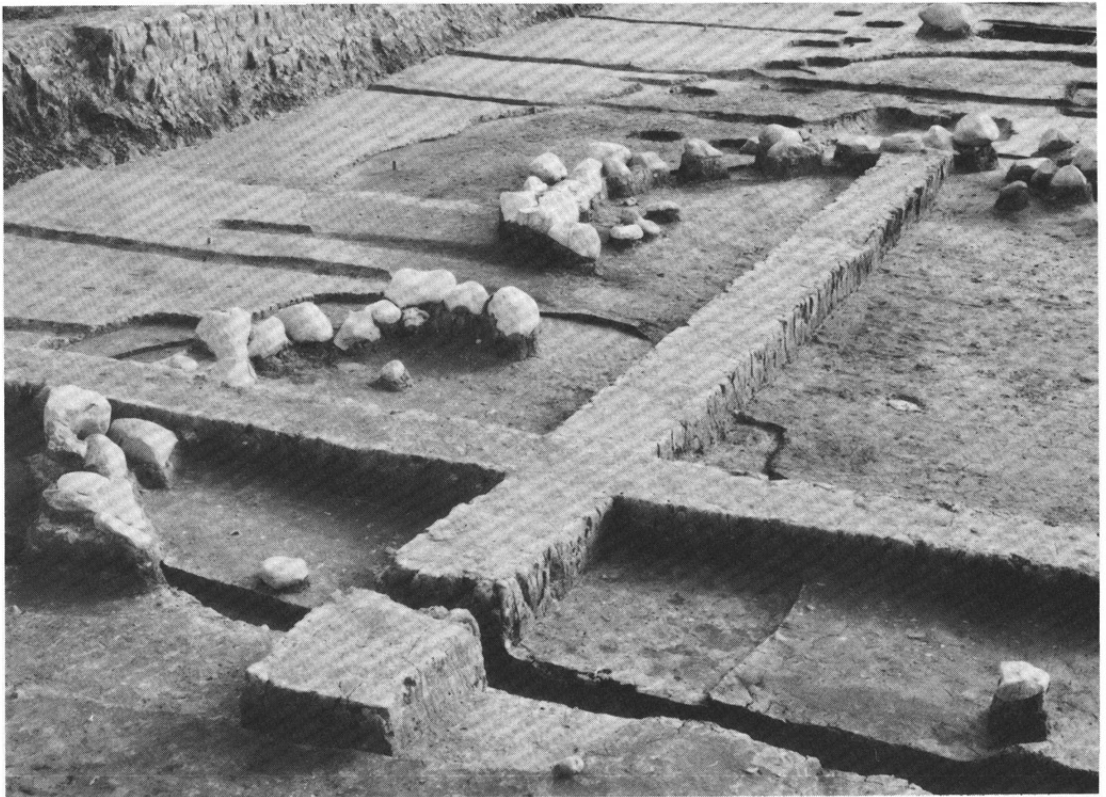
1. SC04南面部分(東から)



2. SD44(南から)



1. SG30, SE34 (西から)



2. SG30, SE34 (北から)



1. SB07 (西から)



2. SB09 (東から)



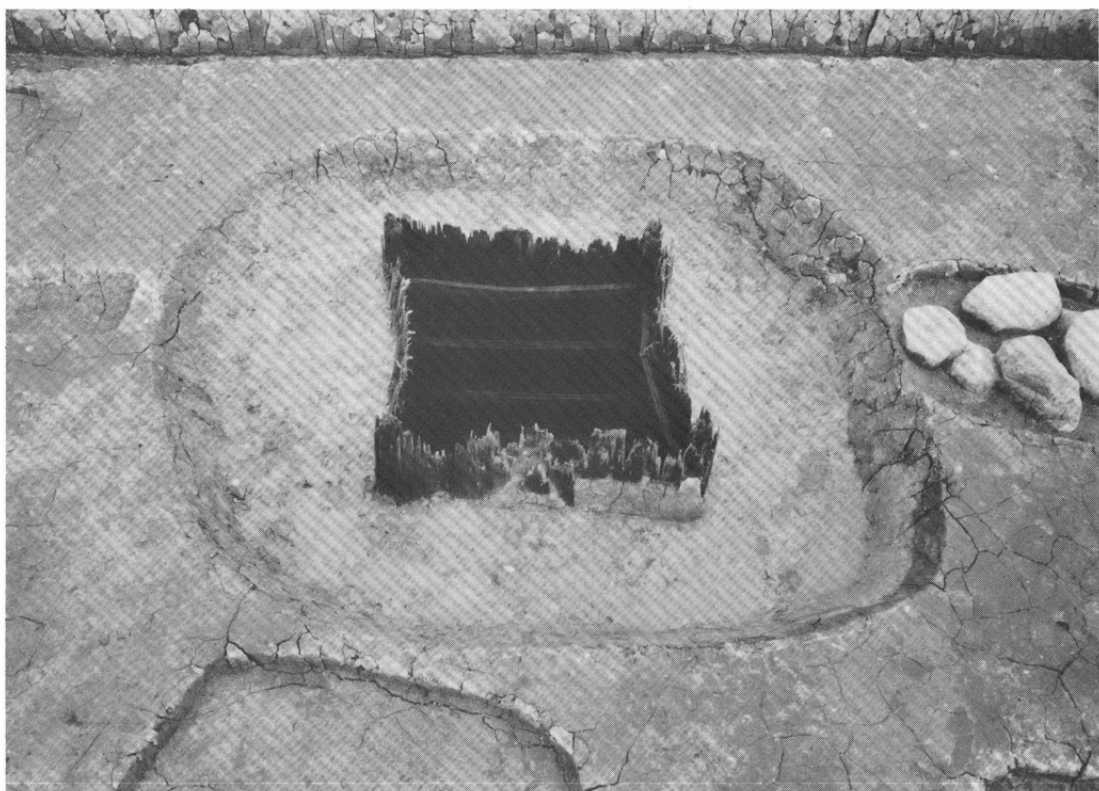
1. SB14 (東から)



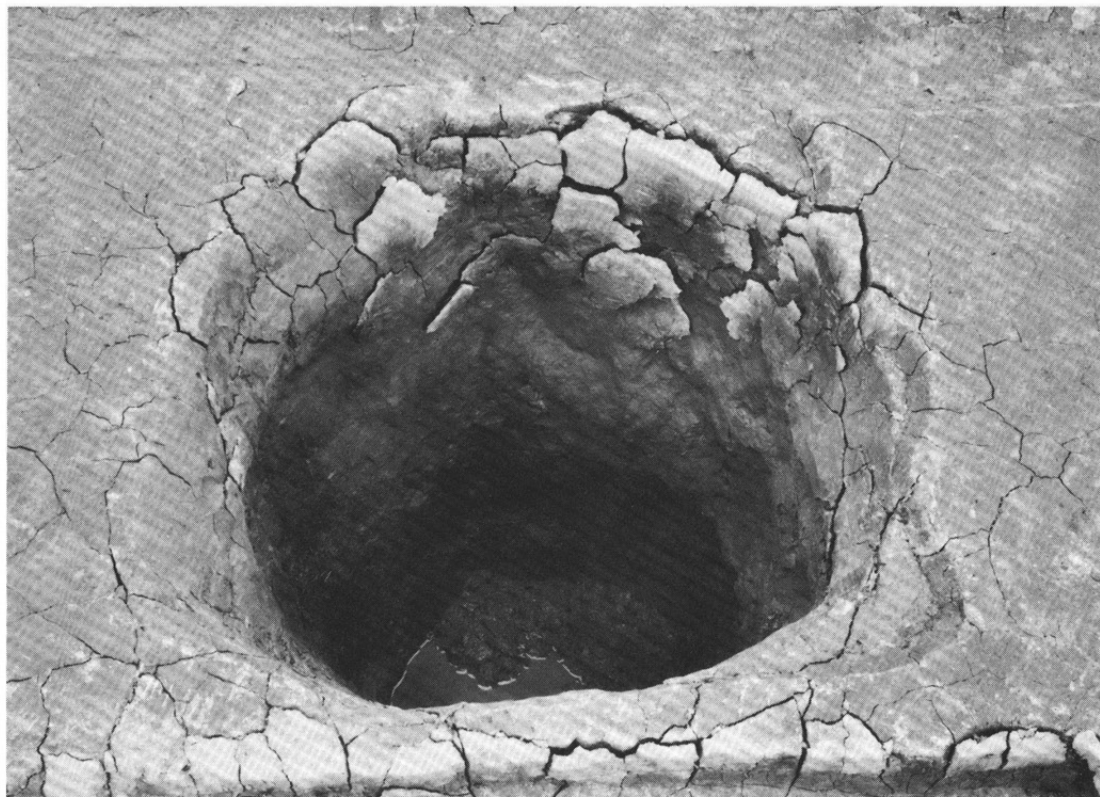
2. SA27 (南から)



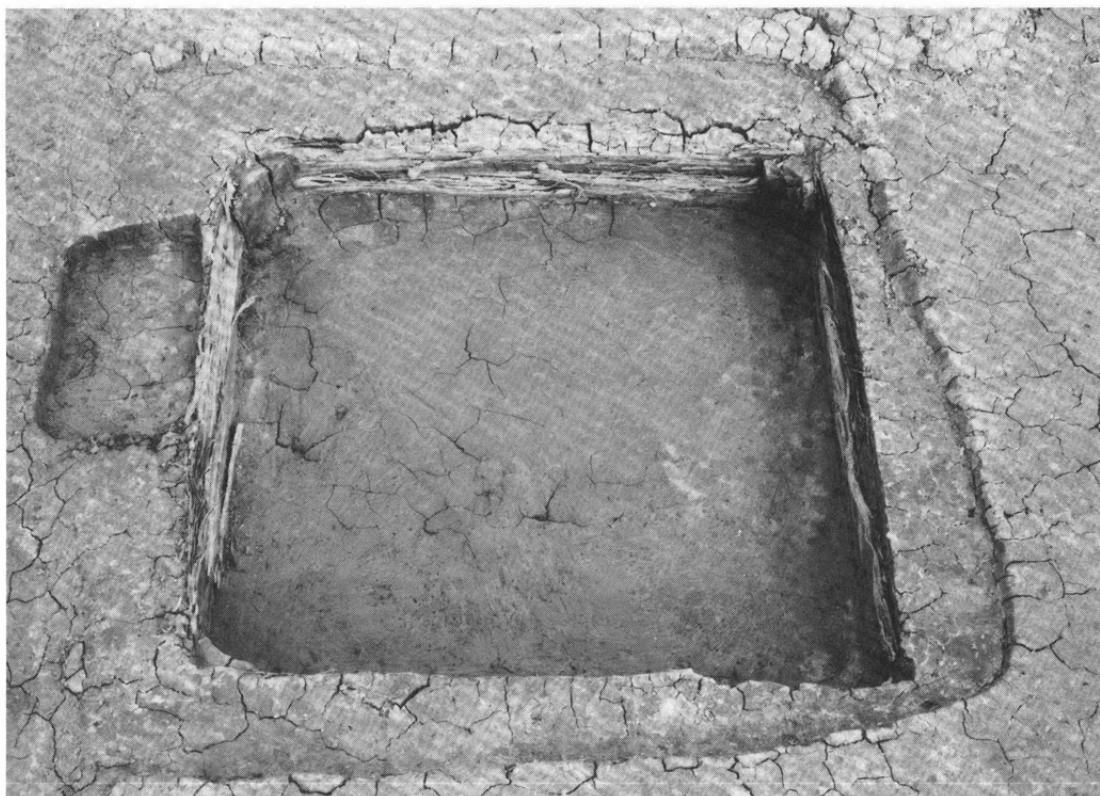
1. SA 22, SA 23 (東から)



2. SE 35 (南から)



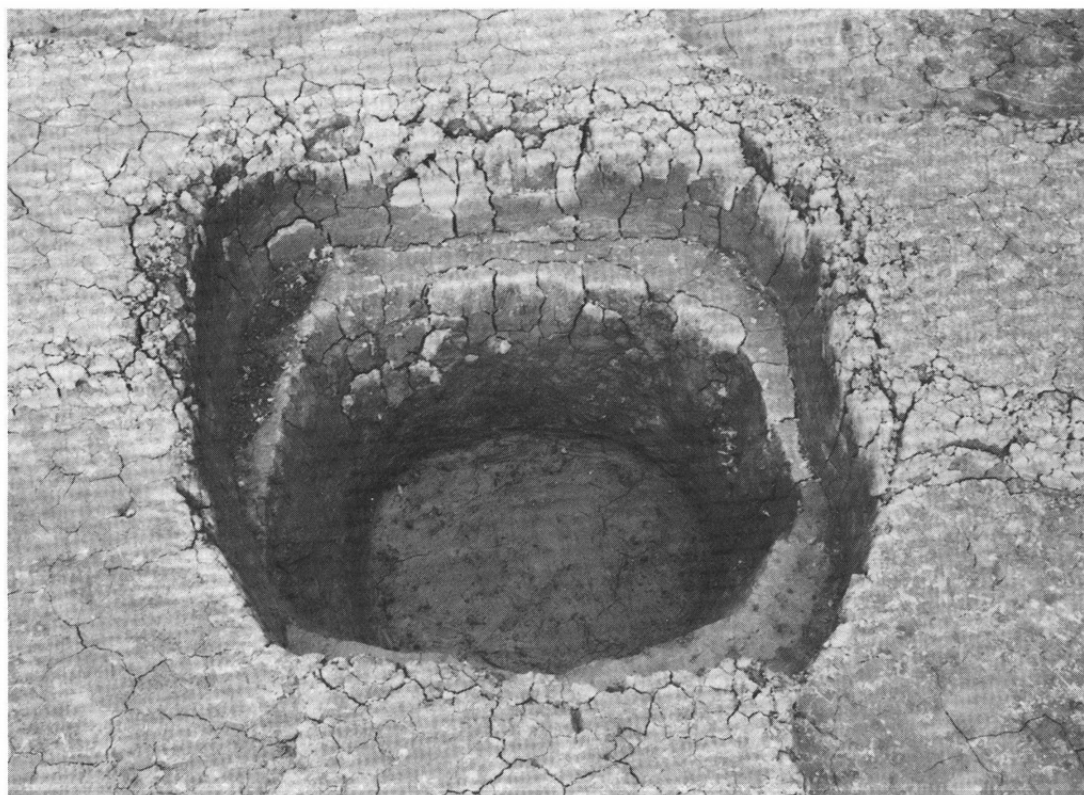
1. SE32 (南から)



2. SX29 (南から)



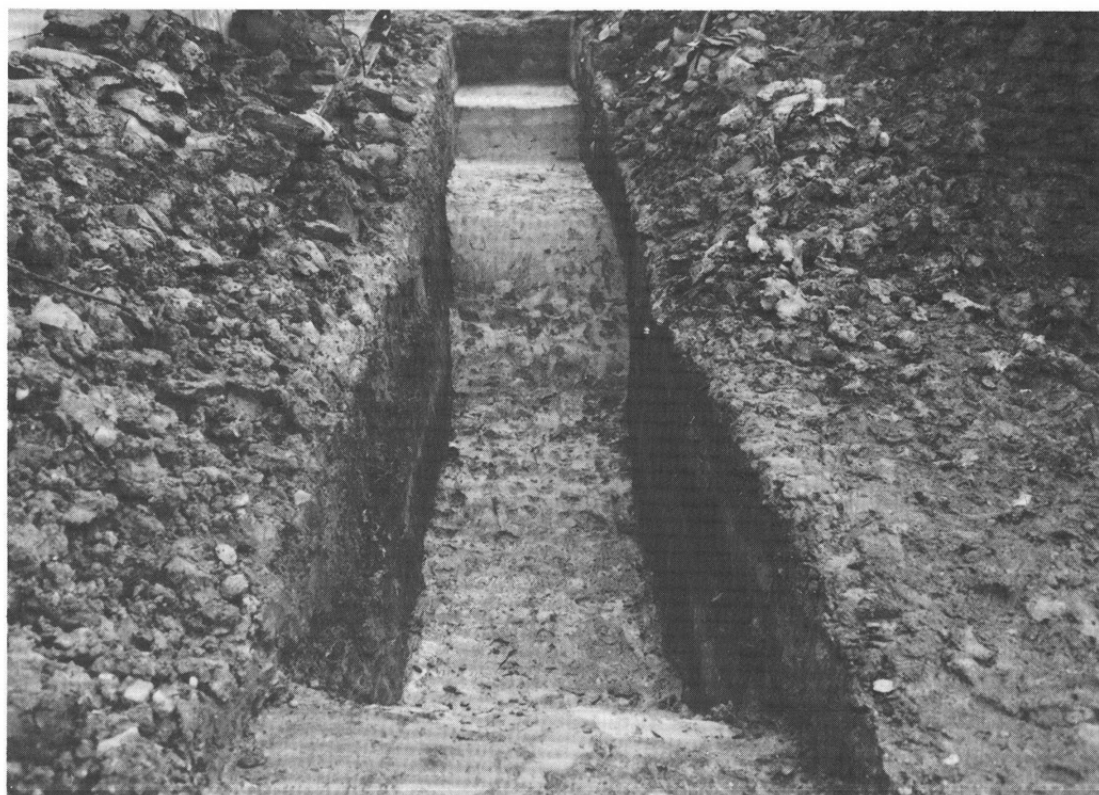
1. SE33 (南から)



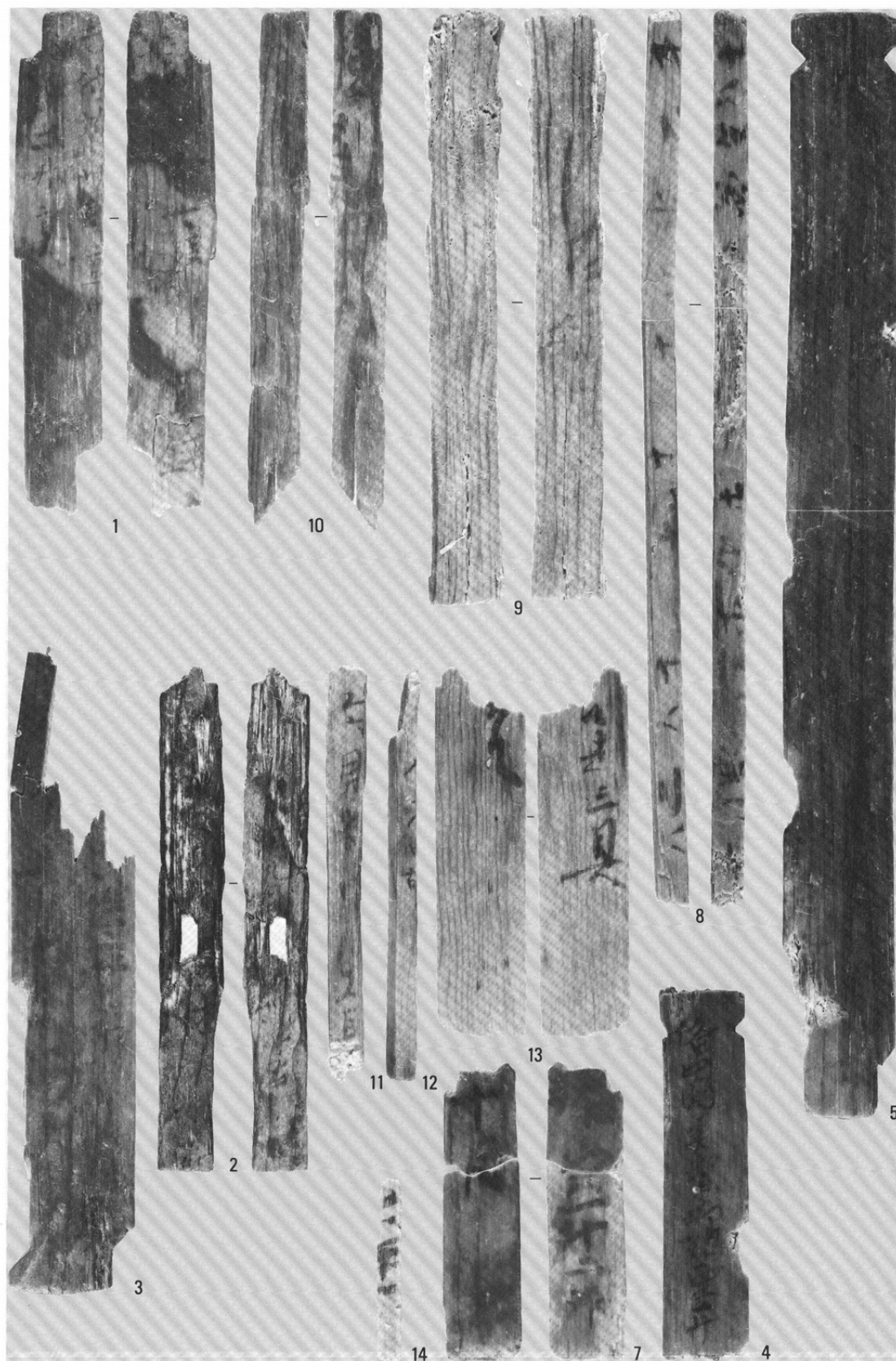
2. SE36 (南から)

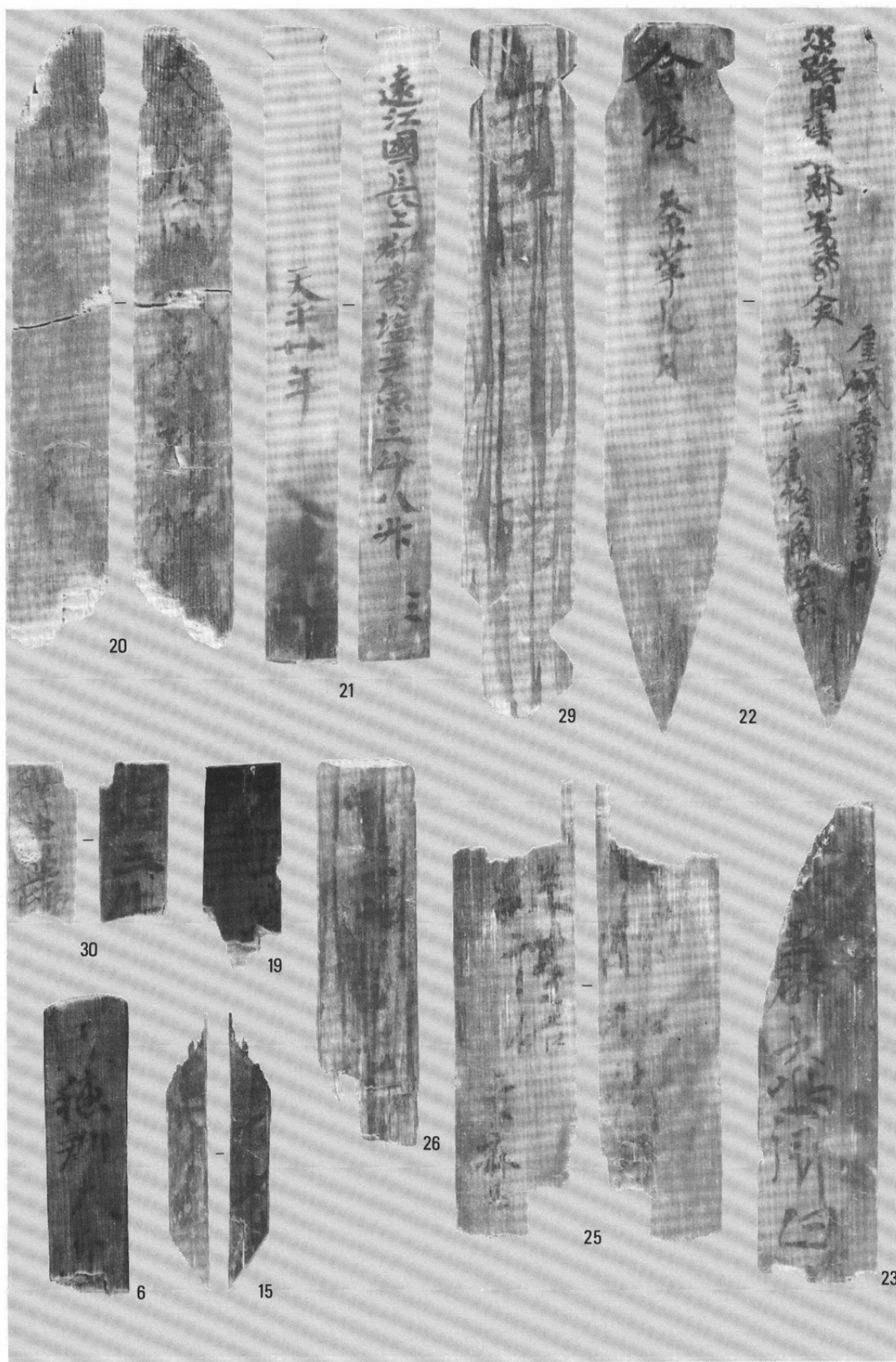


1. 南発掘区全景（南から）

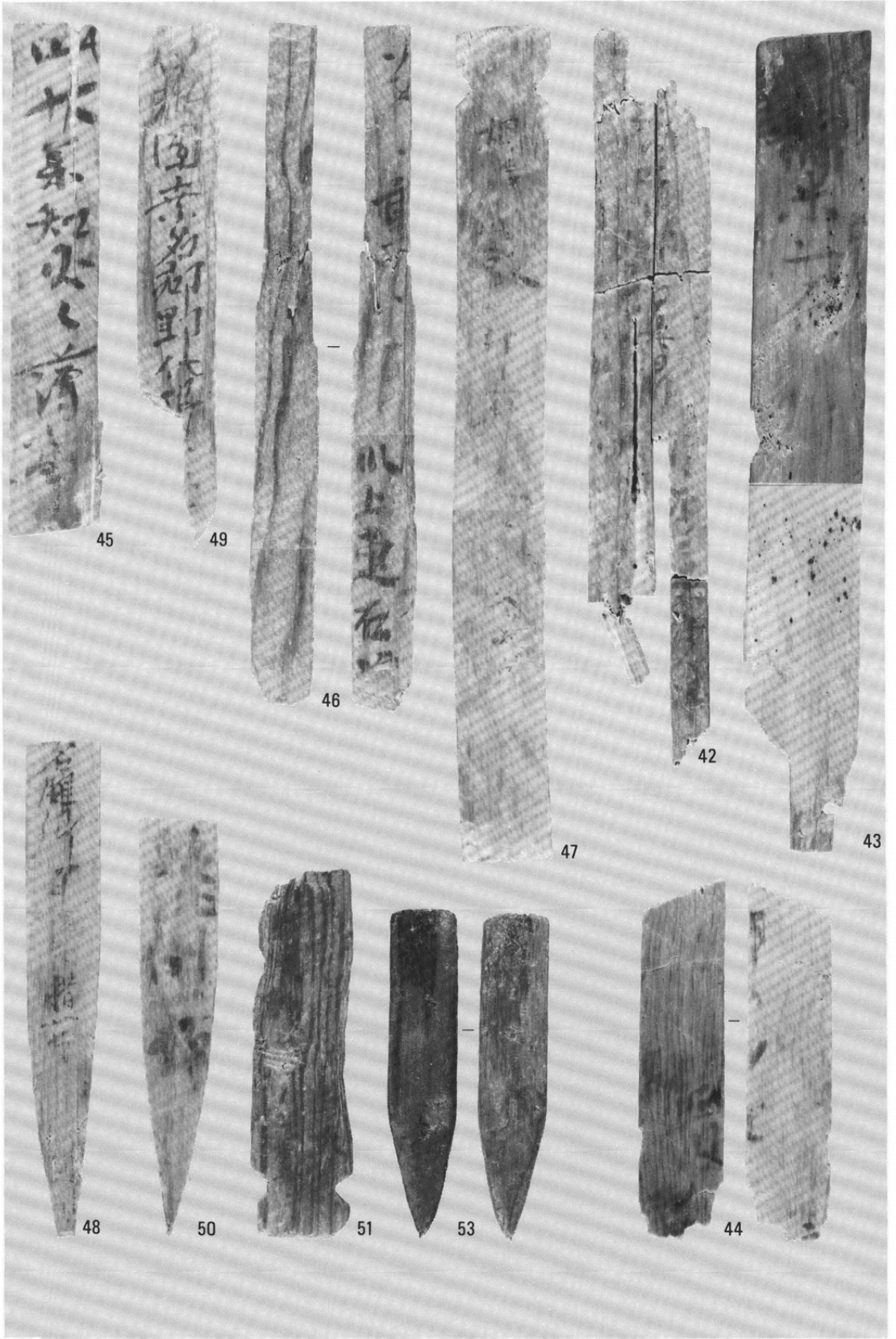


2. 南発掘区全景（北から）

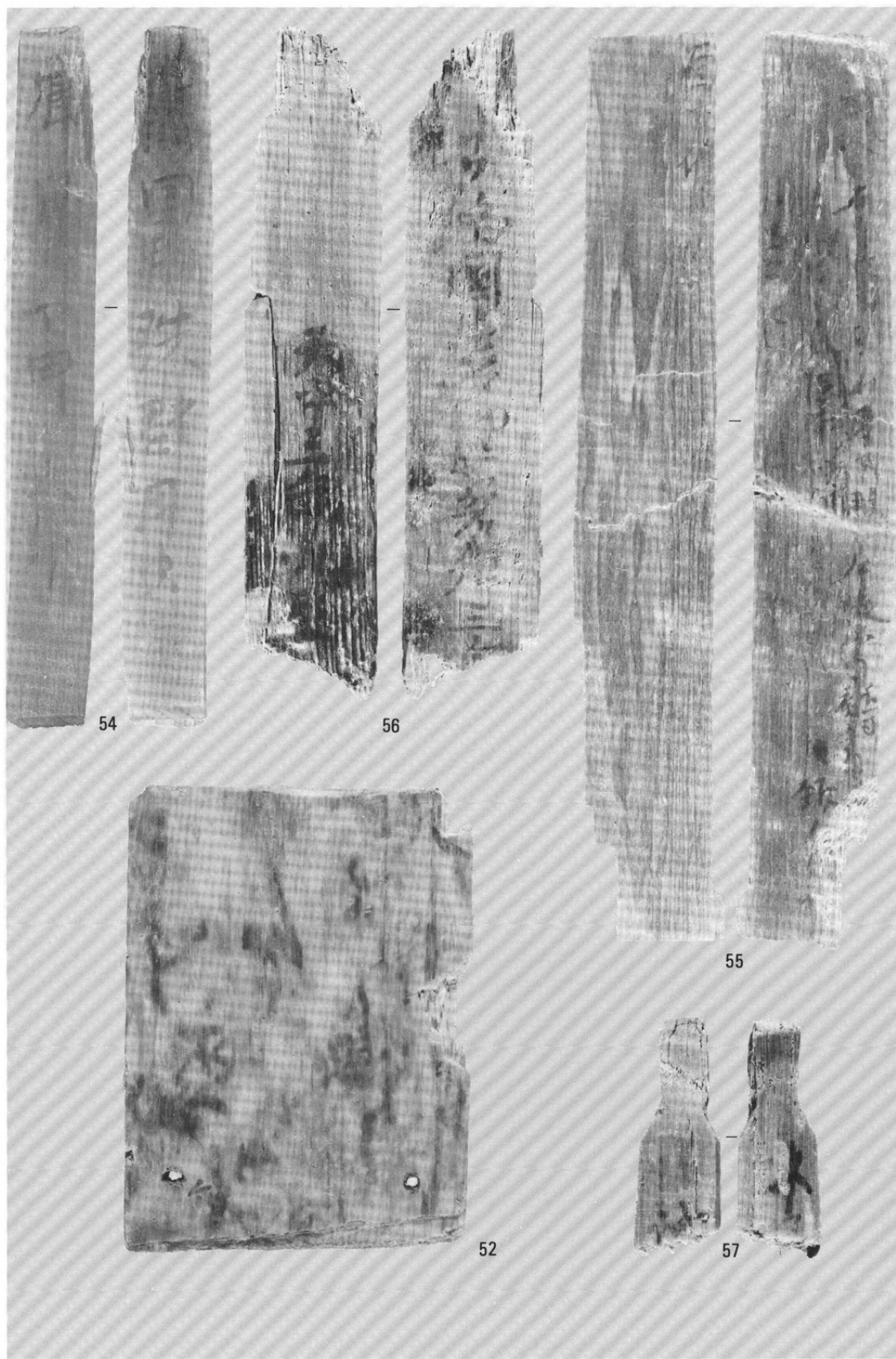






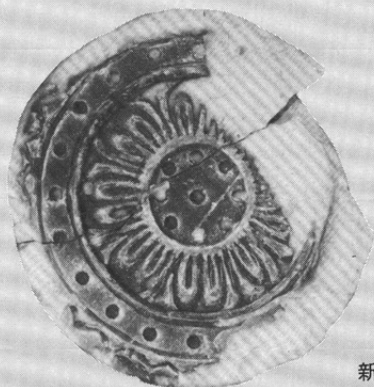


SD02, SD03出土木简(2/3)

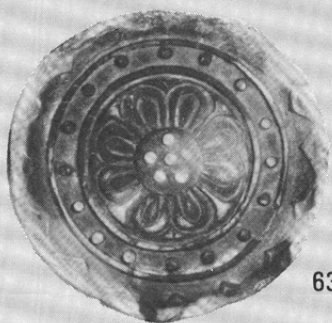




6282 Fc



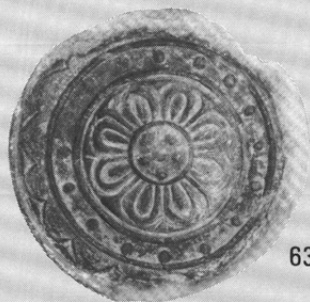
新型式



6314 Cb



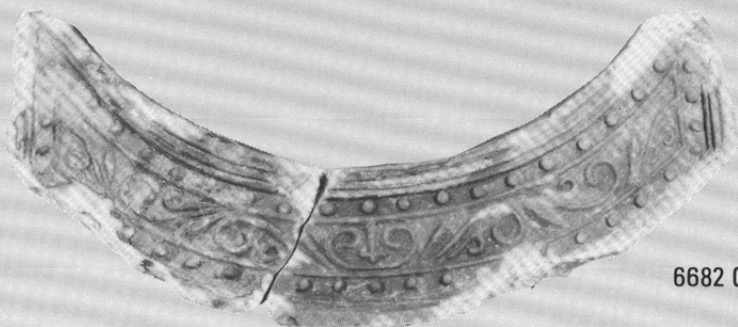
6682 B



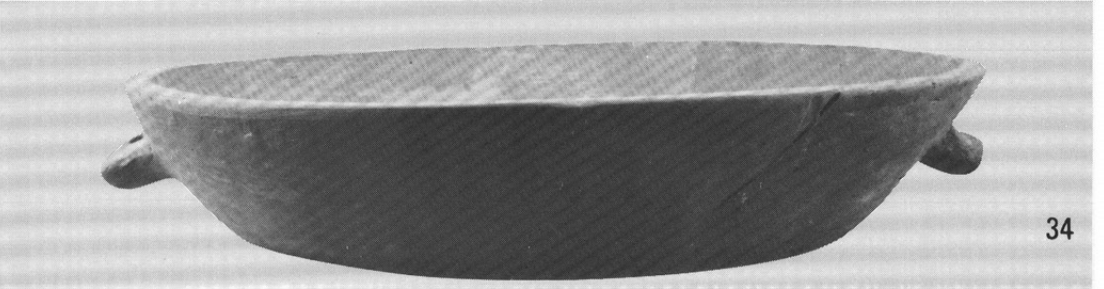
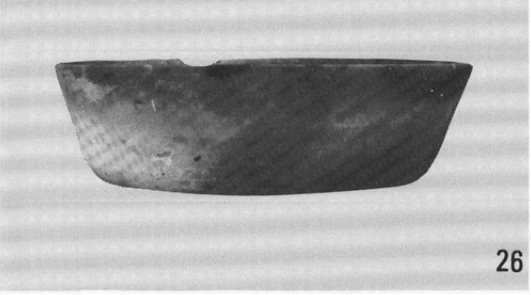
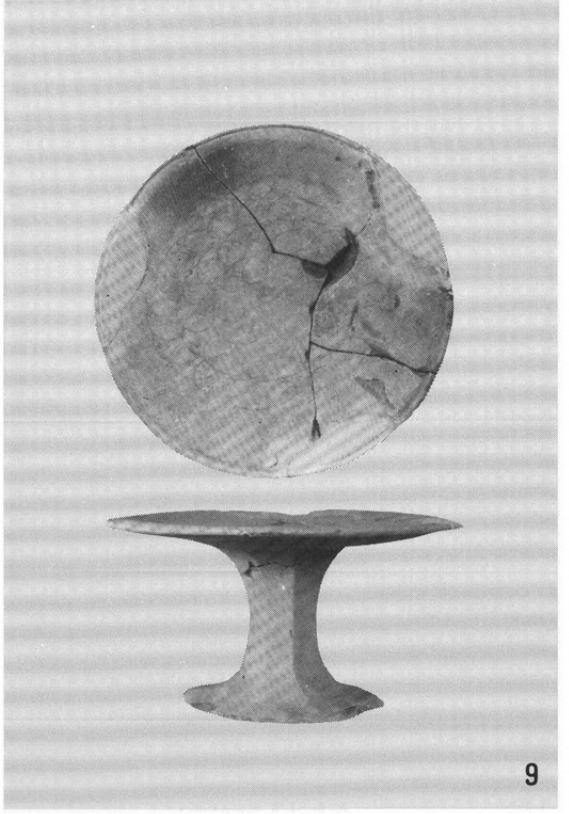
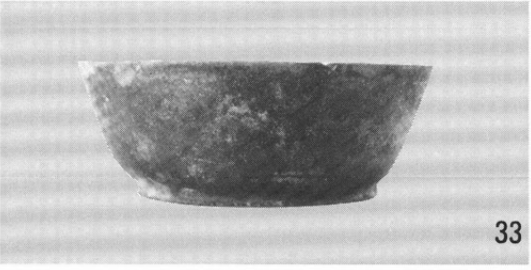
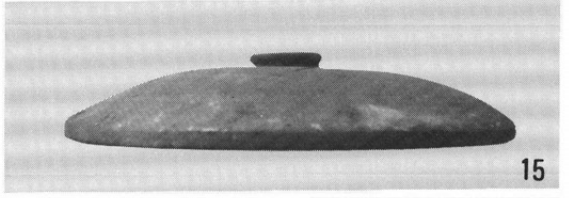
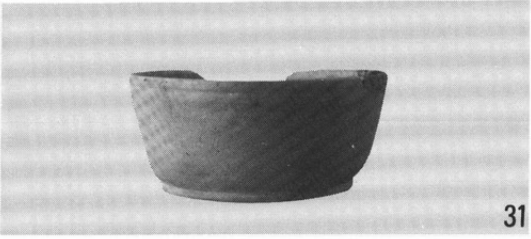
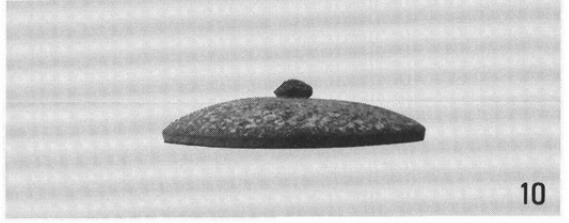
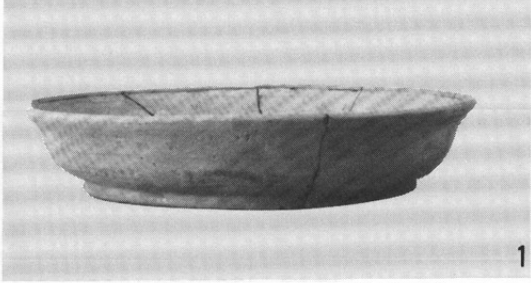
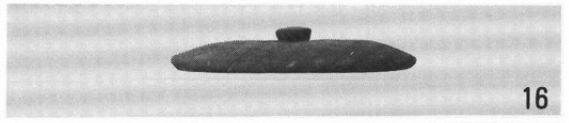
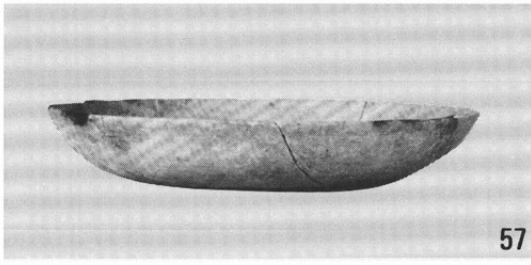
6314 Ca

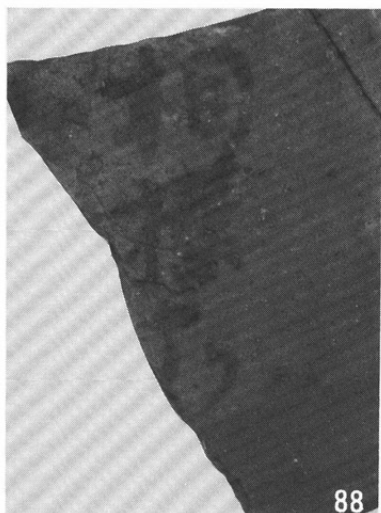


6682 B



6682 C





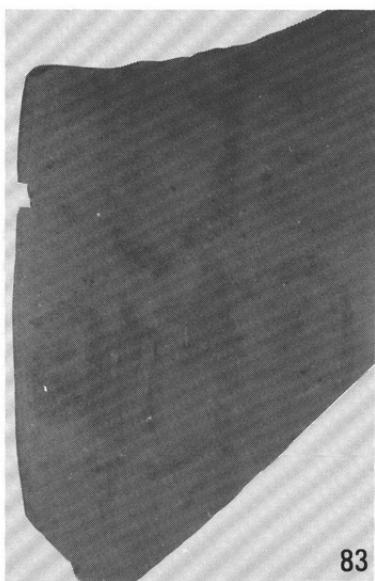
88



89



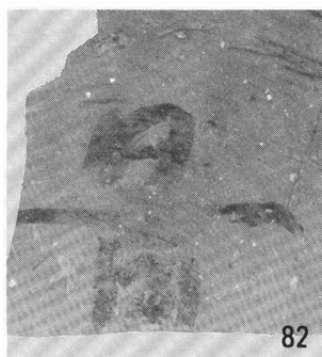
54



83



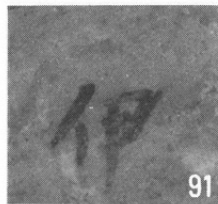
87



82



47



91



92



86

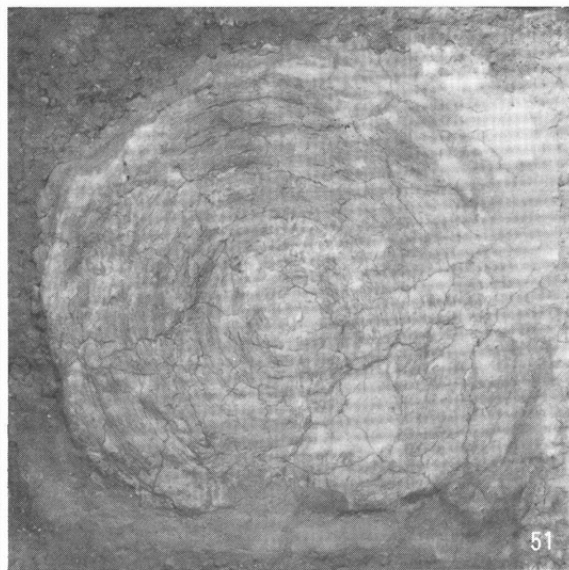
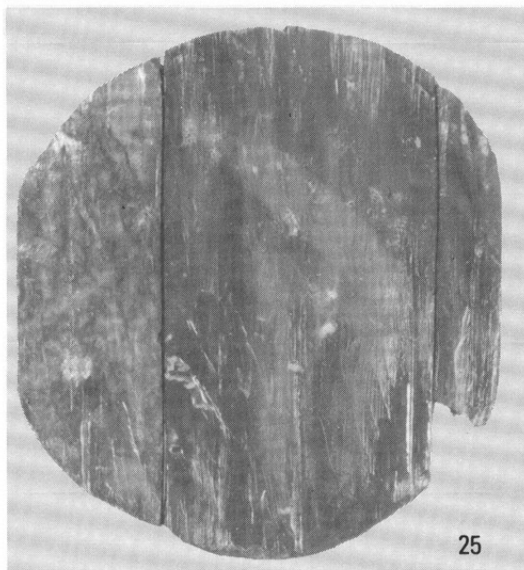
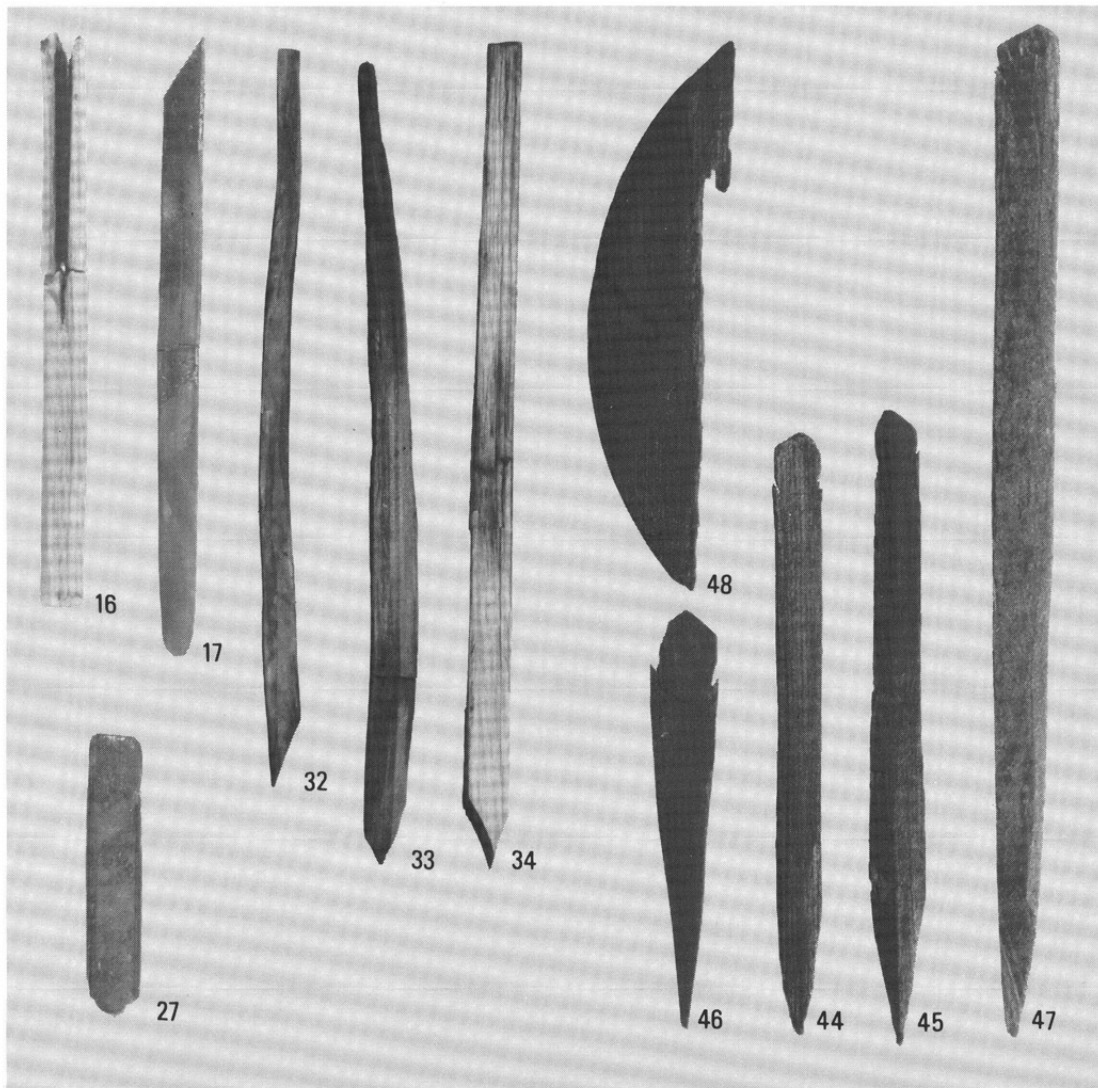


85

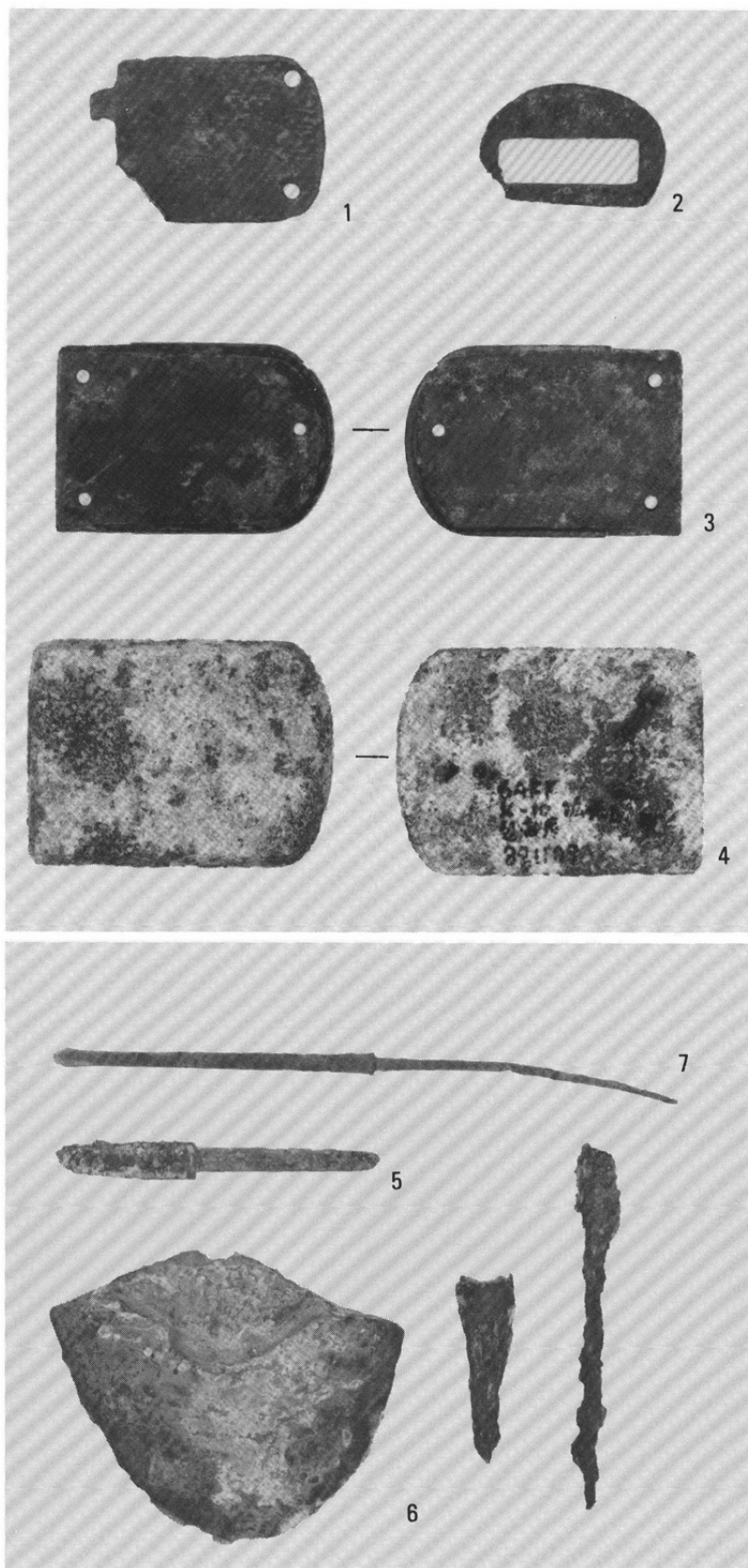


22

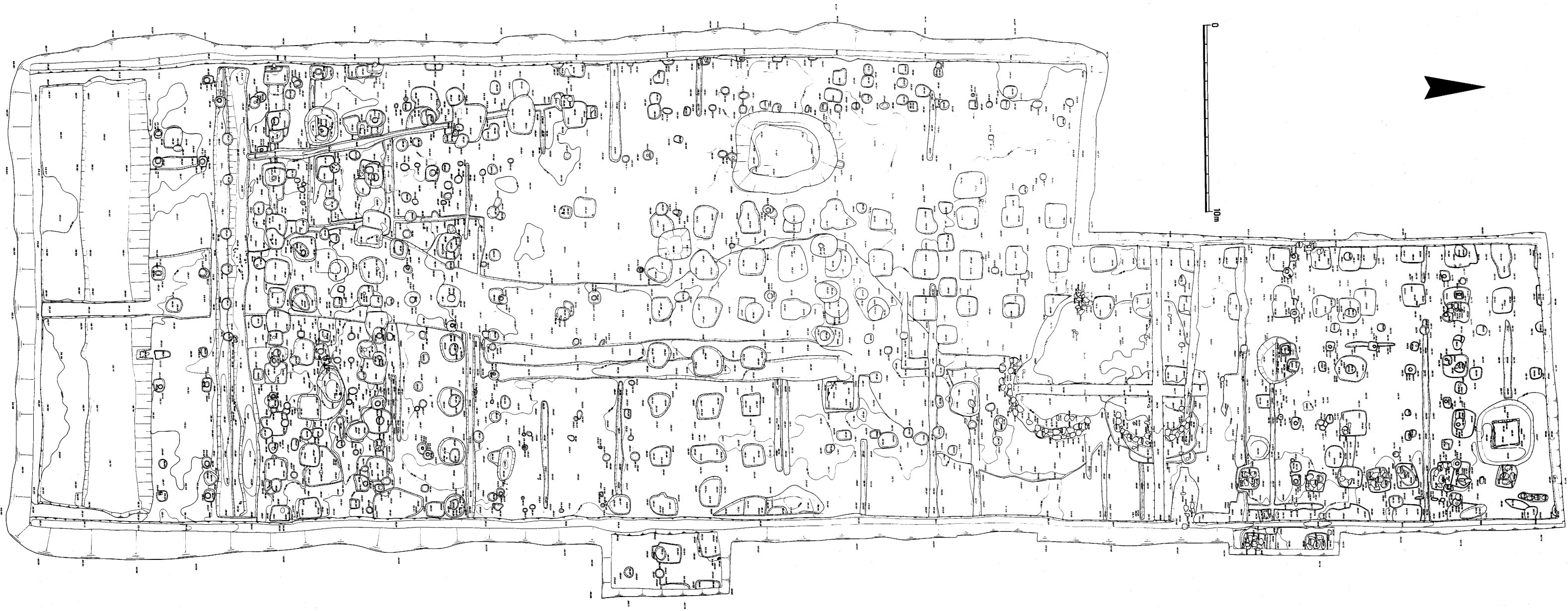




SD03, SE31・32・35出土木製品(1/2, 25:1/4, 51:1/8)



(1~4 : 1/1, 5~7 : 1/2)



第32图 遗构平面测绘图 (1/200)

平城京左京二条二坊十二坪
奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告

昭和59年3月28日印刷

昭和59年3月31日発行

編集 平城京左京二条二坊十二坪
水道局庁舎建設予定地発掘調査会

発行 奈良市教育委員会
奈良市二条大路南1丁目1番1号

印刷 共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路2丁目2番6号

